

ホット・ライン
江戸川遊歩



ここに収録した「ホット・ライン」は平成11年7月から平成31年4月までの208回、「広報えどがわ」に掲載された多田正見前区長の折々の随想です。

また「江戸川遊歩」は、同じく前区長が区政情報室長在任中の平成3年10月から平成6年3月まで、30回にわたり「広報えどがわ」に掲載された、区内魅力スポットの点描です。（一部、当時の情報サービス課職員、山口俊文が分担記述）

新しい令和の時代を迎え、「ホットライン」と「江戸川遊歩」を小冊子としてまとめました。本区の昭和・平成を振り返る資料としてお読みいただければ幸いです。

令和2年6月

経営企画部 広報課

ホ
ッ
ト
・
ラ
イ
ン

平成 11 年 7 月 10 日号

区長就任から、早二か月が過ぎました。いま、私は中里前区長が三十五年に亘り積み重ねた実績を受け継ぎ、その重責に身の引き締まる思いで日々を過ごしています。私の道のりは始まったばかりですが、これまでの行政理念や地域発展への熱い思いを改めて噛み締めつつ、自らの出発点にしたいと思っています。

さてこの二か月、地域の祭りや季節を彩るイベントが数多く行われました。その行事のたびに、会場のあちこちで皆さんの温かい励ましをいた

だきましたが、これこそ私にとって何よりの勇気の源となつていきます。また、皆さんの生き生きとした表情や尊い営みをみるにつけ、江戸川区



に育った心の風土をしみじみと感じずにはいられません。間もなく新しい世紀を迎えますが、この何ものにも代え難い風土の上に立って、皆さ

んと力を合わせ、一生懸命に真のふるさとづくりに取り組んでいきたいと思っています。

「天命に安んじて、人事を尽くす」という言葉があります。天命とは、すべからく幸せに通じるもので、これから様々な困難があるでしょうが、これ全て天命と受け止めて最善を尽くしていく覚悟です。

江戸川区長

多田正見

平成 11 年 8 月 1 日号

このひと月も、いろいろな出来事がありました。なかでも、最も嬉しいニュースは、行方不明となっていた小学二年生の女の子が、事件発生から五日後の早朝、無事に見つかり、両親のもとに帰ることが出来たことです。この知らせを聞いて誰もがほっと胸をなでおろしたと思います。最初に女の子を見つけた堀内功さんには、区の善行賞を贈らせていただきました。その堀内さんが、当時の心境を次のように語っておられたのが印象的でした。「声をかけ

るときに恐怖心がなかったと言えましょう。間違った見逃したら残りの人生を後悔しながら生きることになるだ



ろうと考えた」というのです。事件解決までには、警察当局はもとより、PTAや自治会など地元の方々がパトロー

ルやチラシ配りをするなど、地域を挙げた懸命な搜索活動がありました。堀内さんの勇気ある行動も、家に配られたチラシによって確信できたからであり、こうした多くの方々の温かな気持ちが生んだ結果であると思います。

長年にわたり培われた江戸川区の風土としての良き住民性が、見事に発揮された感動的な出来事でした。

江戸川区長

多田正見

平成11年9月1日号

暑さの中にも、ようやく秋の気配が感じられるようになりました。

さて、この夏も様々な催しがありました。先月十五日、旧中川で東京大空襲の犠牲になられた方々を追悼する灯籠流しが初めて行われました。この催しは、江東・江戸川の両区民の共催で、これが可能となったのも、両区を結ぶ「ふれあい橋」が出来てのことです。

江東区の亀戸地区と本区の平井地区は、旧中川で隔てられておりましたが、平成六年

の橋の誕生により、住民の交流が生まれ、深まりをみせてきたのです。

その中で、五十四年前の大空襲によりこの川で二千八百



名にのぼる人達が命を落とした当時の惨状を知る方から「戦争の悲惨さと平和の尊さを語り継ぐために、何か後世に残せないものか」という話

が出て、この意義深い催しとなったのです。

これには、旧中川の親水化整備の進展とともに、何よりもこれを成功させようという関係者の方々の強い熱意がありました。

現在、両区とも大きく発展をしておりますが、この姿も、筆舌に尽くせぬ惨状から出発したのです。その歴史を後世に伝えていかなければなりません。

江戸川区長

多田正見

平成 11 年 10 月 10 日号

夏の暑さがようやく過ぎた
と思ったら、はや十月を迎え
てしまいました。この間、区
内では九月の敬老の日を中心
に、長寿を祝う集いが各地で
開かれました。私も数多くの
会場に出かけましたが、皆さ
んの本当に生き生きとした姿
に心強いものを感じました。

いま、芥川賞作家である赤
瀬川氏の「老人力」という言
葉がよく使われますが、これ
は余分な肩の力を抜く自然体
の大切さを表現したものだと思
います。「もののあわれ」
とか「侘び（わび）」「寂（さ

び）」など高尚で情緒的なこ
とを体得できるのも、この老
人力のなせるわざではないで
しょうか。また、老人力は知
恵でもあります。知恵には聞



恵・思恵・修恵と段階がある
そうですが、熟年者の皆さん
の知恵は当然ながらこれまで
の人生経験で培った修恵であ
ることは間違いありません。

私は今後の社会に明るい展
望を抱いています。それは、
多くの熟年者がこの知恵を生
かし、地域づくりの中で大い
にその力を発揮していただい
てからです。これからも本区
の良き風土を生かし、みんな
で力を合わせ、長寿を喜び合
える社会、共に支え合える知
恵とパワーに溢れた（あふれ
た）社会を築いていきたいと
思います。

江戸川区長

多田正見

平成 11 年 11 月 1 日号

さわやかな秋を迎え、スポーツに、文化に、みなさん、楽しく充実した時をお過ごしのことと思います。

さて、ここ数週間、区内では、区民まつりを始め、葛西まつり、小松川平井ふるさとまつり、中央・一之江ふるさとまつり、区民運動会などの催しが相次いで行われました。また、今月に入ってから、北小岩まつり、東部地域祭などが予定されています。

とに住民のみなさんの地域を愛する気持ちが高まりをみせています。その心意気が形となり、どの会場も、明るい笑顔が満ち満ちています。



これらの催しが出来るのも、実行委員の方々の一方ならぬ御努力によるものですが、多くのボランティアの方々の活躍も忘れてはなりません。例

えば、区民まつりでは、自転車を黙々と片付ける子供達、会場内のごみを一生懸命に拾うお母さん方など、実に四百団体、二万人の方々が陰でその成功を支えてくれました。

こうしたすがすがしい姿こそ、長年にわたり培われた江戸川区の心の風土であり、真の文化の礎であるとしみじみ思います。

江戸川区長

多田正見

平成 11 年 12 月 10 日号

先月十九日、納税貯蓄組合連合会の主催による「中学生の税についての作文」の表彰式がありました。この催しは毎年行われているもので、席上、区長賞・税務署長賞・都税事務所長賞など、三十二名が表彰を受けました。

何よりもうれしいことは、応募点数の多さです。今年は、昨年より約五百点多い二千八百五十八点もの応募がありました。この催しは全国で行われておりますが、江戸川区は最も応募が多いと聞きました。

表彰作品を読ませていただきましたが、多くの作品が地域社会や暮らしを支えている税を身近な出来事に引き寄せて、自身の実感をもとにつづ



られています。どれも税への深い理解があり、また、素直な表現と前向きな考え方、そして地域や社会に対する温かい思いがあることに感心しま

す。秀作が多く、中学校の国語の先生など審査をされた方々もさぞや御苦労されたことと思います。

区内の中学生が、幅広く社会的な方面に目を向けることは素晴らしいことです。中学生はこれからの二十一世紀の担い手であり、このような子供たちが地域で育っていることを、本当に頼もしく思います。

江戸川区長

多田正見

平成12年1月10日号

明けましておめでとうござ
います。ミレニアム、二千年
問題など、今年は話題の多い
お正月でした。

さて、時は変わりなく流れ
ていきますが、人はそれを一
定の期間に区切って総括し、
次の時代に知恵として生かす
ことで、文明を進歩させてき
ました。

二千年という大きな節目の
時を迎え、改めて過去を見つ
め、新たな気持ちで次の時代
のあり方を考えることは大い
に意義のあることだと思います。

二十世紀、人類は幾度かの
大戦を経験し、地獄を見るよ
うな悲惨な歴史を繰り返しま
した。しかし一方で、今世紀
初頭に動力による初の空中飛



行を可能とし、さらに、その
後六十数年を経て月面到達を
するなど、科学の発達によっ
て不可能と思われていたこと
を次々に可能としてきました。

空を飛ぶという行為そのも
のは危険を伴いますが、文明
の進歩とは様々な危険や矛盾
を安全なものへと転換し、生
活に活用しゆく営みでもある
と思います。それは、マイナ
スをプラスへ転じゆく知恵の
歴史でもあります。二十世紀
最後の年を、平和で安全な
二十一世紀への弾みの年と出
来るよう、みんなで知恵を尽
くしていききたいと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 12 年 2 月 1 日号

新しい年も早一月が過ぎました。

今年は、介護保険の実施や清掃事業の移管などの都区制度改革が始まります。区としても大きな取り組みであり、定着のため万全を期しているところです。特に介護保険については、福祉先進区と言われる本区の基盤を活かし、期待に応えるべく準備をしてきました。

さて、21世紀を目前に、少子・高齢化が進んでいます。これにより、産業・経済の構造上の変化や、世代間負担、

雇用の問題などの課題が出てくるでしょう。従来の社会システムが変更を余儀なくされる時代になる、と考えられます。「若い」と言われる本区



も例外ではありません。

介護保険は、そのような時代の入り口に登場した一つの試みです。これは、介護事業を行政だけで担っていくこと

が困難な中で、全ての方がサービスを公平・公正に享受するためには、自助・共助が不可欠であり、故に保険制度で実施していこうという考えに基づいています。私は、このことは新しいシステムを生み出すための工夫であり知恵であると理解しています。

大きな課題ですが、意気軒昂に取り組んでいこうではありませんか。

江戸川区長

多田正見

平成 12 年 3 月 1 日号

先月、町会・自治会の役員、青少年育成や地域スポーツの指導者、ふれあい訪問員、善行者、統計調査員、保育ママなど、日頃、地域社会のために活躍されている方々の表彰式が相次いで行われました。

これらの活動は、地域愛に根ざし、お互いの幸せを願うという気持ちが根底になければ出来ません。いま、改めてこうした目で本区を振り返ってみますと、至るところで尊い活動の姿が満ち満ちており、大変にうれしく、誇らしく思っています。

4 月から、清掃事業が区の仕事となりますが、その受け入れにあたって、区内の三清掃事務所の所長から話を聞きました。三人とも「江戸川区



は本当に清掃事業がしやすい地域です。町会・自治会の活動がしっかりしているからですね。昨年から資源回収をはじめましたが、こんなにス

ムーズに出来たところは他にありません」と異口同音に語り、心の底から感心をしておりました。

清掃事業はまさに地域の協力なくしては出来ません。これからの社会は、こうした奉仕の活動がますます必要となります。これまでの土壌を大切にしながら、新たなボランティアの芽を育てていきたいと思っています。

江戸川区長

多田正見

平成 12 年 4 月 1 日号

三月は卒業式のシーズンでした。本区では、十七日に中学校、二十三日に小学校の卒業式が行われました。

私も、松江小学校の卒業式に出席しましたが、立派に成長した卒業生を目の当たりにして、大変にうれしく思いました。松江小学校は百二十年を超える歴史を持つ、区内で最も伝統のある学校のひとつであり、さすがに卒業生も在校生も立派な態度で、感心しました。

いま、教育は、不登校、学級崩壊など、様々な問題に直

面しておりますが、こうした姿を見ると、先生方が地域の方々とともに情熱を傾けて、子ども達の健やかな成長のために努力されていることを痛



感します。

平成十四年度から、公立学校の完全週五日制が始まります。そして、これからの新しい教育を目指して、総合的な

学習の時間が設けられます。

これは、子ども達の人格的な幅を広げるため、体験学習、道徳、ボランティア、国際交流など、学校が自由にテーマを選んで進めるもので、大いに地域の方々の力を借りて行うことが前提です。

二十一世紀は、人を育てるとは何かが問われる時代になると思います。皆で力を合わせて、次代の人材を育てていきたいと思っています。

江戸川区長

多田正見

平成 12 年 5 月 1 日号

江戸川区でも、4月1日からホームページを開設しました。早々に多くのメールをいただきましたが、その中から、二十代の女性のメールを拝借させていただきます。

「…江戸川区生まれ江戸川区育ちの私は、この区が大好きです。緑が多く、あらゆる施設が充実していて、とても住みやすいです。…ただ、最近気になることは、人口、交通量が急激に増え、少しごみごみしてきたことです。また、一人暮らしを考えていた友人に『江戸川区に住んだら?』

と勧めたところ『治安が悪いから嫌だ』と断られました。江戸川区に自信をもっていた私に、この発言はかなりショックでした。…それから、



駅前の路上駐車車の多さも気になります。ぜひとも治安向上を！お年寄りから子どもまで安心して、誇りを持って暮らせる区をつくってください」。

その通りです。これからも、みんなで努力をしてまいります。区長への手紙同様、メールもすべて読ませていただきますが、苦情、意見、提言など、大変参考になるものばかりです。インターネットという新しい情報手段によって、みなさんと行政との対話が幅広く出来る時代となりました。

江戸川区長

多田正見

平成 12 年 6 月 1 日号

先月、姉妹都市のオーストラリア・ゴスフォード市を訪問してまいりました。今回の訪問は、6年前、アーツセンターの中に本区が姉妹都市記念庭園を造りましたが、この度そのセンターの中心となるアートギャラリーが同市によって造られ、その完成式典に招かれたものです。

ゴスフォード市は水と緑に満ちた実に風光明媚（ふうこうめいび）なまちであり、市民は大自然の中で心豊かな生活を営んでいます。また、環境もしっかりと守られ、公園

や道路にごみが散らかっているような情景を目にすることもありません。

まちの姿は違っても、本区と相通じるものは人々の温か



な心の風土です。同市に住む日本の方に「市民の皆さんは江戸川区のどこが気に入ってくれているのですか」と尋ねたところ、即座に「人情です」

という答えが返ってきました。そうした心の結びつきに深い感銘を覚えます。

区民訪問団も今年で11回目となり、文化・スポーツなど、年々交流が盛んになっています。

温かい歓迎に改めて盟約13年目の成果を感じるとともに、深い信頼感で結ばれた交流に満足を感じ、帰ってまいりました。

江戸川区長

多田正見

平成12年7月1日号

世の中は不況から抜け出すことが出来ず、厳しい経済状況にあります。このような中で、人の温かい心が随所に見られるのが江戸川区であると思います。

区には、バザーの売上の一部やチャリティーコンサートなど、様々な形で浄財をお寄せくださる方々が後を絶ちません。中には、十円、五十円、百円の硬貨をびんにいっぱい詰めて、3年間、毎月同じ日に寄付をお持ちくださる年配の女性があります。お聞きするところによると、この方は3

年前に親類に呼ばれて江戸川区へ越してきました。出かけることが好きで、シルバーパスを使っていろいろな場所に行き、帰ってくると交通費の



半分をびんに入れるのだそうです。

「健康で楽しく毎日を送れるのも、シルバーパスのおかげです。この感謝の気持ちを

何かの形で表したい」と寄付を始めました。びんの中の硬貨が増えるのを見ると、「健康で良かった」と感じ、もっと増やそうと励みにもなるというのです。

いまでは、越してきた当初の心配もすっかり消え、江戸川区を自分のふるさとのように感じているとのこと。いつまでもお元気で楽しく毎日をお過ごしいただきたいと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 12 年 8 月 1 日号

介護保険制度が始まり、4 か月が経（た）ちました。このサービスを実際に利用している方は、熟年者のうち10パーセントほどで、多くの方々は元気で日々の生活を営んでいます。一方、高齢社会を迎え、いま老人医療費の増加が国や地方に大きな財政負担を迫り、それをいかに克服するかが盛んに議論されています。「願わくは、終生健康でありたい」というのは、誰にも共通の思いです。そのために、行政もスポーツ振興や熟年者の生きがい事業など

様々な健康施策を進めています。

さて、健康に関して、ジョギングを愛好する方に、先達て次のようなお話をお聞きし



ました。「江戸川区には、心地よい景色を眺めながら何十キロもまっすぐに走るこの道がある。それは、荒川、新中川、江戸川など、大

河川の堤防です。これぞ、まさに健康の道、こんなに多くの素晴らしい道を持っている区はどこにもありません」と。

話を聞いて、私もなるほどと認識を改めました。本区だけが持つ、かけがえのない自然環境をもっともと健康づくりのために活（い）かしたい、そのために区民の皆さんにも健康の道を大いに生活の中で活かしていただきたいと思います。

江戸川区長 **多田正見**

本区の介護保険制度は、医療部門の先生方、福祉の専門家、またサービス事業者など多くの方々の大変な努力があって順調にスタートすることが出来ました。課題はありますが、今後の推進の中で万全を期していきたいと思っています。

いま、この制度に関して、様々なお話を伺います。ある先生は、このように話しておりました。――これまでは病気を治すという観点から患者に接していたが、介護保険のかかりつけ医の意見を書くとなると、単に医療的見地だけ

ではなく、生活面万般を見る必要がある。体の不自由な人がいると、身長、体重、左利きか右利きかということまで正確に把握しなければならな

い。家庭での生活状態も知る必要がある。そのため、家にも出かけ、家族にも話を聞くことになる。――

「これは私にとってこれま

でない体験で、介護保険のお陰で医師として何か新しい目を開く機会を得た感じがします。大変であっても、私自身にとって大いにプラスになります」。

こうした話は、この先生ばかりではありません。介護保険は多くの方々の親身な努力で適切に支えられていることを考えると、何とも心強い 생각이 있습니다。

江戸川区長

多田正見

平成12年10月10日号

9月15日の敬老の日を中心に、区内各地で長寿を祝う催しが行われました。どの会場も、それぞれが自慢ののどや力作を披露する、活気溢れるものでした。皆さん、大変に若々しく元気で毎日を過ごしている様子がよく分かります。

いま、区で、新しい熟年しあわせ計画を策定しており、先日、その基礎資料としてアンケート調査を実施いたしました。その中で、自分が熟年という意識をするのはいつ頃かという問いに、大半の方が70歳代と答えております。ま

た、長寿をうれしいと思う年齢はという問いには、概ね80歳代という答えが返ってきております。意識の中でも、大いに若返っていることは確実



で、催しに集う皆さんの姿にそのことが表れているように思います。

さて、区内で百歳を超える方はいま30人おりますが、先

だって、その一人である小岩の男性のお宅にお祝いに伺いました。なんと好きな浅草や錦糸町界限を一人で歩くことを日課としているそうです。

自宅の風呂には入らず、毎日銭湯に行くとか。医者にもかからず、「わたしや、健康保険とは関係ない」というパワーみなぎる言葉に、何とも驚きを感じました。

江戸川区長

多田正見

平成 12 年 11 月 1 日号

先月8日、抜けるような秋空とはいきませんでした。暑からず寒からず絶好のお祭り日和に恵まれ、第23回区民まつりが盛大に開かれました。各会場はお祭りを楽しむ顔、顔、顔で満ち満ちておりました。

何しろ四百団体、二万人を超えるボランティアにより運営されるお祭りです。実行委員の皆さんのご苦勞ももちろんですが、多くの方々がこのお祭りの成功のために懸命に取り組んでいる姿に頭の下がる思いです。

今年も友好都市から大勢おいでいただきましたが、たまにたま来日中のゴスフォード市訪問団の皆さんも、スケールの大きなパレードに「オー、



ワンダフル!」を連発しておりました。区内で避難生活をされている三宅島の人たちもお招きしたところ、耐え難い苦難の中で暮らす皆さんに何

よりの安らぎとなったのでしょうか、「こういう機会に出会えて本当にうれしい。区民の方々の気持ちに身にしみます」という言葉をいただきました。

お祭りも地域によっていろいろありますが、この区民まつりは、江戸川区民の心意気を示す子々孫々に伝える文化として着実に育っていることを実感した一日でした。

江戸川区長

多田正見

平成12年12月1日号

先月22日、区内の産業振興に貢献されている方々にお集まりいただき、総合文化センターで「江戸川区産業賞」の表彰式を行いました。毎年、このように、多くの区民の皆さんとともにお互いの努力を称（たた）え合えるということとは、大変に幸せなことだと思います。

今日、経済は回復基調にあると言われるものの、中小企業の多い本区では依然として大変に厳しい状況が続いております。その厳しさを懸命な努力で克服している皆さんに、

改めて深く感銘をいたします。先日、総合文化センターで行われた「食文化の祭典」は、飲食業界あげてのもので、2日間で13万人が集まる盛大な



催しとなりました。また、総合区民ホールでの「産業ときめきフェア」には、100社以上の出展があり、これまた大変な賑（にぎ）わいでした。

自社製品の個性化への努力と、そこから生まれる無限の知恵を感じ、感動しました。これこそ、企業者の方々の逞（たくま）しき挑戦の姿そのものだと思います。

産業は、本区にとってかけがえのない宝です。それは、物をつくり、雇用を拡大し、地域の賑わいや活力を生み出す源であり、人々の生活向上の決め手であるからです。

江戸川区長

多田正見

平成13年1月10日号

新しい世紀を迎えました。宇宙の悠久の時間の中で、時は変わりなく流れていきますが、人類は文明を持つが故に、積み重ねた歴史を評価し、来るべき時代への展望を求めようとしています。

現代に生きる我々にとって、地球環境問題など山積する諸課題を考えると、21世紀は決してバラ色というわけにはいきません。

地球上には60億を超す人々が暮らしていますが、先進国としての文明を享受しているのは、その20パーセントに過

ぎません。多くは、内乱、戦争、自然災害など、衣食住に事欠く生活に苦しんでいます。先進諸国の一員として、我が国がこのまま今のような豊か



さを享受していていいのか、自問せざるを得ません。

経済界のリーダーの一人が、「足るを知る」経済という主張をしております。こ

れまで経済の発展だけを追求してきた結果、今日のひずみが表れています。そう考えると、これからは成長や規模の拡大だけではなく、ある枠組みの中でダイナミックに循環する新たな社会経済システムを目指すことが課題になるでしょう。地球上から、貧困や不幸を一掃し、すべての人が豊かで平和な暮らしが出来る百年にしたいものです。

江戸川区長

多田正見

平成 13 年 2 月 1 日号

私をはじめ中里前区長とお目にかかったのは、昭和47年7月です。都庁からの転勤で区民課長の職をいただき、就任のあいさつをした時のことです。

都庁の上司に、「中里区長は23区で最年少区長だが、大変な実力派だ」と聞いてまいりました。前区長は青い背広姿で、若いなというのが第一印象でした。その時、「区では君の思ったことを何でも出来るよ。早く江戸川区の水に慣れ、頑張ってほしい」という言葉をかけられたのを、今

も鮮明に覚えています。

以来29年間、様々な薫陶を受けました。前区長は私のかげがえのない恩師であり、人生を左右する運命的な存在で



した。非常に厳しい面と、人間の心に深くしみ入るような温かさを併せ持つ方でした。そして、自らの命を燃やし、独自路線を強く打ち出しながら

ら、「江戸川区を日本一に」という気概にあふれんばかりでした。まさに区政一筋に、多くの区民の力を糾合し今日の姿をつくり上げた、「建区の父」ともいうべき方でしょう。

前区長のご遺志をしっかりと受け継ぎ、みなさんとともに更なる地域発展のために努力することが、ご恩に報いる道だと思います。心から哀悼の意を捧げます。

江戸川区長

多田正見

平成13年3月10日号

水ぬるむ3月です。通勤途上、私は細い緑道を毎日歩きますが、そこには様々な植物が育っています。その木々に確実に若い芽が吹き始めました。季節に合わせて、自然は正直に命の証（あかし）を私たちに見せてくれます。そこに何か大きな営みの力を感じ、感動を覚えます。

3月は卒業のシーズンですが、それはまた次なるステップへの弾みの時でもあります。お勤めの方は転勤もありましょう。いささかの不安を抱きつつ、新たなステージへの

期待も大きいことでしょう。去る2日、グリーンパレスで、区立中学校心身障害学級の卒業を祝い励ます会がありました。進路先である事業所



の方々や都立養護学校の先生方、保護者や心身障害者の関係団体の皆さんなど、2000名以上の方々が24名の生徒に、これからも気持ちを新たに頑

張って欲しいという願いを込めた集いでありました。

子どもたちは元気いっぱい、希望と期待に胸をふくらませていたようでした。帰り際、一人ひとりに握手をして別れましたが、「ありがとうございます」という挨拶（あいさつ）を受け、この子どもたちの将来が本当に幸せで充実したものでありますように、と願わずにはいられませんでした。

江戸川区長

多田正見

平成 13 年 4 月 1 日号

江戸川区にまたひとつ名物が誕生しました。世界で2番目に大きい大観覧車です。3月17日のテープカットの後、私も初乗りで17分間の壮大かつ快適な空中散歩を楽しみました。そして、臨海部の広大な風景を眺めながら、この地域の歴史を思い、何か大きな感慨を覚えました。

昭和40年代の中ごろまで、このあたりは一面が海で、荒川と江戸川の河口となる海域は真水と海水が入り混じる絶好の漁場であり、海の幸の宝庫と呼ばれていたのです。多

くの方々が豊富な魚、のり、貝を採って生計を立てていました。ところが、高度成長期、経済の成長とは裏腹に海が汚れ、ついには漁場を放棄する



という苦しみを味わったのです。

しかし、この海に再び豊かな自然を取り戻そうと、区あるいは地域を挙げての懸命な

取り組みが行われました。東京都もこのことに応えて、臨海公園を見事な都会のオアシスとして再現してくれました。いわば、この地域は、30年にわたる江戸川区民の自然回復へのひたむきな努力の象徴とも言えるでしょう。首都圏のみならず全国の方々に、いつまでも心の豊かさや潤いを与える公園であることを願って止（や）みません。

江戸川区長

多田正見

平成13年5月1日号

ゴールデンウィーク、若葉が大きく深呼吸する季節です。区内の木々も輝くような装いに身を包み、私たちの目を楽しませてくれています。そして、どんな「古木」にも、若い命が宿っていることを感じます。最近、くすのきクラブの役員の方からお手紙をいただきました。その中の一節です。「高齢者よ、前進せよ！一人の老人は図書館1館分に相当するのだ。頑張れ！」。友人から寄せられた言葉だそうですが、その知恵の集積こそ、地域のかげがえのない財産で

す。

介護保険がスタートして1年が経（た）ちました。現在、65歳以上の人口は8万人、そのうち認定者は8000人、



ねたきりかそれに近い方々は2400人です。つまり、大多数の方々は介護サービスとは無縁です。むしろ、支える側の一員であることを幸せと

考えなければなりません。

本区のシルバー人材センターは、会員数3000人、年商11億円以上と、日本一の実績を誇っています。この実績も、多くの区民の期待と信頼、これに応（こた）える会員の心意気の証（あかし）でしょう。

区内に満ち溢（あふ）れる若々しい緑、その中で区の木くすのきは一層輝いて見えますが、本区熟年パワーの象徴とも言えるでしょう。

江戸川区長

多田正見

平成 13 年 6 月 1 日号

鶴岡市と友好都市の盟約を結んで20年が経(た)ちました。先月25日、かの有名な天神まつりの日に、旧藩校の史跡「致道館」で、記念の交流会が催され、出席してきました。20年前、故中里前区長がこのまつりにあわせて同市を訪ね、盟約を結んだことにちなんだ集まりでした。

富塚市長さんをはじめ、市の各界を代表する方々の暖かい歓迎を受け、様々なお話をうかがいましたが、友好の絆(きずな)の深さ、実りの素晴(すば)らしさを実感する

ことができました。

何といっても、戦時中の疎開がもとでのご縁です。当時、子どもたちを引率した玉主先生の手記には、「温泉街に入



るや、村民総出の大歓迎、老いも若きも日の丸の旗を手にして、出迎えてくれた。家ごとに国旗を掲げ、暖かい眼に涙をもって迎えてくれた。ど

の旅館のお客さんも道路に出、涙と拍手で歓迎してくれた。3年以上の学童とはいえ、まだ両親の膝下を離れたことがなかった子どもたちへの、限らない同情と涙の拍手であった」とあります。

不忘其恵(その恵み忘れず)、前区長が盟約式で鶴岡市に贈ったこの言葉は、いまも市長室に掲げられています。

江戸川区長

多田正見

平成13年8月1日号

「歩きたい この道このま
ち 夢いっぱい」

8月10日の「道の日」にちなんだ標語の今年の最優秀賞は、清新第二小学校5年の菅沼かほりさんの作品に決まりました。見事な表現力です。

また、この「道の日」に、小岩第二中学校の生徒さんたちが、近隣の道路清掃に長らく貢献したということで、東京都建設局長の表彰を受けることになりました。このところ毎年のように区内の学校が受賞していますが、何か人の役に立ちたいという健気（け

なげ）な気持ちの表れで、立派なことだと思えます。

手塩にかけて身近な公共物を大事にするという面では、公園の花壇の手入れ、実のな



る木やカブトムシの育成など、子どもから熟年者まで既に2000人の方々がボランティアとして汗を流してくれています。本区の良き心の風

土の表れであり、こうした活動が身近な暮らしの中で随所に見られるようになりました。

先月15日の船堀区民ホールでのボランティアフェスティバルでは、多種多様な67団体の皆さんが自らの活動をアピールし、心意気を示してくれました。

江戸川区をボランティア先進区として盛り上げていきたいものです。

江戸川区長

多田正見

平成 13 年 9 月 1 日号

さわやかな9月の風とともに、敬老の日がやってきます。ありがたいことに、日本は世界一の長寿国です。長寿社会とは、文化成熟の証（あかし）であり、こんなに素晴（すば）らしいことはありません。熟年者がいきいきと人生を享受する、これこそみんなの願いです。熟年文化、長寿パワーに大いに期待します。

ところで、本区では今年から長寿入浴券の配布をやめて、健康長寿協力湯制度を始めました。限られた枚数の無料券を差し上げるより、200円

のご負担となりますが、何回でも利用できるほうが良いのではないかと考えたからです。もちろん、区内76軒のお風呂（ふろ）屋さんのご協力をい



ただいてのことですが、滑り出しは上々、お客さんも大分増えたということです。

さて、今回、敬老の日のユニークな企画として、子ども

たちによるボランティア「お背中流し隊（たい）」を募集しました。これには小学校14校、中学校25校から300人、高校、専門学校からも30人が応募してくれました。何とも健気（けなげ）な心意気にうれしくなりました。

熟年者の皆さんも「今日の日本を築いてきたのは俺（おれ）たち私たちなのだ」と、胸ならぬ背中を張ってみせてほしいものだと思います。

江戸川区長

多田正見

平成13年10月10日号

江戸川区には心やさしい子ども達（たち）がたくさんいるなあと思う、しみじみ嬉（うれ）しくなりました。

先月の敬老の日、区内76軒のお風呂（ふろ）屋さんに、小中高生330名から成るお背中流し隊（たい）が出向きました。新聞各紙にも報道され、多くの反響が寄せられました。その一部を紹介します。

子ども達の感想。「いろいろな人に『気持ちいい』と言ってもらって嬉しかったです。お風呂からあがった人、ソーラン節を踊ってみせまし

た」「一生に残るよい体験になったと思います」「断られることもあるけど、背中を流したとき、笑って『ありがとう』と言われると、『流して



よかったな』と思います」

お年よりから。「女子小学生に背中を流していただきました。心配りやマナーなど大変よく、近頃（ごろ）になく

嬉しく感じ、お礼の筆をとりました」

お風呂屋さんの御主人から。「老若のふれあいの中で敬老の日にふさわしい行事でした。長生きするといろんなことがあつて嬉しいという言葉もありました」

先生から。「純真さ、温かさ、健気（けなげ）な気持ちを感じられ、すてきな子ども達がたくさん育っていることが改めてわかりました」

江戸川区長

多田正見

平成 13 年 11 月 1 日号

「人間はなぜ戦争をするの」と身内の小学生に問われて、答えに窮してしまいました。「戦争か平和か」と聞けば、世界中のどの人々も例外なく「平和」と答えるに違いありません。それなのに、民族や国家あるいは宗教という枠組みによって、現実には争いが絶えることはありません。文明の華が咲き誇っているにもかかわらず、この地球上でいま起きている様々な事件をどのように説明すればよいのでしょうか。

米国での言語に絶するあの

憎むべきテロ、頻発する炭疽（そ）菌事件の恐怖、一方で、アフガニスタンの戦場で罪のない多くの子どもたちの命が危険に晒（さら）されている



のです。

アフガン国内で食糧不足に悩む人々の数は500万人から700万人とも言われます。もちろんこうした事態を一刻

も早く改善し、許しがたいテロを根絶するため、わが国を含め世界の国々が立ち上がっていることも事実です。日本から多くの人たちにより寄せられた資金によって、小麦粉などの食糧がこの地に送りこまれています。

私たち人類は、お互いの英知を信じて、世界を破滅から守るために自らの努力を惜しんではなりません。

江戸川区長

多田正見

平成 13 年 12 月 1 日号

この秋、周年記念の祝賀の会にお声をかけて頂(いただ)いたところが随分ありました。区立小中学校9校をはじめ、例えば納税貯蓄組合や江戸川区赤十字奉仕団50年、江戸川区看護学校40年、篠崎少年野球連盟30年、葛西ソフトボール連盟や江戸川南リトルリーグ20年など、まだまだたくさんありました。

区内では、こうした行事がもっと数多く行われていると思います。戦後何十年という年を経て、多くの人たちが世のため、人のため、あるいは

自らの生活向上のために思いをひとつにしてつくり上げてきた様々な団体が、区内には何千と存在しています。そして今なお発展・充実を目指し



て貴重な活動が続けているのです。

「継続は力なり」と言われますが、そこには継続を生み出す力もあるはずです。それ

は人々の和であり、連帯であり、協調ではないでしょうか。こうした心の絆(きずな)がなければ継続は成り立つものではないでしょう。

江戸川区にはこのような絆の輪が数多く存在し、それらの総和が素晴(すば)らしいコミュニティを形づくっているのだと思います。

「下町の人情」という言葉もありますが、それは人々の奉仕や地域愛から育った無形の文化なのでしょう。

江戸川区長 **多田正見**

平成 14 年 2 月 1 日号

江戸川区の新成人は立派です。今年も成人式は本当に見事でした。本区で二十歳を迎えた人は約7000人、うち4300人が文化センターに集い、新たな人生の門出を祝いました。

午前、午後の2回の式典とも満席で、途中退場者もなく水を打ったような静けさの中で、来賓の方々のお話に耳を傾けていました。代表二人の抱負の言葉も、若々しく実に頼もしいものでした。参列されたお客様の多くが、この情景に感嘆の声をもらしたほど

です。昨今、荒れた成人式の報道をみるにつけ、我が区はどうかと心配されている方も多いと思いますが、胸を張ってください。



いま、成人式のやり方が云々(うんぬん)されますが、果たしてそうでしょうか。本区では、町会、子ども会、PTA、スポーツ団体など、地域

をあげて子どもたちを健全に育てようという気運と愛情が満ち満ちています。こうした土壌があるからこそ、立派な成人式という形で表れるのだと思います。当日、少年少女合唱団、PTAコーラスをはじめ、300人近いボランティアの方々の方々の多彩な催しも、実に温かいではありませんか。とにかく、今年に入って、最高に明るい話題です。

江戸川区長
多田正見

平成 14 年 3 月 10 日号

子どもたちにとって大きな節目となる入園入学の季節を迎えます。お父さんやお母さんにとっては、この時期、我が子の成長を改めて実感し、喜びもひとしおのことでしょう。

さて、この4月から公立の小・中・高等学校で学校週5日制が始まります。子どもにとっては月2日の休みが増える訳ですから、大変貴重な時間です。世間では増えた休みをどう過ごさせたいのか、地域の受け皿づくりが盛んに言われます。いま、本区の受

け皿をみると、少年野球やサッカー、柔剣道、音楽やバレエ、お茶やお華、書道など、様々なものが存在します。しかも、指導に携わる方々は子



どもたちが積極的に活動に加わることを心から望んでいます。うれしいことです。

ところで、この際、肝心なことは、お父さんやお母さん

が他人に任せるという発想ではなく、貴重な時間を我が子のためにどう生かすか、真剣に考えていただきたいということなのです。地域でのスポーツ・文化活動もよいでしょう。ほかに、親子で読書、ジョギング、写生、映画鑑賞など、いろいろあります。子どもたちが本当に豊かな時であったと思える機会にして欲しいと願っています。

江戸川区長

多田正見

平成 14 年 4 月 30 日号

世はＩＴ時代、個人・企業を問わず、相当な勢いでパソコンが普及しています。区もホームページを開いて２年になります。情報手段が飛躍的に拡大し、便利になりました。この頃（ごろ）、区のホームページにメールをくださる方が大変に増えています。区長への手紙も手書きのものと匹敵するほどになりました。性別・年齢・職業も様々で、あらゆる層に広がっています。

昨年度、国の方針にのっとり、江戸川区でもＩＴ体験教

室を大々的に行いました。区民施設や学校を利用して、９３９講座を開きましたが、参加者は実に１万５５００人にのびります。その内訳をみ



ると、女性が７割を占めています。年齢別では４０代以上が７５％で、中高年の方々がしつかりと取り組んでいる姿がうかがわれます。パソコンの利

用方法では、インターネットによる情報検索が第一位で、電子メール、文書作成・表計算と続きます。

ただし、インターネットは万能ではありません。ある有名な作家が「インターネットは便利であるが、本を読むことは意味が違う」と言っていました。が、そのとおりで、インターネットばかりに頼らず、読書も忘れずにしたいものです。

江戸川区長

多田正見

まもなく梅雨の季節を迎えます。毎年この時期、東京消防庁では、台風などに備えて総合水防演習が行われます。今年は江戸川河川敷を会場に、三多摩を含め全都から消防署員が集まり、地元の消防団員とともに大々的に訓練が行われました。まことに見事な訓練であり、日頃（ごろ）の成果を余すところなく披露してくれました。

ところで、最近の江戸川区は水害に強いまちになり、台風の怖さを経験している方は少なくなりました。しかし、

いくら安全度が高まっても、災害に対して油断はできません。濁流が押し寄せたり、地下鉄に水が入り込んだらどうなるか。そう考えると、常の



備えが大切です。昨年、久しぶりに台風が連続して東京を通過しましたが、幸い被害はほとんどありませんでした。しかも、台風15号では

区内の河川で水位が最高3・7mにも上昇したのです。護岸の整備が進み、この程度ではびくともしなくなりましたが、昔でしたら、大変な被害を蒙（こうむ）ったことでしょう。3・7mといえば、天井よりも高いのですから、それら恐ろしい気がします。

今回は水防演習でしたが、改めて、あらゆる災害に、住民ともども備えを固めなければなりません。

江戸川区長

多田正見

平成 14 年 7 月 10 日号

区内の養護学校を卒業した子どもたちが、卒業後も手をつないで頑張ることができるように、白鷺養護学校をお借りして、月一回フrendリースクールが開かれます。子どもといっても高年齢の人は40代で、様々な年代の人たちです。区のスクールとは違うものの、お世話くださる人は全(すべ)てボランティアで、元養護学校の先生や地域の人たちです。長い人は30年近くも続けてくださっています。

梅雨晴れの日曜日、このスクールの行事として、あすな

ろ会が、じゃがいも掘りを企画し、学級生を楽しませてくれました。あすなろ会は、青少年委員のOBで、今もいろいろなボランティア活動を続



けているグループです。じゃがいも畑は地元の人のご好意で提供していただき、毎年行われています。私も参加し、学級生と一緒に大汗を流して

掘ったお芋をその場で蒸していただきました。蒸したてのお芋がこんなにおいしいとは驚きでした。磯辺(いそべ)焼やスイカのサービスもあり、学級生たちも大喜びでした。今年で10回目を数えますが、楽しいな行事のひとつです。地域をあげて支えあう温かい気持ちに身にしみるようなひとときでした。

江戸川区長

多田正見

盆踊り、納涼祭、団地まつりなど、梅雨明けから、夏の催しが区内各地で行われています。遠いふるさとへの郷愁をかみしめながら、また、いま住むこの地で情の通ったお付き合いを深めたいという思いで、皆さん楽しんでおられます。

お世話くださる方々は、朝からやぐらを組んだり、模擬店の準備をしたり、暑い中で大汗をかきながら、大変なご苦労をされていることでしょう。とくに、子どもたちにとっては、この地がかけがえのな

いふるさとはです。子どもたちの気持ちの中に、良きふるさとの思いを残してあげたいという願いも込められているのだと思います。その一生懸命



な姿には、本当に頭が下がります。

ところで、この頃（ごろ）、区内で和太鼓の愛好者が多くなり、こうした催しに連日

引っ張りだこです。メンバーには、小・中・高校生などの若い人がたくさんいます。この子たちの颯爽（さっそう）とした撥（ばち）さばきと心地良い太鼓の響きを耳にすると、とても頼もしい感じがします。思えば、盆踊りも和太鼓も日本人の心の中に営々と引き継がれた心の文化です。こうした文化が都会の中で盛んであることは、本当に素晴らしいことだと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 14 年 9 月 1 日号

この夏も、いろいろな思い出を残して過ぎていきました。気候的には、梅雨は梅雨らしく雨が降り、梅雨明け後は炎暑が続く夏らしい夏であったと思います。

梅雨明け近くの二つの台風は各地に被害をもたらしましたが、たつぷりと降った雨により、水飢饉（ききん）の心配がなくなりました。

花火大会の前日と翌日には激しい夕立がありました。が、幸運にも当日は絶好の天気に恵まれ、市川側とあわせ約 140 万の人々に花火の醍醐

味（だいごみ）を味わっていただきました。インターネット情報によると、この観客動員数は全国花火大会のランキング第 1 位だそうです。観客



席も充分で、しかも幅 500 メートルにわたり一気に打ち上げることのできるワイド花火は、江戸川河川敷という格好のステージがあればこそ

ものです。

この不況下で、協賛金が集まるか心配しましたが、予定額をやや上回るご協力をいただきました。このことは、長年培った伝統の行事を何としても成功させたいという、まさに区民の心意気の表れです。今年で 27 回を数える花火大会は、江戸川区の他に誇り得る文化でもあります。この心意気の文化をいつまでも大事にしたいと思います。

江戸川区長
多田正見

平成 14 年 10 月 10 日号

13 日(日)は区民まつり、今年で 25 回目を迎えます。このお祭りは、400 の参加団体、2 万人のボランティアによって成り立つ、区をあげての大イベントです。6 月 10 日の第一回実行委員会以来、資金・警備・出展・ステージなど 7 つの部会を中心に、実に多くの方々がその役割を果たし、いま最後の準備に取り組んでくださっています。

このお祭りを陰で支えてくださる方々のことを思うと、本当に頭が下がります。自分が楽しむだけでなく、むしろ

大変な思いをして、ひたすら地域や人々のために役立とうとする尊い気持ちに、心打たれます。しかも、その方々から、「これが私たちの喜びで



あり、張り合いなんですよ」という言葉を聞くと、何とも頼もしく、うれしくなってきました。長い歴史の中で築き上げてきた区民まつりを、

区民の心意気の文化として守り育てていこうという気持ちの表れでしょう。

区民まつりにはいろいろな出会いがあります。人との出会い、様々な物産との出会い、何かをともに楽しむ出会い、それらの出会いこそ、私たちの心を豊かにしてくれるものでしょう。さて、今年はどんな出会いを楽しむのでしょうか。

江戸川区長

多田正見

平成 14 年 11 月 1 日号

先日、NHKのラジオでこんな興味深い話を紹介していました。アメリカのある学者が友達の数と病気の関係について調査したところ、「友達が多ければ多いほど、病気にかかる割合が少ない」というデータが出ているという主旨の話です。考えてみると、2万人の会員がいるくすのきクラブは、熟年者にとって友達づくりの格好の場であり、組織そのものが健康なおおいに役立っていると思うのです。

第30回さわやか体育祭が、先月24日に陸上競技場で行わ

れました。朝からの雨模様で心配しましたが、開会式には雨もあがり、実に4000人の熟年者が参加しました。加えて、かわいい幼稚園児や保



育園児、高校生、各種団体の方々など、合わせて7000人による三世代交流の大体育祭が繰り広げられました。熟年パワー溢（あふ）れる、こ

うした行事が30年も続けられるのは、くすのきクラブがあるからだと思います。カルチャー教室やリズム運動が盛んなのも同様です。

これらは、本区ならではの熟年文化の大きな実りです。もし、熟年者のどなたかに「健康づくりの秘訣（ひけつ）は」と問われたら、一も二もなく「くすのきクラブに入ったら」と答えるでしょう。

江戸川区長

多田正見

平成 14 年 12 月 10 日号

「税にはいろいろな使われ方がある。(中略)全部私たちに関係あるもの。税は法律で義務づけられたことだけど、税がなかったら大変なことになっていただろう。ありがとうと言いたい。」

私が今、普通に学校に通えるのも税のおかげ。そしてそれに気付いたのはこの作文のおかげ。税のことを考えるチャンスだった。税はぐるぐる回って結局私のところへ来た。(中略)

ふと気がつくときわりには税で結ばれたみんなの輪がで

きていて私も家族もみんな入ってました。
税に込められたおもいは感謝と温かさでいっぱいでした」



これは、納税貯蓄組合連合会主催の「中学生の税についての作文」コンクールで最優秀賞・区長賞に輝いた江戸川女子中学校3年、大熊佐矢子

さんの作品の一節です。3000点近い応募の中から入賞作品50編が選ばれましたが、いずれも力作ぞろいで感服しました。

中学生のころの感覚は、社会を素直に見つめ、純粹に物事がどうあるべきかを捉(とら)えます。中学生が正しくものを見る目を養って大人になることで、社会はより良いものになるでしょう。立派な中学生に心から拍手を送ります。

江戸川区長

多田正見

平成 15 年 2 月 1 日号

ある障害者施設の成人式で、一人のお母さんがこういう話をしていました。

「健全なお子さんを持った方に比べ、私はこの子からほめるかにたくさん喜びをもらいました。お母さんたちが子どもの塾や勉強に悩んでいると聞くと、何でこんなことで悩むのかと思いました。私はこの子が初めて『お母さん』と呼んでくれたとき、また自分で靴下を履くことができたとき、心からうれしさをかみしめたものです。この 20 年、日常の何気ないことでどんな

に私を喜ばせてくれたか知りません。この子のおかげで、人一倍多くの幸せを味わわせてもらいました」



心を打たれる話です。幸せの感じ方は、人により随分違うということを改めて思いました。障害のある子を持ったことを喜びに変えていく力強さ、

人の不思議な心の健気（けなげ）さ。生きる希望や勇気は、こうした幸せ感に裏付けられるでしょう。

今年は区内に 6885 名の新成人が誕生しました。例年のように総合文化センターは満席で、式典は整然と行われました。国歌・区歌を声高らかに歌い、壇上でのスピーチを真剣に聞く若人たちから、私も大いに喜びをいただきました。

江戸川区長

多田正見

平成 15 年 3 月 10 日号

「箸（はし）とらば、天地御世（あめつちみよ）の御恵（おんめぐ）み、祖先や親の恩をあじわい、いただきます」戦時中、国民学校で私達（たち）はこのように言ってから、母がつくってくれた弁当を食べたものです。既に食糧難の時代で、戦後はさらに厳しくなり、弁当を持ってこれない子ども達も続出し、昼休みは自宅に帰されました。このころは、とにかく一粒のお米にも感謝を込めるということが幼いうちから徹底されていました。

先日、江戸川区の高校生がある新聞に「もったいない食べ物（食べ物の廃棄）」と題する一文を寄せていました。大量に捨てられる食べ物を指して、戦後



のわが国の食糧難、そして世界で起きている食糧危機と比べ、簡単に粗末にする行為に反省を迫っていました。私にもっともな意見です。私

達の世代の感覚を言い当てているようにも思います。さらに、「こうも言っています。『食べ物への感謝の気持ち』、人間が生きるために犠牲となる『動植物の命の尊さ、大切さ』のこともっと考えてもらいたい気がする」。大事なことです。

いま、江戸川区の学校給食でも「いただきます」という言葉の持つ意味を、このように子ども達に教えています。

江戸川区長

多田正見

平成 15 年 4 月 10 日号

「今年もいい卒業式だったなあ」という言葉が、区内のどの小・中学校からも聞かれたということでした。

私は瑞江二中に伺いましたが、生徒たちの態度は、この上なく頼もしく見えました。代表の「送ることば」、「門出のことば」は実に立派で、この中学生をひとまわり大きく感じました。最後の「仰げば尊し」、「蛍の光」、また校歌斉唱も男子生徒の声がよく響き、何ともすがすがしさを覚ええました。

式終了後は女子生徒ばかり

か男子生徒まで感極まって肩を抱き合う光景に、3年間の学校生活をうかがい知ることができました。校長先生と一緒に式場を出ると、一人の男



子生徒が涙をこぼしでぬぐって泣いていました。「どうしてそんなに悲しいの」と、先生。「だって別れるのが淋(さび)しいんです」と、生徒。「そ

れなら留年するか」と、校長先生。この日は教職員のみなさんにも感無量なものがあつたでしょう。

桜の花のもとで新学期が始まりました。多く子どもたちが未来に歩み始めます。イラク戦争が私たちの心に重くのしかかる中で、この子たちに優しさと逞(たくま)しさ、他の幸せを願う心、平和への想いが強く大きく育まれることを念じてやみません。

江戸川区長

多田正見

平成 15 年 6 月 1 日号

行く春を惜しむ間もなく初夏がやってきました。4月から5月にかけて、深まる新緑がまちを被（おお）い、咲き誇る草花が私たちの心を和ませてくれています。その中で、各地で様々な催しが繰り広げられ、大変な盛り上がりを見せています。どこへ行っても、例外なく幼稚園・保育園の園児や小・中学生が大活躍をし、家族や地域の方々が心からの拍手を送るなど、健やかに育つ子どもたちの姿を目のあたりにすることができました。

先日、区外に住むあるお医

者さんが「私の区では地域の活動をほとんど見ることができません。それにくらべ江戸川区は町会をはじめ子ども会や老人会など、地域の組織が



ものすごく活発ですね」とおっしゃっていました。この方は区内に仕事場を持つておられますが、私たちが当たり前のように思っていることが

実は誇るべき地域の姿であることを教えていただきました。長年進めてきた「ゆたかな心地にみどり」の精神が実りつつあると実感します。

最近、治安問題など気になることもありますが、各地でわがまちを愛する心をどこまでも貫いていこうとする心意気があふれ、このうえない頼もしさを感じずにはいられません。

江戸川区長

多田正見

平成 15 年 7 月 10 日号

7 月は「社会を明るくする運動」の強調月間です。私も実施委員長を仰（おお）せつかり、1 日の朝、平井駅頭でみなさんと一緒にキャンペーン活動を行いました。この運動は、保護司会と更生保護婦人会が中心となり、各種団体の協力を得て行うものですが、既に 53 年も続けられています。その長い努力の積み重ねには、本当に頭が下がります。

保護司といえば、犯罪者の更生に人知れず努力し、あわせて犯罪防止の活動に地道に取り組んでいる方々です。

様々な人生の中で不幸な巡り合わせにより罪を犯した人が、社会で再び意義ある人生を全うできるよう、応援するのであります。そこには大変な苦勞があ



るはずですが、保護司の方々はプライバシーの問題から、係（かか）わった人のことを他に話すことはありません。ただ、人には様々な事情があ

り、決して一筋縄ではいきません。時には、その当事者の置かれた運命や環境に憤りさえ感じることもあるといいます。深い人間愛なくして、できるものではありません。

月間を通し、他の幸せを願う合う温かい地域の土壌づくりに日々活動する思いが、区民のみなさまに一層強く受け止めていただけることを願っています。

江戸川区長

多田正見

平成 15 年 8 月 1 日号

読書教育に熱心な第七葛西小学校が、この春、読書活動優秀実践校で文部科学大臣表彰を受けました。この学校では、朝の読書活動、地域図書館との連携、保護者やボランティアによる読み聞かせなど、地域・家庭ぐるみの活動を続けてきました。図書館から借りた本は年間4000冊にも及んでいます。子どもたちが自主的に読書量や時間の目標を立て、その達成に取り組む活動も活発です。私も幼いころ、「書物は人生のどんな困難も解決してくれる」と教え

られました。振り返ると、読書がただけ役に立ったか計り知れません。

話は変わりますが、区内小学生のバレーボールチームが



今月4日からの全国大会に出場します。女子のひまわりバレーボールクラブは4回目の出場で過去2回の優勝、男子の小岩クラブは6回目の出場

です。いずれも名門チームで、熱心な指導者に応（こた）え子どもたちも頑張り抜いてきたわけです。

また、今週、青少年の翼事業で中学・高校生59名が元気にニュージーランドとカナダに旅立っていきました。

長崎や渋谷で青少年のショッキングな事件もありますが、区内の子どもたちの目覚ましい活躍を聞き、さわやかな思いに満たされます。

江戸川区長

多田正見

平成 15 年 9 月 1 日号

この夏も様々な話題を残して過ぎていきました。近年には珍しい冷夏であり、宮城での地震、九州や北海道での大雨被害など、気の毒な方々もおられました。農作物への影響も心配されるところです。その中で、江戸川区花火大会が例年にもまして盛大に行われました。幸運にもその日は真夏の晴天で、このうえない風向きに恵まれ、両岸140万の観衆がその圧巻に酔いしました。まさに、区民の心意気の花火でもありました。また、天候にもめげず、各地

で納涼の盆踊り大会が開かれ、子どもたちに思い出を残してくれました。

さて、最近、区では0歳から6歳のお子さんをもつ保護



者を対象に「子ども家庭実態調査」を行いました。その調査によると、「江戸川区は子どもを育てやすい」と答えた方が実に95%、また「住み続

けたい」という方も92%と、総じてこの地に満足する若い世代の方々が多く、大変心強い思いがします。区も子育て支援には大いに力を入れていますが、そのことを超えて地域のみなさんが取り組む様々なふるさとづくり、また営々とつくり上げてきた水と緑の素晴（すば）らしい子育て環境、これも65万区民の心意気の表れでしょう。

江戸川区長

多田正見

平成 15 年 10 月 10 日号

先月の敬老の日、区内の浴場は恒例のお背中流し隊の子どもたちで賑（にぎ）わいました。昨年は500名でしたが、今年は一挙に700名と志願隊員が増えて頼もしく思いました。子どもたちも「お年寄りに喜んでもらってうれしかった」「いろんな話が聞けて勉強になった」と、楽しんでいました。

いま区内の浴場は73軒、内風呂（ぶろ）の普及や都市化により、大変厳しい経営環境にあります。しかし、区民の健康保持や公衆衛生の立場か

ら、これ乗り越えようと頑張ってくれています。区は2年前まで65歳以上の方に長寿入浴券を配布していましたが、お風呂屋さんを熟年の方々の



元気回復の場として大いに活用していただこうと、健康長寿協力湯制度に切り替えました。2000円の負担をお願いしますが、回数を制限せずお

入りいただくものです。お客さんはぐんと増え、熟年の方々に喜んでいただく一方、お風呂屋さんも賑わうという一挙両得の結果となりました。お背中流し隊も一役買っているわけです。

昔、銭湯と呼ばれた時代、私も大入りの浴場で一日の汗を洗い流し爽快（そうかい）な気分でくつろぎました。そんな雰囲気をみんなで盛りたてていきたいものです。

江戸川区長

多田正見

平成 15 年 12 月 1 日号

「毎日あたりまえのように捨てているゴミの処理にかかる費用、あたりまえのように歩いている舗装された道路など、いろいろ調べてみると、税金が使われているものは限りなくあることがわかりました」。瑞江中学校3年・荻野亜衣さん。

「私は税を勉強する事によって、税への考えがいろいろ変わりました。国民全（すべて）ての人が、『目で見えないう物』を見る心を養えば、『誰（だれ）かの笑顔のため』と税への考えを変えてくれると

思います。そしてそれは明るい未来へつながっていくます」。松江第三中学校3年・浅岡綾乃さん。

毎年のことですが、中学生



の税の作文にいつも感激させられます。今年も3241名もの応募があり、優秀作品として51名の生徒さんが表彰されました。どの作品もとて

素直で、共感を呼ぶものばかりでした。

教育を受けられるありがたさ、人々の幸せや社会の成り立ちが税とどのように係（か）わっているかなど、自分が学んだ税について身の回りや生活に照らして、具体的に説得力をもって書かれていました。広報などで紹介したいと考えていますが、素晴（すば）らしい中学生がたくさんいることに心の底から喜びがこみ上げ、感動しました。

江戸川区長

多田正見

平成 16 年 2 月 1 日号

風鈴はつるす物ですが、逆さまにして室内の置物として音を楽しむ方法を考案したり、軒先のつりしのぶを室内で観賞するための術（すべ）を編み出したり、若い人の感性には驚かされます。

先日の「えどがわ伝統工芸産学プロジェクト」の発表会では、数々のユニークな作品が披露されました。本区には多くの伝統工芸があり、独特の地域文化を形成してきました。しかし、近年、それが生活から離れ、販路や後継者などの困難な課題を抱えてい

ます。これを何とか打開したいと取り組んだのが、このプロジェクトです。区の音頭で、多摩美術大学・女子美術大学・東京造形大学の協力を得て、



伝統工芸者の巧みな技と若い人の感性を織り込んだでの挑戦でした。参画した10人の伝統工芸者は、素晴（すば）らしいアイデアに将来への夢を描

くことができました。

また、酒屋を営む3人の青年経営者と本区のJA青年部が共同開発した「小松菜焼酎（しょうちゅう）」は、全国に名の知れた江戸川の小松菜ブランドをお酒にとの着想で、限定3000本があつという間に品切れになったそうです。厳しい時代を乗り越えるこうしたアイデアと挑戦に、頼もしさを感じました。

江戸川区長

多田正見

平成 16 年 3 月 10 日号

先日、日本橋のデパートで開催された「百歳の顔1000人写真展」を見てきました。米国の写真家ジェリー・フリードマン氏と日本の小野庄一氏の二人の作品1000点が展示されていました。世界各地で一世紀を生き抜いた、力強く輝く表情がまことに圧巻でした。

その中に本区在住の若林定治さん、羽生瑞枝さんの写真があり、何ともうれしく思いました。ご両人とも現在102歳、元気澆刺（はつらつ）の日々を過ごしています。

若林さんはパチンコが大好き、ダブルの背広にネクタイがよく似合う紳士です。羽生さんは江戸川区俳句連盟の現役の会員です。「誕生日 ケーキ



に並ぶ 冬いちご」。これは2月の区の熟年文化祭に出品した作品です。

ところで、昨年、第四葛西小4年の高岡美世さんが虫歯

予防・選挙啓発・天然ガス車などの全国ポスターコンクールで文部科学大臣賞、総務大臣賞など最優秀賞を次々と獲得し、話題となりました。今年に入って篠崎小4年の濱田萌笑さんが世界児童画展で内閣総理大臣賞に輝きました。いずれも何万点もの応募の中の一点です。100歳ならぬ、まだ10歳の子どものたちの活躍です。

うれしい話題、まだまだありそうな気がします。

江戸川区長

多田正見

平成 16 年 4 月 10 日号

先日、荒川に架かる壮大な橋が開通しました。8年間の工期と378億円を投入した清砂大橋(きよすなおおはし)です。全長1317mは都内で最も長い斜張橋です。これで、東葛西から清新町に通じる放射16号線が永代橋までつながることになりました。

当日は、橋の前途を飾るにふさわしい春の日和のなか、江戸川・江東両区から3世代のご家族4組が渡り初めを行い、石原都知事も来られて盛大な開通式となりました。

本区は江戸川と荒川という

大河川に囲まれた地域です。東西に走る主要幹線は必ずこの川を渡らなければなりません。この開通で、船堀橋や葛西橋の負担は相当に軽減され



ることでしょう。丸八通りを通れば、小松川平井地区の方々にとっても、葛西との距離が縮まります。

葛西地区では数10年かけて

1000haに及ぶ区画整理が行われました。うち380haは都の海面開発、ほかは地元の人たちでつくる7地区の区画整理組合の開発です。郷土の海の再生と、度重なる水害からまちを守るという大事業でした。この開通は、こうした世代を超えた住民の熱き思いをさらなる発展に結びつける夢の架け橋でもありました。

江戸川区長

多田正見

平成 16 年 5 月 1 日号

桜の花が散り、木々の梢（こずえ）が一斉に青みを帯びたと思う間もなく、輝くような新緑となりました。公園や緑道の植え込みにも花々が咲き誇り、生命の躍動を見せてくれています。私たちは、変わることもない自然の営みを感じ、心に喜びや希望を抱くことができますのです。

先日、平成元年に誕生したリハビリの自主グループ・友だちつくり会から「あしあと」という冊子をいただきました。この冊子には「再起に向けて身障者たちの栄光と闘

病の軌跡」という副題がついています。同じ仲間の立花律子さんが大勢の方々取材し、一人ひとりの闘病記を綴（つづ）ったものです。元気な人



が、ある日突然半身不随となり、口も思うように利けなくなった衝撃は、計り知れないものでしょう。どん底の苦悩から、挫折（ざせつ）、あき

らめ、一縷（いちる）の望みを繰り返し、心を明るく方向に向けて努力する、その再起の軌跡に心を打たれました。

また、このグループの存在で、どれほど多くの方々が勇気と生きる力を得たか知れません。代表の加藤征男さんも体は不自由ですが、いつも大きな声で人々を励ましています。

この活動に、私たちも生きる勇気をいただくような思いです。

江戸川区長

多田正見

平成 16 年 6 月 1 日号

景気好転の様々な指標が出ていますが、区内のどなたに伺ってもまだまだというのが本音のようです。確かに消費は伸びていますが、肝心の所得の上昇がありません。区も決算期を迎え、区税収入は15年ぶりに400億円を割ることになりました。平成4年の483億円をピークに、その額は年々減少し、財政環境は相当厳しくなっています。

さて、優良工場として区の産業賞を受賞した工場主の方から、先日、次のようなお手紙をいただきました。「一昨

年から仕入れ鋼材の価格が急騰し、昨年は倍近くになり、資金不足で税金の支払いも困難になりました。このことが取引先にわかり、数社から取



引を停止され、仕入れがゼロになってしまいました。しかし、何社かが工場を訪れたとき、産業賞に目がとまり、優れた仕事の内容を見て取引を

継続してくれることになりました。おかげさまで、今、希望を見出（みいだ）し頑張っています。この喜びを伝えたい」と、お手紙をくださったのです。

産業賞は、関係業界の推薦をもとに審査会の厳正な審査を経て授与される賞です。厳しくても忍耐強く頑張る方に活路は開かれます。産業賞が役立ち、これほどうれしいことはありません。

江戸川区長

多田正見

平成 16 年 7 月 10 日号

今年は学童疎開60年にあたります。戦時下の昭和19年夏、区内の5100人の児童が山形県へ向かいました。うち3700人が友好都市鶴岡市のお世話になりました。

「初等3年といえば家庭にいればまだ両親に甘えているいたいけな少女少女たちであるが、これが小さなリュックを背負い、一杯（いっぱい）つまった手提げを持って先生に導かれて村に入ってきた。戦争なればこそこんな可愛（かわい）い盛りの子どもをよくも手離して、百里隔る此

処（ここ）あたりまで送ったもんだ。自分にも3年生が、私の家の子も3年生だ。並々ならばとうてい離せないし、又子どもも離れはしまい。等



（など）ささやき合い出迎えるの一同は潜然と泣いた」。湯田川温泉たみや旅館店主の手記の一節です。

受け入れの方々は、食糧事

情が厳しく大変な負担にもかかわらず、多くの子どもたちを温かい心と涙で迎えてくれました。この8月、こうした事実を通して改めて平和の貴さを学んでもらうため、小・中学生47人を平和大使として鶴岡市へ派遣します。まちは発展しても60年前と変わらぬ山形の風物に、厳しい時代の人々の心の交流を今の子どもたちの胸にもしっかりと映し出してあげたいと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 16 年 8 月 1 日号

間もなくアテネ五輪が始まります。今回は本区在住の選手4人、本区で育った選手4人の計8人が日本代表として出場します。卓球の鬼頭さん・バドミントンの佐藤さん・陸上1万メートルの弘山さん・卓球の遊澤さん・サッカーの大部さん・バレーボールの大山さん・野球の松坂さん・砲丸投げの森さんです。江戸川区からこんなに多くの選手が出場するのは、初めてです。これほどうれしいことはありません。

先日の新聞で、マラソンラ

ンナーの谷川真理さんが努力について話されていた記事を読みました。谷川さんは、91年の東京国際女子マラソン・94年のパリマラソンに優勝し、



今も様々な大会で活躍しています。座右の銘は「忍耐は苦しいけれども、その実は甘い」だそうです。スポーツに限りませんが、私たち人間の力は、

初めから分かっているわけはありません。目標に向かって厳しさに耐えてこそ思いも寄らない結果が得られるのです。つまり、努力こそ、自らの限界を限りなく引き上げてくれる原動力となるのです。その努力によって、アテネへの切符を手にした8人の選手のみなさんに、心からの拍手を贈りましょう。

江戸川区長

多田正見

平成 16 年 9 月 1 日号

この夏は、区民のみなさんも睡眠不足を覚悟のうえで、アテネで活躍する日本選手の姿に胸を躍らせたことでしょう。次々に報じられるメダル獲得のニュースは、私たちにこのうえない感動を与えてくれました。メダルを手にした全（すべ）ての選手が「日本のみなさんに喜んでもらえて、本当にうれしい」「みなさんの応援のおかげです」と、厳しかった自らの試練を語らず、涙で感謝する姿は何とも清々（すがすが）しく心を打たれました。今回は、江戸川区ゆ

かりの選手が9名も代表として出場し、素晴（すば）らしい活躍をみせてくれました。なかでも、柔道の谷本選手は早々と金メダルを勝ち取って、



私たちを喜ばせてくれました。さて、今年の夏は記録的な暑さが続きましたが、花火大会は139万という人出で盛り上がり、会場は「江戸川区

最高！」の歓声で沸き返りました。週末には各地で夏祭りや盆踊りが繰り広げられ、子どもも大人もわがまちの良さをかみしめることができました。これも労をいとわず準備やお世話に汗を流してください。の方々の心意気のおかげです。スポーツでは「わが日本を」、地域では「ふるさとわがまちを」の思いを強くした、この夏でした。

江戸川区長

多田正見

平成 16 年 11 月 1 日号

アテネオリンピック金メダリストの谷本歩実（あゆみ）選手（女子柔道）が、先日、区役所を訪れました。その爽（さわ）やかな人柄に、多くの方が清々（すがすが）しさを感じたことでしょう。何といても、江戸川区始まって以来の金メダリストです。前回までは、区にゆかりの人がオリンピックに出場するのは極めて稀（まれ）なことでした。それが今回は9人も出場し、谷本選手は金メダル、松坂選手は銅メダルという素晴（すば）らしい快挙です。

区では、国際・全国大会で活躍した選手を称（たた）え、スポーツ栄誉賞として陸上競技場のモニュメントにその名を刻み、顕彰してきました。



しかし、今回の金・銅メダルの重みを別の形で称えようと、二人にスポーツ特別栄誉賞を贈ることにしました。表彰式のあと、区役所中庭で、議会の

のみなさん、スポーツ関係者、近隣小学校の児童にも呼びかけ、激励会を行いました。谷本選手は「多くの方のおかげで優勝できたのですから、この金メダルはみなさんに触ってほしい」と特別サービス、子どもたちは大歓声を上げて金メダルに触れていました。忘れられない思い出になったことでしょう。

谷本選手が、いつまでも江戸川区民の星であってほしいと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 17 年 2 月 1 日号

重度の障害を持つ人たちが通う区立の施設で成人式がありました。この施設では、9 人の新成人が誕生し、和気あいあいの式となりました。みんな、ご家族がこの日のために用意した晴れ着姿で胸躍らせているようでした。帰り際、保護者会の会長さんから手渡された新成人を特集した会報には、母親からのメッセージが載せられていました。

あのころの出来事が笑い話になる日が来るなんて、感無量です」／②「障害に関して認識のなかった親が、貴女（あなた）と一緒に生きていく中で、数多くの方に助けられ、支えられ、親子共々、笑い合える喜びを心から感じることを幸せに思っています」／③「この殺伐（ばつ）とした厳しい



世の中で、あなたの様なピュアな心を持った人とずっと暮らせることは、考えてみれば、とても幸せなことかもしれない。これからも私たちの太陽でいて下（くだ）さい」。

親の、子に対する慈しみほど尊いものではありません。子がどんな障害を持っていても、それを喜びに変えていく無限の力があります。本当に心打たれます。

江戸川区長

多田正見

平成 17 年 3 月 1 日号

善意の寄付は社会奉仕の最たるもののひとつですが、毎年多くの寄付が区に寄せられます。このところ、不況にもかかわらず、区と区の社会福祉協議会へ寄せられる寄付総額は、毎年 5000 万円近くになっていきます。特に昨年の災害では、特別な義援金もお預かりすることとなりました。中越地震では総額 3800 万円を新潟県にお届けしました。その喜びようは大変なもので「区民のみなさんによろしく」という言葉を何度もいただきました。その後、スマトラ島

沖地震の義援金も、日本赤十字社を通してお届けが続いています。区民の方々の人間愛に満ちた思いやりに頭が下がります。



社会福祉への寄付金は、恵まれない方々のために使わせていただきます。民生・児童委員が一人暮らしのお年寄りを激励する際、梅干しをお届け

しますが、この梅干しが多くの方々の善意で届けられたことを知ると、涙を流さんばかりに喜んでいただけるそうです。体の不自由な方々の杖（つえ）も、寄付金によるものです。感謝の気持ちを込めて寄付した方々へ直接手紙を出してくださる方も数多いようです。

このような心の交流こそ、江戸川区の温かさを物語るお話です。

江戸川区長

多田正見

平成 17 年 4 月 10 日号

桜が満開です。申し合わせ
たように木々の緑が芽を吹き、
命の輝きを感じる頃（ころ）
となりました。この桜の下、
先日の入学式も、新入生に
とって忘れ得ぬ思い出になっ
たことでしょう。

さて、3月末のある日、二
つの地区で小学校卒業記念の
ナイトウオークがありました。
12回目となる小松川・平井地
区では、7校247名が夜10
時に小松川小学校を出発し、
皇居を一周する全長28キロの
コースに挑みました。一方、
8校137名が参加した小岩

北地区は3回目で、こちらは
江戸川堤を南下して、なぎさ
公園を折り返す同様の距離の
コースです。これは地元の支
えがあつての行事で、今年も



合わせて200名を超す協力
者がコースの安全を見守って
くれました。

私も両地区に参加していま
すが、今年は上小岩小学校か

ら約1時間お付き合いしまし
た。どちらも出発地に戻るの
は翌朝6時前後、最初は賑（に
ぎ）やかに歩く子どもたちも、
深夜を過ぎると黙して語らず、
歯を食いしばりゴールに向か
うということです。試練を乗
り越えた自信は、新たな中学
校生活への意欲につながるこ
とでしょう。関係者に敬意を
表しつつ、子どもたちにも拍
手を送りたいと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 17 年 5 月 1 日号

先日の内閣府の社会意識に関する世論調査によると、「今の日本で悪い方向に向かっていく分野」で治安と答えた人が前回は大幅に上回り、47・9%に達しました。昨年の本区世論調査でも、これから推進してほしい施策として「防犯などの安全・安心まちづくり」が51・3%を占めました。これらは、今、いかに安全に対する関心が高まっているかを示しています。

警視庁が全都の犯罪状況を公表したのは2年前のことです。なんと江戸川区はワース

ト1ということとで週刊誌などに取り上げられ、大変なショックを受けました。そこで即刻、安全・安心まちづくり運動大綱を定め、区・警察・



住民を挙げて犯罪撲滅に立ち上がりました。町会・自治会とはもとより様々な組織がパトロールを始め、北小岩のイエローベレー隊や葛西のわんわ

ん・ウオーキングパトロール隊などがテレビに登場し、全国に紹介されました。これらが実り、昨年来、急激に犯罪件数が減り、本年3月には毎日・地方自治大賞奨励賞をいただきました。まさに地域力の賜（たまもの）であり、かつてのごみ公害や航空機騒音問題のように、事があれば力強く立ち上がる江戸川区民の心意気の表れだと思っております。

江戸川区長

多田正見

平成 17 年 6 月 1 日号

町中（まちなか）のお店や工場、施設などでオレンジ色の腕章をつけた中学生を目にすることが多くなるといいます。その腕章には「職場体験中！チャレンジ・ザ・ドリーム」と記されています。中学生の職場体験学習です。

今、フリーターとかニートとか、若い人たちの勤労に対する意欲が大きな社会問題として指摘されています。人は成人するまでは親や家族に養育されますが、ひとたび成人すれば、これだけは絶対に成し遂げなければならない責任

があります。それは自立、つまり働くことなのです。

子どもの多い本区では、その子どもたちが勤労体験を身につけて将来立派な社会人と



して活躍できるよう、5日間の体験学習を中学校33校全（すべ）てで実施することになりました。これには中学2年生4500名全員が参加しま

す。既に何校かで始めていますが、ありがたいことに多くの企業が積極的に協力してくれています。次の世代を育てるために地域を挙げて支援する、まさに地域力なくしてできる事業ではありません。本区ならではの素晴（すば）らしい姿だと思います。

どこかで体験学習をしている中学生に出会ったら、「頑張って」の愛情込めた一言をお願いします。

江戸川区長

多田正見

平成 17 年 7 月 1 日号

ある人が言っていました。
「どんなに科学が発達しても
人の力で銅を銀に変え、銀を
金に変えることはできません。
ところが、区画整理はまちを
金に変えることができるので
す」。けだし名言です。

先月中旬の日曜日、喜びに
沸く地元の皆（みな）さんが
集い、区画整理で誕生した新
宿線一之江駅西口広場の完成
式典が行われました。平成 5
年から始まった一之江駅西部
区画整理事業は 83 パーセント
まで進みましたが、その中で
誕生した駅前広場は、環状七

号線を挟んで東西を合わせる
と区内最大の広場となります。
地下鉄はもちろん主要道路 3
本が交差する至便（しべん）
の場所に位置し、これからの



一之江地区発展の核になるこ
とでしょう。

区画整理はまちを面として
作り変える事業ですが、そこ
に住む人々の決断と合意がな

ければできません。さらに、
それを裏打ちする地域愛とま
ちを良くしようとする共通の
思いがあって成し得る事業で
す。完成すれば、分かり易（や
す）さや美観はもとより、災
害に強いまちとなります。ま
さに金に値する、得がたいま
ちに生まれ変わるのです。多
くの関係者の皆さんに深く敬
意を表しつつ、この喜びをと
もにしたいと思います。

江戸川区長

多田正見

平成17年8月1日号

夏がやってきました。盆踊りや夏祭りが各地で行われ、まちを歩いていると、どこからかお神楽や太鼓の音が聞こえ、にわかにながにぎわいます。最近、神楽ばやしや太鼓など、日本の伝統文化に親しむ子どもたちが目立って多くなりました。日本の文化とその心を子どもたちにしっかりと受け継いでもらうことは、何より大切だと思います。

先日、上篠崎の浅間神社ののぼり祭りがありました。今年には本祭りの年にあたります。高さ25メートルにもなる大の

ぼり10本を数百人の手で力強く立てる珍しい祭りです。一度は途絶えてしまった祭りですが、25年前から地域の青年たちによって復活されました。



まず午前4時の安全祈願の神事から始まり、立て終わるまで4、5時間を要します。今年は大雨に見舞われ、総代（そうだい）さんの話では「こん

なことは初めて」だという程（ほど）でした。みんな、ずぶ濡（ぬ）れになる中で、はっぴを着た一人の小学生の姿が目を引きました。お父さんと一緒に綱を引く姿が何ともほほえましく頼もしいものでした。10年後、この子はこののぼり祭りの中心となって活躍していることでしょう。これこそ家庭教育の真髄ともいえるべきです。

江戸川区長

多田正見

夏の甲子園大会が終わり、早（はや）秋季大会へ向けての球音が聞かれる頃（ころ）となりました。秋はどのスポーツも新人戦で賑（にぎ）わいます。

8月下旬の日曜日、陸上競技の墨東五区大会が行われました。選手のほとんどは中学生。暑さも何のその、自らの記録に挑戦する意欲満々の姿に限りない頼もしさを感じました。協会関係者の話では「最近是一般より中学生の参加者が増え、とてもうれしい」とのことでした。スポーツ、文化・芸術に少年少女が取り組

む姿ほど清々（すがすが）しいものはありません。区内各地の夏祭りや盆踊りでもそんな姿が数多く見られました。櫓（やぐら）の上で威勢よく



鳴り響く太鼓、ふと見上げるとかわいい小学生であったり。和太鼓や伝統の葛西囃子（ばやし）に打ち込む子どもたちも多く、うれしい限（か

ぎ）りです。

もちろん、その陰に子どもたちが健全に育ってほしい、その願いを胸にひたすら育成に当たる多くの指導者の存在を忘れることはできません。

甲子園ならぬ炎天下の河川敷で休日を返上し、汗を流す監督やコーチ・審判団のみなさんの姿には本当に頭が下がります。

大きな愛情とその中で育（はぐく）まれる子どもたちの逞（たくま）しさ、存分に味わうことのできるこの夏でした。

江戸川区長

多田正見

平成 17 年 10 月 10 日号

荒川と旧中川を結ぶ場所に
ロックゲート（閘（こう）門）
が完成しました。国土交通省
が75億円を投じて建設した災
害対策用の施設です。この完
成で江東デルタ地帯の内河川
に船の就航が確保され、災害
時に人や物資の輸送が可能と
なります。

この地点はかつて塩の道と
呼ばれ、江戸川区の新川と江
東区の小名木川を結ぶ舟運
（しゅううん）の要路（ようろ）
でもありました。1603年
に江戸幕府が開かれ、江戸市
中への物資輸送のために開削

された運河です。しかし相次
ぐ災害のため、しばしば河川
改修が行われてきました。中
でも画期的な事業は、明治44
年から昭和5年の20年をかけ



た荒川の開削です。

例えば、最近完成した小松
川再開発事業や荒川スーパ
ー堤防化事業など、災害対策へ
の備えは今もなお引き続き行

われています。満潮時には区
内の7割が水面より低くなる
本区にとって、まだまだ水害
への防備は怠れません。下水
道の普及で日常的な浸水は避
けられますが、いつ大規模な
風水害に見舞われるかわかり
ません。ロックゲートの完成
は、この地域の災害史を振り
返るとき、改めて未来への安
全・安心への努力を思い起こ
すきっかけになることでしょ
う。

江戸川区長

多田正見

平成17年11月1日号

区立校の周年行事が行われる頃（ころ）となりました。先日、大杉第二小に行ってきました。全校児童600人を超える賑（にぎ）やかな学校です。式典では、姿勢を正し、しっかり話を聴く立派な態度に感心しました。第2部では1年生から6年生まで精一杯の演技を見せてくれました。

ところで開校30周年の記念誌には、在校児童の夢が一言ずつ載せられており、とても興味深く読ませてもらいました。

1年生の「ぼくは、おかね

もちに、なりたいです。こまっているひとにおかねをわけてあげたいです」。あどけなくかわいい言葉に心が和みます。3年生になると「わたしは、



ほうきにのって、こまった子をたすけてあげたい。やくに立つことをしてあげたい」。奇想天外な発想に驚き、優しい思いに心も温まります。さ

て、6年生は「20歳の自分へ」というテーマで、内容はぐつと現実的です。「国會議員を目指して法律を学んでいますよね。しっかり勉強をやり苦手をなくしてください」。

「きっとパティシエ（洋菓子職人）になっている。夢がかなわなくても、自分の夢はわすれないでね」。

子どもたちが、6年間でこれほど逞（たくま）しく成長することを、この記念誌から感じ取ることができました。

江戸川区長

多田正見

平成 17 年 12 月 1 日号

最近、産学公という言葉に耳にするようになりました。産業界、大学・研究機関、役所が一体となつて、ある課題に取り組むことです。本区でも3年前から伝統工芸者と都内3大学が一緒になつて、風鈴・江戸扇子・型小紋など多くの優れた工芸品づくりを進めています。若い学生のみずみずしい感性と伝統工芸者の巧みな技が織り成す素晴（すば）らしい作品が次々と生み出され、既にいくつかの作品が販売ルートに乗って全国に出回るようになりました。

先日、タワーホール船堀で、産業ときめきフェアが開催されました。区内製造業者のみなさんが自社製品を出展するばかりでなく、製造過程も紹



介する催しです。毎回見るたびに、ものづくりの魅力に強く引きこまれてしまいます。そこには、人々の限らない英知や探究心が込められている

からです。最近、コミュニティ施設のサークル発表会やくすのきカルチャー教室の作品展を見る機会が多いのですが、趣味の領域とは思えない力作に目を見張ることもしばしばです。ものをつくるということは、それほどまでに人々の情熱をかきたてるものなのでしょう。人間のみが持つ文明のありがたさを痛感します。

江戸川区長

多田正見

平成 18 年 2 月 1 日号

子どもたちにとってお正月の楽しみの一つ、それは何といてもお年玉でしょう。いくつものお年玉袋を手にして、さて何に使おうかという楽しみは誰（だれ）もが持つ記憶の一幕です。

ところでこのお年玉の一部を恵まれない人たちのために役立ててもらおうという、小学生のお年玉募金が続いています。毎年 1 月中頃（ごろ）に各校の代表児童が区に届けてくれるのです。今年は 12 校の子どもたちから 22 万円余の浄財を頂きました。

船堀小学校 2 年生の高田萌里さん、川井崇寛君から「わたしは、お正月に、たくさんお年玉をもらいました。ぼくも、いろいろな方からお年玉



をいただきました。お年玉ばい金があるというお話をうかがい、少しでもきょう力したいと思ってお年玉の中からは金をすることにしました。お年玉

の一ふですがおやくに立てていただけたらうれしいです。よろしくおねがいたしたします」という一文が添えられていました。

これを始めて 27 年、何と 1975 万円にもなりました。金額もそうですが、子どもながらに他の幸せを願う心は何と素晴（すば）らしいことでしょう。こうしたことが江戸川区の心の文化としてより大きく育つことを願ってやみません。

江戸川区長

多田正見

平成 18 年 3 月 1 日号

今年度から始めた中学生の職場体験「チャレンジ・ザ・ドリーム」が大きな成果を上げ、様々な反響の声が届いています。中学2年生4500人全員が、企業、お店などで5日間にわたり、仕事を体験するものです。

先日、塗装業の方に中学生からの手紙を見せてもらいました。そこには「塗装という仕事を実際に体験し、いかに多くのことを学んだか、また、職人さんの温かい指導はとてもうれしく感激しました」と書かれていました。また、あ

る魚屋さんの話では、中学生を朝4時過ぎに魚河岸へ連れて行き、まず、牛丼を食べさせてから競りを見せたところ、「いつも食べている魚がこう



して食卓に届くということを知って、とても感動した」と子どもが言っていましたとお母さんがお礼に来られたそうです。

事業主の方々は異口同音に「中学生は4日目からガラリと変わる」とおっしゃいます。挨拶（あいさつ）にしても学校や家庭で言われるものとは大いに違うでしょう。こうした実社会体験を直接、心と体で受け止めることが、人格形成に大きな何かを残してくれるに違いありません。このことに積極的に協力してくださる企業の方々も大変だと思っています。子どもたちに懸ける温かい愛情にただただ頭が下がります。

江戸川区長

多田正見

平成 18 年 4 月 9 日号

ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)で、日本は見事優勝し、私たちに大きな感動を与えてくれました。「クラシック」という言葉はよく使われますが、辞書を見ると、最初の訳は「第一級の」という意味になっています。正に日本野球は世界第一級として証明されたのです。

王監督は「世界の王」と称賛され、イチロー選手の活躍も光りましたが、最優秀選手には松坂大輔投手が選ばれました。松坂投手は江戸川南リトルリーグで少年期を過ごし、

彼の野球人生は我が江戸川区球場から始まっています。スポーツ界では、一昨年のアテネ五輪で金メダルを獲得した柔道の谷本歩実選手が区内在



住。3月12日の名古屋国際女子マラソンで見事逆転優勝を果たした弘山晴美さんも東葛西にお住まいです。

さて、3月11日の朝日新聞

に掲載された「天声新語コンクール」で最優秀賞に輝いた浅岡綾乃さんは、区内在住の高校生です。松江三中時代、税の作文でも大蔵財務協会最優秀賞を受賞しています。彼女の「天声新語」を読んで、その豊かな感性に感動しました。

嬉(うれ)しい話題を提供してくれる「クラシック」な方々が区にも多くおられることをとても誇りに思います。

江戸川区長

多田正見

平成 18 年 5 月 1 日号

自然界が生き返ったように美しい季節となりました。これからしばらく色とりどりの花と鮮やかな新緑が、私たちを楽しませてくれることでしょう。

今、区内の総樹木数はおよそ 550 万本です。以前からすれば、随分多くなりました。34 年前の総樹木数は 120 万本でした。当時の人口は 46 万人で、区民一人当たりになると 2・6 本でしかありません。そこで、これを一人 10 本に増やそうと、「ゆたかな心、地にみどり」を合い言葉に長年

にわたり大々的な緑化運動を展開し、大きな成果をあげることができました。現在は一人当たり 8・3 本となりましたが、人口も 66 万人に達した



ため、なかなか当初の目標に届きません。しかし、当時植えた木は今、立派な樹木に成長しているの、緑のボリュームは大きく増えた

言ってよいでしょう。

緑とともに増やしてきた公園も今、432 か所、総面積は 325 ヘクタールといずれも 23 区中、トップレベルを誇るまでになりました。緑や公園は一朝一夕にして得られるものではありません。長い年月をかけ、人々の心によって育て上げていくものです。「ゆたかな心、地にみどり」を改めてかみしめる昨今です。

江戸川区長

多田正見

先日、ある方から運送業を営む熊谷直幸さんを紹介されました。

「この社長さんは公衆手洗いの掃除をしてくれているのですよ」と聞かされ、私が「お仕事ですか、それともボランティア活動ですか」と社長さんに伺うと、「いえ、そのどちらでもあります」とのこと。「もしかしたらそれは、社長ご自身の人間修養なのですか」と尋ねると、「正にそのとおり」とのお返事でした。20 歳代の頃（ころ）から始めたというトイレ掃除。それ

は業者も驚くほど徹底したものです。「悪臭漂う中、簡単には落ちない便器の汚れや汚物。これを長時間、手製のブラシで手袋を使わず素手で徹



底的に磨く。いいですか。素手でなければだめなんです。真冬の寒さの中で涙が出るようなこともありますよ」。しかし、社長さんはこうも言い

ました。「掃除は自分の心を洗うこと。このおかげで、人生を健康で意欲的に生き抜く力を与えられるのです」。今ではトイレ掃除の会ができ、何十人も仲間になったそうです。

本当に頭の下がるお話です。世の中には、人が一番嫌がることに、このような心で手を貸してくださる方々が居（お）られることをなんとも嬉（うれ）しく思いました。

江戸川区長

多田正見

平成 18 年 7 月 1 日号

江戸川区を洪水から守るため、荒川の開削に引き続き、昭和16年に新中川放水路の開削が始まりました。22年の歳月を経て昭和38年に完成しています。

近年は、高水敷（河川敷）強化のための再整備が始まり、6年後の完成を目指して工事が進んでいます。以前は、堤防に立ち入り禁止のネットフェンスが張られ、せっかくの水辺空間が利用できませんでした。最近は整備ができたところから開放し、地域の人たちの憩いの場になっていま

す。区では、この貴重な河川空間を大いに活用するため、毎年、水辺のまつりを続けてきました。今年の「新中川フェスタ」では特に区ボート協会



の協力をいただき、東大、一橋、早稲田、慶應のボート部が参加してくれることとなりました。6月25日の日曜日に盛大なレースが行われ、川岸

はたくさんの方々の声援に沸き返りました。この4大学のボート部は戦前からの長い歴史をもち、隅田川や戸田コースでの定期戦は有名です。夢は大きく、いつかオックスフォード、ケンブリッジ両大学の対校戦を招聘（しょうへい）することなど、どうでしょう。

多くの川と海を持つ、水と緑のまち江戸川区を、一層魅力に満ちたところになりたいものです。

江戸川区長

多田正見

平成 18 年 8 月 1 日号

昭和6年、江戸川新報社出版部が発行した『文化の小岩』という古い冊子があります。昭和初期の小岩の様子がよくわかる興味深いものですが、その巻頭に元瑞江村長 海老原幸太郎氏作詞の『小岩行進曲』なるものが掲載されています。

「むかし暢気（のんき）な農業地帯／今は文化の小岩町／区画整理や交通便利／すすむ発展目まぐるし／さかる停車場あの沖あたり／夜は灯の花パラダイス／書くや恋文札場の窓で／首尾の中曽根かな

ふやう／おもひ入谷の鐘の音けふて」

「沖」「札場」「中曽根」「入谷」など、当時を知る人にはなつかしい地名でしょう。こ



の歌から、農村地帯から生まれ変わった小岩の町の活力や賑（にぎ）わいが感じられます。大正デモクラシーの名残を残す、ハイカラな恋の花

が咲き競う町であったのでしよう。

ところで、小岩フラワーロード商店街が、千葉商科大学と手を組んで始めた、「えどがわ商店街産学公プロジェクト」も3年目を迎えています。今年もまた「小岩」を「恋話（こいわ）」にかけて、川柳や五行歌の募集がありました。昨年度優秀賞、70歳代の方の俳句「おでん屋に 同じさみしさ 恋敵（こいがたき）」。

さて今年は、どんな傑作が寄せられますか。

江戸川区長 **多田正見**

平成 18 年 9 月 1 日号

保護司会、更生保護女性会などが主催する、社会を明るくする運動の一つ「中学生標語コンクール」に今年も400点を超える作品が寄せられました。次は、力作ばかりの中から選ばれた入選作品です。

△区長賞▽育てよう悪に負けない強い意志（西葛西中2年稲熊ふみ）△保護司会会長賞▽はつきりと「ダメ」だと言えるそれが友（鹿本中1年安田楓花）△更生保護女性会会長賞▽「気をつけて！」見送る言葉に親の愛（小岩四中1年風見鮎香）△優

秀賞▽ダメだよという言葉が友達救う（松江五中2年中井麻柚子）、共に生き助ける心で支えあう（鹿骨中2年木場かおり）、小さな子護（まも）



る手段は周囲の目（篠崎二中3年小日向大樹）、あいさつで心つながる地域の輪（小松川一中1年佐藤愛）、分かるはずやっていいこと悪いこと

（小松川三中3年宮田慎太郎）、考えて人の命の尊さを（南葛西中3年早川珠央）、薬物はたった一度が身の破滅（清新一中2年池田尚偉）、思いやるそんな気持ちがある友（瑞江二中3年五十嵐善弘）、メールより直接かわそう心の声（鹿本中3年高橋愛）、誘惑に負けない心が盾となる（小岩一中2年泉澤聡）〔敬称略〕
こんな中学生に明るい日本の未来を感じます。

江戸川区長

多田正見

平成 18 年 10 月 9 日号

昨今、「子育て支援」とよく言われます。出生率が著しく低下していることもあり、子育て環境の再構築が課題です。一方、真の子育て支援を考えるならば、今育ちゆく子どもたちに、まず何をなすべきかを考えなくてはなりません。

数年前から手がけた「すすくスクール」が、地域の方々の情熱で大きな成果を上げています。このねらいは、とりもなおさず子どもたちへの「心の教育」。少子化や核家族化で人との関（かか）わりが

少なくなってきた子どもたちに、これを取り戻すための方策です。ここでは世代を越えて、幅広い人々との交流が実践されています。小学校1校平均



50人前後の地域の方々が参画し、自分が持つ様々な特技を生かしてお付き合いをしてくれます。囲碁・将棋・茶道・民謡・舞踊・スポーツなどを

通して子どもたちが多様な人との有り様を学ぶ場となっているのです。そこでは、人の厳しさ、温かさ、愛情に触れながら豊かな心のバランスを学び取っていくことでしよう。

国もこの事業をモデルとした施策を、来年度から全国で大々的に広めると打ち出しました。まさに、地域がつくってくださった本区の誇るべき子育て支援のひとつです。

江戸川区長

多田正見

先日、リハビリ自主グループの「ふれあい文化祭」に行ってきました。今年で16回目を迎え、ますます意気盛んな催しでした。

実行委員長の加藤征男（ゆきお）さんは、20年前に突然脳卒中で倒れ、仕事もできず、ひたすら機能回復訓練に励む日々となったのです。そのときお世話になった医師から、3つのことを言われたそうです。何事にも興味を持つこと。次に、3人以上の友達をつくること。3つ目は、体のことをくよくよ気にしないこと。

そこで、「友だちつくろう会」をつくり、同じような境遇の人たちと励まし合って生きていこうと決意したのです。加藤さんの努力もあって、こう



した自主グループは、今では5つ、会員は180人にもなりました。不自由な体を乗り越え、書道や絵画、歌、手芸、踊りなどに取り組み、自らの

可能性を求めているのです。

加藤さんが医師から言われたことを果敢に実行に移せたのは、明るく、前向きなお人柄によるのでしょう。人は皆、励まし合って取り組み、思いもかけぬ勇氣や力が湧（わ）いてくる。そのことの証（あかし）を見せてくれているように思います。生きる力の素晴（すば）らしさをつくづく感じさせられました。

江戸川区長

多田正見

平成 19 年 2 月 1 日号

二之江の町を流れる古川が、親水公園として生まれ変わって33年余りがたちました。都市化の中で、不要となった河川を清流に再生したこの事業は、全国的に注目を集め、都市部における「甦（よみがえ）る清流」事業として全国の手本となりました。

このお正月、あちこちの会合で「これからの江戸川区に全国一、あるいは東京で一番となるような話題をたくさん作っていくことで、地域の魅力を高めましょう」と話してきました。今、江戸川区産の

小松菜は、全国ブランドとして珍重されておりますが、その生産高は全国一を誇っています。江戸川区花火大会は、今や観客動員数日本一と言わ



れています。さらに言えば、公園数・面積はともに23区トップレベル。また、出生率、子どもの数は最も多い。平均年齢、高齢化率、介護保険受

給率、一人当たりの医療費は、一番低い等々。区行政について言えば、区民一人当たりの職員数、人件費比率などは23区最低。一人当たりの区の借金額は、正に全国で最も少ない等々。数え上げれば、たくさんあります。

ひとえに区民のみなさんのたゆまぬ努力の結果ではありますが、まだまだいっぱい欲しいところです。

江戸川区長

多田正見

平成 19 年 3 月 10 日号

戦後、少年時代に野球しか遊ぶことを知らずに育った青年たちが、未来を担う子どもに野球を通して気力、体力を養ってもらおうと連盟組織をつくり、30年が経ちました。江戸川区学童少年軟式野球連盟です。

過日、その記念式典が行われ、380人に上る関係者がその歴史をかみしめました。当初は、グラウンドもままならず、適当な空き地を見つけては、みなさんで草を刈って整地をするなど、大変な時代でした。

寒い冬も暑い夏も子どもと向き合い、ひたすら野球を指導する。とは言えそれだけでは済みません。個性、技量、性格、家庭の事情など、つづ



さに踏まえた上で、自信と喜びを与えていく。並大抵のことではありません。真夏の炎天下、河川敷などで一日中、子どもと一緒に汗を流す監督

やコーチ、審判のみなさんの姿を見ると「何と尊い奉仕活動なのか」と、頭が下がります。子どもの多い江戸川区、かけがえのない健全育成活動のひとつです。

「球春」と言われるこの季節。育ち行く子どもたちに、これから、挑戦する勇氣、ルールやマナーを守る規律と品格、最後まで諦（あきら）めない不屈の精神をぜひ教えてほしいと思います。

江戸川区長

多田正見

江戸川総合人生大学江戸川
学科二期生のみなさんが、「街
歩き」の実践学習として、あ
る取り組みを考えました。

「区内各所に多くのモニユ
メントや彫刻が設置されてい
る」「長年の汚れやいたずら
書きなどで必ずしも美観が保
たれていない」「誰（だれ）
かがきれいにしなくては」「よ
し！総合人生大学二期生がや
ろう！」ということで有志6
人が集まって『モニユメント
6（シックス）』を結成しま
した。

早速、区土木部が管理して

いる道路、親水緑道、駅前広
場、橋などに設けられている
彫刻などを調べたところ、区
内全域で192基あることが
わかりました。まずは、葛西



地区の48基をきれいにしよう
と清掃活動を始めることにな
りました。

さしずめ、石やステンレス、
ブロンズなど様々な素材にど

んな洗剤や薬品を使うべきか。
磨く道具は何かが必要か。専門
家を訪ね勉強しました。たわ
し、バケツ、ぞうきんなどの
七つ道具を手は何日もかけて
ひたすら磨き、こする作業が
続きました。やってみると一
つ一つが輝きを増し、見違え
るようになったのです。

この発表を、先日開かれた
ボランティア交流会で聞かせ
ていただき、何かとても熱い
ものを感じました。

江戸川区長

多田正見

平成 19 年 6 月 1 日号

このたびの選挙でみなさんの力強いご支援をいただきましたことを、心から感謝しています。3 期目となりますが、気持ちも新たに、ご期待に添うべく努力してまいります。

今まさに、区歌の冒頭にありますように、「風もみどりの香にあけて」の季節を迎えています。土・日曜、祝日は様々なイベントが各地で繰り広げられ、大変賑（にぎ）やかな盛り上がりを見せてくれています。年 1 回の地域まつりをはじめ、安全・安心への取り組みや、違法駐車・迷惑

駐輪の防止活動など、どれもが明るい地域社会を目指しての尊い営みばかりです。

ふと思うのですが、もしこの中に子どもたちの姿がな



かったら、どんなにわびしいものになるでしょう。毎年同じように行われる催しも、子どもたちにとってみれば、歳（とし）とともにその楽しみ

方、感じ方は違ったものになるはずで。その味わいの積み重ねが、我がふるさとへの思いを豊かなものにしていくに違いないと思います。

催しでご苦労くださる方々の汗は、お金では購（あがな）うことのできない、若い世代への価値ある贈り物といえるでしょう。地域愛とは、まさにそういうものだと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 19 年 7 月 10 日号

まちが深い緑に覆われて、暑さの中にも自然の恵みのありがたさを感じます。地球温暖化が叫ばれる昨今、緑の問題をもっともっと大切に考えていかなければなりません。

区の緑化運動が始まって40年近くになりますが、緑の多い区と言われるようになりました。街路樹は区道だけでも5万7000本。2番目の区の2万2000本を大きく引き離しています。長年の合い言葉「ゆたかな心、地にみどり」が現実のものとなりつつあります。

折しもあじさいの季節、美しい花が心を和ませてくれています。6月下旬、瑞江第三中学校の隣に、瑞江駅南部土地区画整理事業による13番目



の公園が完成しました。それ程広くはありませんが、あじさいを900株植え、あじさい公園と名付けました。しかし、花を観賞するだけでは今

ひとつ…、ということと、「青年よ、大志を抱け」(クラーク博士) など、古今の名言をプレートにし、花々の間に配しました。地元下鎌田町会、浅見博会長のたつての要望で、「春風や闘志いだきて丘に立つ」(高浜虚子) も加えられました。

瑞江三中の生徒はもちろんのこと、多くのみなさんに、あじさい共々、これらの珠玉の言葉を味わってほしいと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 19 年 8 月 1 日号

夏休みとなり、子どもたちものびのびとした気持ちで夏を迎えていることでしょう。各地で盆踊りや納涼大会が始まりました。あちこちからお声を掛けていただき、様々な会場に行きますが、楽しさを満喫しているご家族の姿が見られます。

ところで昨年から盆踊りの中に「えどちゃん音頭」が加わり、瞬く間に各会場で踊ってくださるようになりました。「えどちゃん」は江戸川区の農業マスコットですが、えどちゃん音頭の歌詞は2年前、

当時の新堀小学校4年生の子どもたちが作ってくれたものです。

「コマツナコマツナコマツナは／徳川吉宗名付け親／鉄



分カルシウムが豊富だよ／エダメツマミナホウレンソウ／いろんな野菜を作ってる／えどえどえどちゃん音頭だよ」

2番、3番も可愛い歌詞が続きます。この曲に、鈴波流家元の鈴木先生が振り付けをしてくださいました。

小松菜は日本各地で生産されていますが、江戸川区はその発祥の地です。生産高も日本一で、今や全国ブランドとしての地位を確立するまでになりました。まさに区民の誇りです。

都市の中で農業に取り組む生産者の心意気が、この夏も、えどちゃん音頭で大いに盛り上がっていくことでしょう。

江戸川区長

多田正見

平成 19 年 9 月 1 日号

終戦記念日に、一通の手紙をいただきました。

「日本から離れること四千キロ、西部ニューギニア・ハルマヘラ島で終戦を迎えました。『日本が戦争に負けた』という信じ難いニュースで全員が文字どおり唾（あ）然とし、とても信ずることができませんでした。日本の兵隊が両手をあげて降伏することはありません」と信じ、最後の一兵まで戦うのだと教育され、その誓いもしていました。終戦の詔勅が下され、降伏の事実が判明して戦争は終わっ

たのでした。九死に一生を得て復員できたことは、神仏・ご先祖様のご加護によるものと今でも固く信じています。現在はこの地で平穏な生活を



送らせてもらい、地域のみなさまに感謝しつつ頑張っています。」（西一之江江上町会会長・金井兼吉様より）

8月15日は、戦争を知る世

代も知らない世代も、様々な思いの中で過ごしたことでしょう。区内でも、滝野公園で原爆犠牲者追悼、そして旧中川では東京大空襲の犠牲者を慰霊する灯籠（とうろう）流しが行われました。

先の大戦で失われた日本国民の尊い命は、軍民合わせて310万人と言われます。他国の犠牲も考えれば、戦争の悲劇と平和への強い願いを、改めて痛感するばかりです。

江戸川区長

多田正見

平成 19 年 10 月 10 日号

先日、1万円が同封された手紙が届きました。差出人は、宇喜田小学校5年生の5人の男の子たちでした。

「区長さんへ、僕たちは2月に公園で1万円札を拾いました。交番に届けて半年が過ぎましたが、落とし主が見つからず、僕たちのところに返ってきました。落とした人に返せないのなら、何か区の仕事に役立ててもらおうということになりました。お願いします」

5人で相談している様子が目に浮かびました。これを分

ければ好きな本や学用品も買えるでしょう。映画や博物館にも行けるでしょう。でも…、こうした結論になったのだと思います。真(ま)っ直(す)



くに伸びゆく若木のような清々(すがすが)しさを感じます。話は変わりますが、敬老の日、区内の小・中学生約360人が銭湯で、お背中流

し隊のボランティアに取り組みました。この活動は今年で7年目。中には3回目、4回目という子もいます。「お年寄りから『あゝ気持ちがいい、ありがとうね』と言ってもらえるのがうれしくて…」、「孫のような子どもたちに背中を流してもらえて本当に幸せです」という声が聞かれます。やさしい心で人を思いやる、そんな子どもたちがたくさん育っていることを、本当にうれしく思います。

江戸川区長 **多田正見**

平成19年11月1日号

京成小岩商栄会は、松本勝義会長を中心に様々な活動に取り組んでいる、すこぶる元気のよい商店会です。

4年前、安全・安心まちづくり運動が始まった際、いち早くイエローベレー隊を結成して防犯パトロールに取り組んでくださり、また、子どもの見守りや放置自転車の整理など、地域のために精力的なボランティア活動を続けています。会長のモットーは「地域に役立ち、愛される商店会」。お店のサービスばかりでなく、こうした活動が商店

会の活性化につながるという信念を持っています。

この夏、地域の方から会長のもとに、「駅前に、熟年者のための自転車置き場を用意



してあげてほしい」というお願いがありました。それに応（こた）え、早速商店会による「シルバー駐輪コーナー」がつくられました。すると先

日、ある方から商店会に30万円もの寄付をいただいたとのこと。その理由は、駐輪対策や防犯など、商店会の姿勢に感動したからというものです。寄付をしたのはシルバー駐輪コーナーの利用者でした。会長も、改めて暮らしやすい地域づくりの大切さを考えさせられたそうです。

日ごろの地道な活動が、人の心に強く響くこともある、そんなすてきなお話だと感じました。

江戸川区長

多田正見

平成 19 年 12 月 1 日号

松本小学校は、開校当時から実のなる木を校庭に植え、子どもたちが大切に育てています。毎年、みかん、りんご、梨などの果物が実り、給食にも供されます。

その松本小1年生の子どもたちから、校庭で取れたみかんが手紙とともに送られてきました。「大きいみかん、小さいみかん、オレンジいろいろお日さまみたい。つるつるざらざら、たくさんありました。どうぞおめしあがりください」。とても温かい気持ちになりました。

果物や野菜など、自分たちで育てたものを収穫することは、子どもたちにとってとても貴重な経験になります。また、その味も格別なもので



しょう。

先日、区内の小・中学校で、「小松菜給食」を実施しました。この事業は、JA東京スマイル江戸川地区青年部のみ

なさんの、「自分たちが誇りとする区内産小松菜を食べてもらい、小松菜の本当の味を知ってもらおう」という思いで実現したもので、1・7トンの小松菜を区内106の全小・中学校に届けていただきました。栄養士もメニューに工夫を凝らし、子どもたちは大喜びだったようです。

小松菜生産に励む青年たちの心意気、子どもたちもきつと感じてくれたことでしょう。

江戸川区長

多田正見

平成 20 年 2 月 1 日号

お正月恒例の箱根駅伝は、今年も見ごたえのあるレースになりました。2000kmを超える距離を、各校10人の選手が襷（たすき）をつなぎます。これだけの長い距離にもかかわらず、いつもわずかな差でゴールに戻ってくることに大変驚きます。恐らく、各区間を任された選手が、持てる力の限界を出して挑んでいるからでしょう。

ところで駅伝は、私たちが望ましい地域社会を創（つく）り上げていくための過程に似ていると思います。住み良い

まちづくりは、多くの人々が長い時間をかけて、共通の目標と思いを抱きながら、世代をつなぐレースを駆け抜けることのように思えるのです。



その人がその時代に与えられた役割や目標に向かって、あらゆる努力を傾ける、その継続が、やがて理想の地域社会を形づくることになるのです。

昨年、本区は、「全国花のまちづくりコンクール」で日本一となる大賞を受賞し、「リブコム国際賞」でも銀賞を獲得することができました。この2つの賞は、区民と行政が長い時間をかけて、環境創造に取り組んできた努力と成果に対する評価です。まちづくりにゴールはありませんが、晴れやかな気持ちで、受賞というゴールテープを切った思いがいたします。

江戸川区長

多田正見

古くなった松江図書館の改築を機に、コミュニティ会館を併設した新しい施設が完成します。3月中旬に松江区民プラザが、4月下旬には松江図書館がオープンします。まちの更なる活性化につながればと期待しています。

ところで、この場所は、かつて「松江町役場」があったところですよ。実はこの松江町には、北原白秋作詞、山田耕筰作曲の「町歌」がありました。当時、このような著名人にどのようなお願いしたのかはわかりませんが、貴重な文

化の標（しるし）です。

北原白秋は、大正5年6月から1年余り、現在の北小岩に居を構えています。白秋全集を繙（ひもと）くと「葛飾



小品」という作品群があり、白秋が小岩村に転居してきたいきさつや、「紫烟草舎（しえんそうしゃ）」と名付けられた寓（ぐう）居の命名の由

来などが子細に記され、白秋が小岩での暮らしを愛し、満足していた様子が窺（うかが）えます。そうした縁もあって「松江町歌」の作詞を引き受けてくれたのでしょうか。

江戸川の地に思いを馳（は）せてくださった白秋に、改めて親しみを感じます。

『真近（まぢか）し青空／まさに起（た）つべし／誓って創（つく）らむ／理想の自治体／運河は到（いた）れり／野に水明（みずあか）れり／われらがこの町／人は和したり／輝け／新都市／起てよ松江／松江／松江／わかき松江』

江戸川区長

多田正見

平成 20 年 4 月 10 日号

子どもの頃（ころ）、先生から「勉強することも大切ですが、働くことはもっと大切です」と二宮金次郎を例に教わりました。当時は、子どものときから家業を手伝うのは当然であり、今、年配の方々は、そうした経験を通して世の中のことを学んできたでしょう。

中学2年生が5日間にわたり、区内企業や店舗などで仕事を体験をする「チャレンジ・ザ・ドリーム」が始まって3年が経（た）ちます。先日、19年度の体験報告会が行われ、

生徒から感想が寄せられました。「介護施設で熟年者のお世話をしました。初めは戸惑い、会話も思うようにできませんでした。両親の助言も



あり、次第にやりがいを感じることができました。コミュニケーションの大切さや難しさを実感し、改めて大人になることへの意欲をかき立てら

れました「遅刻して叱（しか）られ、仕事をする上でのルールを思い知らされました。また、ときには優しく励まされ、時が経つのを忘れるくらい充実した日々でした」

幼い頃、初めて大人と向き合って会話ができたときの喜びは、誰（だれ）もが経験してきたはずです。この体験学習は、多感な世代の子どもたち「かけがえのない何か」を残してくれることでしょう。

江戸川区長

多田正見

平成 20 年 5 月 1 日号

先日、韓国の政府関係者、NGO、社会貢献企業の方々が、本区の「すすくスクール」の視察に訪れました。今、韓国では、青少年の健全育成を目指した、社会的なシステムづくりに取り組んでいます。すすくスクールを鎌田小学校で始めてから、5年が経（た）ちました。この間、この独創的な取り組みが広く注目を集め、全国から285団体・1695人の方々が視察に訪れています。また、昨年度から始まった文部科学省の「放課後子どもプラン」のモ

デルとして取り上げられ、同様の事業が全国で展開され始めました。今や、その評判が隣国にまで及んでいることは、大変うれしい限りです。



今、少子化社会の中で、子どもたちの、人との関（かか）わりの少なさが問題視されています。学校と家庭という限られた世界でしか過ごすこと

のできない子どもたちに、何とかして地域ぐるみの人間教育ができないかと試みたこの取り組みが、地域の方々の大きな愛情と努力によって、素晴（すば）らしい形で成果をあげています。私はこれこそが、「地域の教育力」であると思っています。

地域で学ぶすすくスクールが、将来を担う子どもたちの大きな糧となることを切望しています。

江戸川区長

多田正見

平成 20 年 6 月 1 日号

初夏となりました。小岩菖蒲園まつりが始まり、あさがお市、金魚まつりなどの催しが待たれる季節です。また、風鈴、つりしのぶなど、区を代表する夏の風物詩が、区内のみならず広く話題となることでしょう。

昨今、区内伝統工芸者のみなさんが美術系大学の学生と連携して新たな製品開発を進め、その作品に注目が集まっています。4月には港区北青山に、経済産業省の支援による伝統工芸品の展示・販売館がオープンしました。全国か

ら集められた700点の展示品の中には、この連携から生まれた作品も並び、「本物」を求める人々で賑(にぎ)わっています。



ところで、昨年、江戸川区は「全国花のまちづくりコンクール」で大賞を受賞しました。これは、区民と区が長年にわたって花や緑を愛し、育

ててきた努力の結晶と言えるでしょう。今月7日には「全国花のまちづくり大会」が本区を舞台に開催されます。

古(いにしえ)から伝えられ、育(はぐく)まれてきた数々の伝統や風物、人々の手で積み重ねられてきた良き風土が本区に息づいていることは、区民の誇りであり、喜びでもあります。そして、それらをいつまでも大切にしていこうという、みなさんの豊かな心を感じます。

江戸川区長 **多田正見**

平成 20 年 7 月 10 日号

この春から「新川千本桜の会」が始めてくださった「さくら募金」が、わずか5か月で8000万円を超えました。会長の西野博さんも、「うれしい誤算」とおっしゃっています。募金活動は葛西地区を中心に行われましたが、区外に転居した方々も寄せてくださっているということです。現在、5年後の完成に向けて鋭意工事を進めています。この新川の再生に寄せる、みなさんの思いの深さをしみじみと感じます。

ところで、昨年本区が大賞

を受賞した「全国花のまちづくりコンクール」審査委員長の琉球大学・比嘉照夫名誉教授から話を聞く機会がありました。先生は、「お金をかけ



て花を飾ればいいというものではありません。花が美しく見えるためには、空も川もきれいで緑も豊かであることが必要です。そして、人々が地

域に愛着をもち、みんなの力であらゆる佇（たたず）まいを美しくしていこうという気概と努力なくしては、素晴（すば）らしいまちにはなりません。花はその象徴であり、お金では購（あがな）えない『地域の価値ある文化』なのです。区民とともに進める江戸川区の様々な取り組みは、全国の手本になりますよ」と言ってくださいました。うれしいお話です。今後の励みにしていきたいと思っています。

江戸川区長

多田正見

平成20年8月1日号

中国・四川省、そして日本列島でも東北地方を中心に、大地震が頻発しています。いずれ東京にも…、という懸念を強く感じます。

被害を最小限に抑えるためには、まず、まち全体を強固なものにしておくはなりません。本区では、既に88%の小・中学校で耐震工事が完了し、残る学校も3年以内に実施します。また、区民施設、保育園なども順次工事を進めています。そして今年度から、戸建て住宅や分譲マンションの耐震化支援を拡充しました。

ところで、区役所本庁舎は昨年、耐震工事を終えました。が、建物が古く、使い勝手もよくないため「建て替えを」という声も聞かれます。しか



し、新庁舎よりも、まずはまちの安全性を高めることが先決です。

江戸城の天守閣は、明暦の大火（1657年）により、

完成後わずか20年で焼失しました。「火事と喧嘩（けんか）は江戸の華」と言われるほど、江戸は火事の多かったまちです。老中たちの再建論に対し、会津藩主・保科正之の「平和が定着した時代に天守閣は無用。火災の起きにくい安全なまちづくりこそ大切」という意見に時の将軍・徳川家綱が賛同し、天守閣は終（つい）に再建されることはありませんでした。

庁舎のことは、ゆっくり考えましょう。

江戸川区長

多田正見

平成 20 年 9 月 1 日号

猛暑といわれた今年の夏も過ぎ去っていきました。台風の接近もなく、みなさんも夏らしい夏を過ごされたことと思います。

特に今年は北京五輪が開催され、新聞紙面には連日「金」「銀」「銅」の大きな活字が並び、格別の感動を与えてくれました。区内在住の谷本歩実さんが2大会連続で金メダルを獲得したことは、この上ない喜びです。また、柔道審判員として出場した宗家花火鍵屋15代目天野安喜子さんの、男子100kg級決勝での見事

な晴れ姿を、みなさんもお覧になったことでしょう。

国内でも、関東一高が春の選抜に続いて夏の甲子園大会に出場しました。惜しくもベ



スト16で敗退し無念の涙を呑(の)みました。本当に頑張ったと思います。

小・中学生の活躍も目覚ましく、江戸川南リトルリーグ

は硬式野球で全国制覇を果たし、アメリカで行われた世界選手権でも銅メダルを獲得しました。ほかにも、陸上、水泳、テニス、バレーボールなど数々の種目で、区内の子どもたちが全国を沸かせた夏でした。

こうした区民の活躍の陰には、多くの指導者の情熱と奉仕があることは言うまでもありません。江戸川区に培われたスポーツ文化の、誇るべき財産のひとつです。

江戸川区長

多田正見

平成 20 年 10 月 10 日号

葛西南部地域の区画整理は、昭和40年代に始まりました。当時の様子を覚えておられる方々にとって、今、美しく整ったまちの姿は、正に「隔世の感」の一語に尽きるでしょう。旧防潮堤以南には、清新町・臨海町、葛西臨海公園が誕生しました。そして防潮堤以北は、7つの地元区画整理組合によって事業が進められたのです。最後に残った葛西・東葛西組合の区画整理も、このほどほぼ完了し、40年に亘（わた）る壮大なまちづくりの一つの区切りとなりました。

今春、葛西駅前に日本一の地下駐輪場が完成し、先頃（ごろ）、上部の広場も新しい装いとなりました。区画整理という大事業をやり遂げた記念



として、葛西土地区画整理組合が風力発電の立派なモニュメントを、そして地域奉仕の心を込めて、東京臨海ロータリークラブが風力・太陽光発

電の時計塔を寄贈してくださいました。広場の風格を高め、エコ時代を象徴するものです。

中里前区長は言っておられました。「銅を銀に、銀を金に変えることはできないが、区画整理はまちを金に変える」。けだし名言です。広大な葛西のまちも駅前広場も、長年に亘（わた）る関係者の汗と涙の産物です。こうしたモニュメントに、地域を愛する人たちの魂が込められていると言えるでしょう。

江戸川区長

多田正見

平成 20 年 11 月 1 日号

子どもたちが、自分たちの学校の生い立ちや地域の歴史、現在のわがまちの様子を勉強することは、とても大切です。この時期、数多くの学校で行われる開校記念の周年行事は、子どもたちにとって、そうしたことを学ぶ絶好の機会となっていることでしょう。

学校の歴史は、そのまちの発展と深く関（かか）わり、地域の文化を形作っています。区内で最も古い歴史をもつ松江小学校は、開校して130年以上が経（た）ち、最も新しい東葛西小学校は、今年7

年目を迎えました。特に昭和40～50年代、人口増加に伴い子どもの数が急増した時代に、多くの学校が建てられました。地域のみなさんは、子どもた



ちの教育環境を少しでも良くしたいという願いを込め、情熱を傾けて、学校建設を支援してくださいました。各校には、そのような「心の歴史」

の積み重ねがあり、今なお開校以来の伝統が息づいていると思います。周年行事を機に、子どもたちはそれを学び、地域の方々は、改めて学校との関わりの深さを思い起こしてくれることでしょう。

良い校風、受け継がれるべき伝統とは、こうした地域とのつながりの中にこそ生まれいるものだと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 20 年 12 月 10 日号

あと半月余で新年を迎えます。今年も様々な話題に彩られた一年でした。特に、医療・保険分野では種々の制度改革が打ち出されています。これらは我が国が高度成長、人口増加を続けていた時代の制度が行き詰まってしまったもので、今後ますます議論を深めていかねばなりません。加えて世界的金融危機の煽（あお）りを受け、景気は後退し、厳しい経済状況が続いています。一方で、北京五輪で金メダルを本区に持ち帰ってくれた谷本歩実選手の活躍や、関東

一高の甲子園春夏連続出場は、私たちを大いに沸かせてくれました。また、すすくすくスクールやチャレンジ・ザ・ドリムなど、本区の特長ある施策



が全国の注目を集めていることもうれしいことです。そして、まちづくりも着実に進み、葛西駅前には日本一の地下駐輪場が完成しました。今後も、

新川千本桜構想やＪＲ小岩駅周辺のまちづくりなど、将来に向け、地域のみなさんと共に進める夢多き事業が続きます。

今年は、本区の揺るぎない地域力が一層の高まりを見せ、様々な課題解決に大きな力を発揮してくれた年でした。この力を来年へと繋（つな）げ、更なる発展の年にしたいと思います。

元気に良い新年をお迎えください。

江戸川区長

多田正見

平成 21 年 2 月 1 日号

年が明け、一（ひと）月が経（た）ちましたが、この間にもうれしい話題がたくさんありました。小松川平井地区連合町会やなぎさニュータウン管理組合の優れた防災活動が、消防総監表彰を受賞しました。また、区内小学生の自由研究が文部科学大臣賞を受賞、学生スポーツ界では、本区出身の若者が大勢活躍しています。そして、年末に国が発表した人口推計では、区の人口は今後も増え続け、子どもが多い若々しい区となることが窺（うかが）えます。

ところで、年始からの話題の中心は、やはり厳しい経済状況でした。昨年11月から先月20日までの期間に区があっせんした融資総額は、120



億円に上ります。また、政府による緊急保証制度の不況業種指定は、10月の185業種から698業種に拡大、認定を受ける企業も区内で200

0社に達しており、情勢の厳しさを身に染みて感じます。しかし、頼もしいことに各業界の方々は、一様にこの危機を新たな転換への機会として受け止めています。区も新年度予算では、産業界の活力を高めるべく方策を練りました。米国の新大統領が就任演説で行った国民への呼びかけは大変印象的でした。私たちも、それぞれの努力を結集して、活力ある未来を築いていきたいものです。

江戸川区長

多田正見

平成 21 年 3 月 10 日号

不況という冷たい風は未
(いま)だ吹き止(や)みま
せんが、季節はようやく春を
迎えようとしています。その
中で出会った3人の方の、心
温まる話をお伝えしましょう。

88歳の女性は、交通遺児や
歳末たすけあいのためにと、
この十数年、毎年30万円をご
寄付くださいます。

また、82歳の女性は、毎年
2月、誕生日を迎えると、区
に10万円をお届けくださいま
す。「これまで私が元気で過ご
してこられたのは、地域のみ
なさんの温かい支えのおかげ

です」とおっしゃっています。
今年87歳になる男性は、長
く本区の小学校の校長を務め
られた方です。匿名とのご希
望で100万円を寄付してく



ださいました。今年で2回目
です。現在は区内にお住まい
ではありませんが、「長年、江
戸川区の教育に携わり、区の
子どもたちがかわいくてなり

ません。子どもたちのために
役立ててください」とおっ
しゃっています。

今、本区には、地域を愛し、
様々な形で貢献したいという
方々が大勢いらっしゃいます。
こうしたご寄付も、地域や周
りの人々を思う尊い気持ちの
表れです。

春の陽射(ひざ)しにも似
たみなさんの温かい思いが、
私たちのまちに優しい花を咲
かせてくれるでしょう。

江戸川区長

多田正見

平成 21 年 4 月 10 日号

先日、高齢化問題を考える国際専門家会議が、3 日間にわたり本区で開催され、中国（上海・浙江）・韓国・シンガポール・台湾といった東アジアの国や地域が参加しました。本区が舞台となったのは、地域を挙げて高齢者福祉に取り組んでいることが高く評価されていることです。最終日のパネルディスカッションには、我が国の高齢者問題の専門家を代表する、堀田力氏や樋口恵子氏をお迎えし、私もパネリストの一員として意見を述べました。

この会議は「少子高齢化社会への対応策」が主なテーマで、各国共通の課題は「増えゆく高齢者が、いかにいきいきと地域社会に貢献し、活躍



し続けられるか」ということでした。そのために、子育て・教育の応援、環境問題への実践活動、コミュニティ育成のための地域参加などが議論さ

れました。私は、これらの場面で既に多くの区民が取り組んできた輝かしい実績を、誇りを持って伝えることができました。諸外国の方々も、長い歴史の中で培われてきた本区の地域力と、その中で支えられている健康・福祉施策を、「江戸川区に学びたい」と異口同音に称賛してくださいました。

こうした喜ばしい話を、区民のみなさんにも、ぜひお伝えしたいと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 21 年 5 月 1 日号

環境をよくする絵画コンクールには、毎年1万数千人の子どもたちから応募があります。入選作には賞状が贈られますが、表彰を受けるとき、子どもたちは何とも言えない喜びの表情を見せてくれます。自分の努力が認められ賞を受けるということは、どんなにか嬉（うれ）しいことなのでしょう。

先月、横浜市中、皇太子殿下・雅子妃殿下ご臨席のもと「全国みどりの愛護のつどい」が開かれ、両殿下はしだれ桜の苗木を植樹されました。式

典の中で、「みどりの愛護」功労者国土交通大臣表彰が行われ、全国95団体中、本区からも江戸川園芸グループ連絡会と江戸川緑伸会の2団体が表



彰されました。いずれも30年余という長きにわたり、樹木や花壇の管理、清掃活動、区民への園芸指導など、緑を守り、育てるための地道な活動

を続けてきた団体です。先日、代表の上村さんと工藤さんにお目にかかりましたが、その表情には、受賞の喜びと、人と緑を愛して止（や）まない深い年輪が滲（にじ）み出ているようでした。

昨今、一之江境川親水公園を愛する会や小松川千本桜を愛する会など、花と緑の愛護や環境保護に関する受賞が相次いでいます。区民のみならずの心意気に贈られるこうした表彰は、私たちにも大きな喜びです。

江戸川区長

多田正見

平成 21 年 6 月 1 日号

行船公園には、この土地を寄贈してくださった田中源氏の銅像が建てられています。このたび、田中氏にまつわる新しいお話を知ることとなりました。

大正 6 年 10 月の高潮は、旧葛西村 230 人の尊い命を奪ったという、甚大な被害をもたらしました。当時の井上友一東京府知事は直ちに被災者の救済に乗り出し、家屋の復旧や食糧の供給など、各般にわたって手厚い支援の手を差し伸べてくださいました。2 年後、49 歳の若さで急逝された

井上氏を悼み、田中氏をはじめとする旧葛西村住民は、この恩に報いたいとの思いで、文京区の墓前に 2 基の灯籠を献納したのです。



先ごろ井上家から、「この灯籠をご縁のある江戸川区に」というお話があり、貴重な記念碑として田中氏の銅像横に設置することとなりました。

そして先日、ご令孫である井上友幸氏、田中一郎氏をはじめ、灯籠献納にゆかりのある 12 名の方々とお披露目（ひろめ）式を行いました。

2 年ほど前、当時の仲町青年団員が残した災害記録が手に入り、その克明な記述に感じ入ったのですが、奇しくもこの二つの事柄が機縁となり、この災害をより深く知り得たことに格別の感慨を覚えます。心に残る災害史の 1 ページです。

江戸川区長 **多田正見**

少子化が進むわが国ですが、政府の発表によると、昨年の国の合計特殊出生率は1・37で、3年連続で前年を上回りました。また、本区も同様に前年の1・33から1・37へと上昇しました。東京都全体では1・09であることを考えると、都市部では相当高い数値であると言えるでしょう。ちなみに23区では、常に一番高い出生率を誇っています。

もは1人か2人という時代、4人、5人とお子さんがいる家庭も多く、とても頼もしく思います。



女性は出産という大役を負っています。最近感じるのは女の子の活躍です。各種スポーツはもとより、和太鼓、吹奏楽演奏など、女子の独壇場

です。男性である私は、「男の子はどうしたのだろう」とも思うのですが、男子は男子なりに活躍してくれているのでしょう。男子も女子も健やかに育ってほしいのはもちろんですが、女の子が元気でいてくれることは、将来の日本に明るいものを感じます。

そういえば、区内の百歳以上の方々は100人を超えました。しかも、その約9割の方が女性であるということは、これまたどうしてなのでしょう…。

江戸川区長

多田正見

平成 21 年 8 月 1 日号

篠崎文化プラザで開催中の企画展「金魚百景」には、毎日約 800 人もの方々が訪れています。ここでは金魚にまつわる歴史・文化をはじめ、品種や養殖技術など様々な観点から金魚が紹介されており、この企画展を見ただけで「金魚博士」になれるような気がします。

また、毎年 4 月に行われる日本観賞魚フェアは、有料にもかかわらず 2 万人以上の方が訪れます。先月行われた金魚まつりは、2 日間で 4 万 8000 人。金魚すくいには、

親子連れが長蛇の列をなしました。金魚には、我々の心の奥にある何かを蘇（よみがえ）らせてくれる、不思議な力があるのかもしれない。



江戸川区の金魚の養殖は明治時代から始まりました。都市化の波の中で変遷を辿（たど）りながらも、日本の三大産地の一つとして名を馳（は）

せています。今でも区内には、伝統を受け継ぎ、生産に励んでいる方がいらっしやいます。その一人、堀口英明さんは、毎年金魚の品種改良に余念がありません。新しい品種の創作はたやすいことではありませんが、この方を見ていると、美しき生命誕生の芸術を探索するという飽くなき情熱が伝わってきます。

涼を呼ぶ金魚に、ひととき、暑さを忘れてみてはいかがでしょうか。

江戸川区長

多田正見

平成21年9月10日号

この夏は、都議選に続き、衆院選も行われました。時代を画する出発のときを迎え、万般にわたり、国民・都民の期待に応（こた）えられる政治を望むところです。

さて、9月1日「防災の日」には、各地で様々な訓練や催しが行われました。ご存じのように、防災の日は、大正12年の関東大震災に因（ちな）んで定められたものです。この地震により、東京都とその周辺地域は壊滅的な被害を受けました。

我が江戸川区も、大震災に

加え、昭和22年にカスリーン台風、24年にキティ台風に見舞われました。軟弱地盤であり、陸地面積の約70%が海抜ゼロメートル。本区は地震の



みならず、水害に対しても脆弱（ぜいじゃく）なまちなのです。そのため、多くの先人たちと共に、区画整理事業、幹線道路の整備、堤防の強化、

施設の耐震化などを強力に進めてきましたが、まだまだ道半ばです。更には、災害が発生したときの対応も、区民と行政が一体となって考えていかなければなりません。

かつて、物理学者でもあった寺田寅彦氏は、「天災は忘れられたる頃来（きた）る」という名言を残しました。昨今、各地で災害が多発していることを考えると、「天災は忘れる間もなくやってくる」の感があり、気を引き締めていかなければなりません。

江戸川区長

多田正見

平成 21 年 10 月 20 日号

先日、浴場組合江戸川支部の代表の方が、子どもたちの教育のためにと金一封を持参してくださいました。これは、毎年敬老の日に、区内の公衆浴場で小・中学生が熟年者の背中を流す「お背中流し隊」への感謝の気持ちとのことでした。約2時間、汗をかきながら背中を流し続けるのは大変なことです。熟年者も子どもたちとふれあい、幸せな思いに浸ったことでしょう。

また、先頃（さきごろ）の区民まつりでは、141名の小・中学生が「肩コリなくし

隊」として肩もみの奉仕をしてくれました。このコーナーには、朝から夕方までひっきりなしに、1500人もの方が訪れました。実は私もほん



の数分間、肩をもんでもらったのですが、心身共に癒（いや）される思いでした。

核家族化が進む今日、世代間のスキンシップを求めるこ

とは、家庭内ですら難しくなっています。こうした機会に積極的に参加してくれる子どもたちの心意気を頼もしく感じます。

区民まつりでは、ほかにもボイススカウト、交通少年団、ジュニアリーダーなど多くの子どもたちが、駐輪場整理や会場清掃をはじめ、様々な奉仕活動に一生懸命取り組んでくれました。人知れず奉仕する健気（けなげ）な子どもたち、深い愛（いと）おしさを感じます。

江戸川区長

多田正見

平成 21 年 11 月 1 日号

新型インフルエンザの流行が拡大し、学校の休校や行事の中止など、様々な影響が出ています。関係機関も、万全の対策を講じるべく頑張っているところですよ。そうした中、区立中学校の修学旅行は、3か月ほど遅れて実施しました。中学生にとって、修学旅行は一生の思い出です。全校で無事実施できたことは、大変喜ばしいことです。

さて、東小岩・恵仁堂医院の山上健次郎先生は、50余年の長きにわたり学校医を務められています。江戸川区医師

会の会長も歴任されました。大正生まれのお歳（とし）とは思えないほどお元気で、多くの人に親しまれている名医です。先生は修学旅行にはい



つも自発的に同行され、生徒の健康状態を見てくださいます。毎年私に同行記を随筆にして読ませてくださるのですが、特に今年は気を遣われた

とのことでした。それでも生徒が一人、発熱で帰京した以外は大事なく、ホッと胸を撫（な）で下ろしたとのことですよ。

以前は生徒たちと同じように比叡山を歩いたそうですが、「最近はなかなか付いて行けず：」「いつそ宿で待っていてようかと、時に考えてしまったり：」とお話。子どもたちのため、これほどまでに尽くしてくださる方は、なかなか居（お）られません。頭が下がる思いですよ。

江戸川区長

多田正見

平成 21 年 12 月 1 日号

色づいた木々の葉も散り始め、初冬の趣の中に、歳月の流れの早さを感じます。昨秋以降、不況の風が吹き荒れ、まさにこの一年は苦難の道でありました。加えて国政選挙では、戦後初と言っているほどの政権交代があり、何か騒がしい世相の中で年の瀬を迎えようとしています。

区は、昨年从不況対策として、特別借換融資をはじめ種々の緊急経済対策を打ち出してきました。この一年間のあっせん融資を含めた件数は、実に4400件、金額にして

314億円にも上ります。もちろん、こうした施策を活用していただくのはうれしいのですが、その数に、改めて多くのの方々の苦境を痛感いたし



ます。加えて、旧政権が打ち出した15兆円に上る経済対策は、新政権によって留保されたものが多く、それらに代わる新たな施策が待たれます。

このような中であって、先般、区内外のものづくり産業133社が参加し、「産業ときめきフェア」が開催されました。自社の製品や技術力をアピールし、情報交換やビジネスチャンスを拡大しようとする姿に、産業人としての逞（たくま）しい気概を改めて感じました。私たちの将来に、明るい希望の光を見るような思いです。

江戸川区長

多田正見

平成 22 年 2 月 1 日号

子どもたちは、多くの人との関（かか）わりの中で様々な影響を受け、あるいは学びながら成長します。しかし、少子化が進み、家庭と学校の往復という狭い社会の中で、人との付き合いが限られてきていると言われています。確かにかつては兄弟も多く、祖父母も同居するなど、子どもたちを取り巻く人間関係は多彩でした。

今、育ちゆく子どもたちのために、できるだけ多くの人とふれあえる機会を、社会として創（つく）り出していく

ことが大切です。その思いで始めたのが、すすくスクールです。大人たちが持つ知識や経験を教わりながら、その奥にある人としてのあり方や、



人と付き合う上でのルール、マナーを学ぶ最良の機会となります。全校で実施して丸5年になりますが、地域のみなさんの熱意により、大きな成

果を上げています。今回、その実績が認められ、全国4自治体の一つとして「地域づくり総務大臣表彰」を受賞しました。

作家の島崎藤村はその作品の中で、自身の成長を例え、記しています。「私は若い頃（ころ）、大したものを持っていませんでした。せいぜい銀貨か銅貨です。しかし、長い人生を振り返ってみると、様々な人との出会いを通して、それらはすべて金貨に変わっていました」。

江戸川区長

多田正見

平成 22 年 3 月 10 日号

冬季オリンピックが閉幕しました。日本選手のすばらしい活躍が瞼（まぶた）によみがえります。中でもフィギュアスケートの浅田真央選手は大健闘。わずかのところで金メダルを逃しましたが、悔しさと達成感の入り混じったその表情には、言葉にできない格別なものがありました。ここに至る努力を思えば、「よくぞ！」という気持ちです。

1月下旬に全国中学校スケート大会が長野市で開催され、本区から中学2年生の女子生徒が、東京都代表として

出場しました。出場を前に報告に来てくれたとき、日頃（ひごろ）の練習の様子を聞くことができました。

幼い頃、スポーツランドで



フィギュアスケートを始め、上達してからは東伏見まで通ってコーチの指導を受けているそうです。朝4時から1時間半かけてリンクに向かい、

戻ってきて登校。そして、下校後にはまたリンクへということです。「えっ！週何回？」と聞くと、「毎日です」という答え。私は驚嘆しました。その根性に感服いたします。今では3回転ジャンプも跳べるという彼女の成績は、71人中16位という見事なものでした。

「私の夢は浅田真央さんのようになることです」と言っていた、にこやかな顔が目につかびます。

江戸川区長

多田正見

平成 22 年 4 月 10 日号

毎年3月の最終土曜日に、小松川平井地区と小岩北地区で、小学校卒業を記念したナイトウォークが行われます。年々参加者が増え、今では小学校時代を締めくくる、忘れ得ぬ行事となっています。

17回目を迎えた小松川平井地区は、小松川小学校を出発し、皇居を一周して戻る27km。一方、8回目となる小岩北地区は、例年、上小岩小学校を出発し、江戸川土手を南葛西のなぎさ公園まで往復する、こちらも27kmのコースです。夜10時に出発して、戻ってく

るのは明け方6時頃（ごろ）。おそらく参加する子どもたちも、これほどの道程（みちのり）を歩くのは初めての体験でしょう。最初は元気いっば



いの足取りも、ゴール近くともなれば歯を食いしばって、であろうと思います。それでも、歩き遂げた満足感と自信は、かけがえのない宝物とな

るに違いありません。

こうした行事は、地域のみなさんの協力無くしてできるものではありません。事前準備はもちろん、一緒に歩いてくださる応援団、そして道中の安全を確保してくださる方々など、みなさんの子どもたちを思う気持ちに頭が下がります。

今回は冬が舞い戻ったような寒さの中でしたが、頑張り抜いた子どもたちに、心からの拍手を贈ります。

江戸川区長

多田正見

平成 22 年 5 月 1 日号

球春到来し、河川敷に子どもたちの歓声が響きます。私は常々、区内で少年野球が盛んなのは、何をおいても指導者の方々のおかげと思っています。休日を返上し、炎天下に汗と砂ぼこりにまみれて子どもたちと向き合うのは、「野球が好き」というだけでは到底できるものではありません。

しかし、ある指導者の方がおっしゃいました。「野球が好きな子どもたちが大勢いるから、我々もやりがいを持てるのです。もし子どもたちがいなければ、僕たちはただのオジサンなのですよ」と…。これには感服いたしました。

歌人の寺山修司は、「いい生徒あつてこそ、いい先生たり得る」と言いました。いい教



育とは、そうした間柄の中で生まれるものだ…、ということとです。幕末、吉田松陰が主宰した「松下村塾」が、高杉晋作、伊藤博文ら、多くの優れた志士を輩出したことなども、まさにそれを物語っていると思います。

少年野球に限ったことではありませんが、良い指導者のもとには、意欲のある子どもたちが集います。これこそが江戸川区の誇るべき風土であると思います。そして、こうした環境こそが、青少年の健全育成に、より多くの実りをもたらすことになるのです。

江戸川区長
多田正見

平成 22 年 6 月 1 日号

今年は足踏みをしながらの春の訪れでしたが、5月に入り、一気に初夏を感じさせる陽気になりました。自然とは正直なもので、この数週間、輝く新緑が至る所でまちを彩っています。余所（よそ）からいらした方が、「江戸川区は緑が多いところですね」と言ってくださるのも、この季節です。

思えば「ゆたかな心 地にみどり」を合い言葉に緑化運動が始まって、今年で40年になります。当時、急激な都市化による様々な環境問題を解

決しようと、区を挙げて「環境浄化運動」に取り組みました。その目玉となったのが緑化運動です。その後、古川をはじめ、小松川境川、一之江



境川などの親水公園がまちを潤し、海辺には東京ウォーターフロント最大の自然公園、葛西臨海公園が誕生しました。時は流れ、環境問題は今日、

地球温暖化やそれに伴う海面上昇、枯渇する地球資源への対応など、様々な分野に広がっています。しかし「緑化」は、いつの時代もそのテーマの中心として普遍であると思っています。

先日、東京消防庁のヘリコプターに乗る機会がありました。23区を上空から眺めたのですが、皇居や明治神宮などは別として、やはり江戸川区の緑の美しさは格別です。とても誇らしく感じました。

江戸川区長

多田正見

平成 22 年 7 月 1 日号

鳩山政権から菅政権へと移行し、間もなく参院選も行われます。政局は目まぐるしく動いていますが、何といても我が国最大の課題は、世界に知れた借金大国であることです。現在、国の債務残高は 880 兆円余、国民一人あたり約 693 万円という膨大な額です。この借金を、いつ誰（だれ）が返していくのかと考えると、子ども手当をもらう子どもたちに降りかかっていかなければよいが…と思います。

ところで、総務省が発表す

る全国自治体の財政状況によると、江戸川区は収入に占める区税の割合が低く、23 区中 18 位です。若い世代が多いため、これもやむを得ません。



一方、区の独自施策に使っているお金の割合は、23 区中第 2 位です。

本区は、人口千人当たりの職員数が 23 区中 2 番目に少な

く、一般財源に占める人件費の割合は 23 区中最小です。また、収入に対する借金の返済割合は、なんと全国で一番低い数値で、区債残高は区民一人あたり約 2 万 7 0 0 0 円となつています。様々な形で健全財政への努力を積み重ねてきたことで、税収が少ない割に、財政構造は極めて良好であるということです。

こうした指標は、言わば自治体の通信簿です。良い点数を頂けたことを、みなさんと共に喜びたいですね。

江戸川区長

多田正見

平成 22 年 8 月 1 日号

7月中旬から、にわかには酷暑の日々となりました。江戸川区では、毎年、梅雨明けの時期に、広大な河川敷を利用した大規模な防災訓練を実施しています。今年も照りつける太陽の下、49機関・4協力団体の1500人が参加し、本番さながらの訓練を展開しました。

訓練内容は、警視庁や消防庁などの専門機関が機動力を発揮するものから住民参加型のものまで様々です。いずれの訓練も、安全・安心にかけ、強い思いが感じられ、胸が

打たれます。訓練は2時間ほどですが、当日に至るまでの関係者の準備には数か月を要します。ここにまた、この訓練の大きな意義があると思います。



ます。各機関が日頃（ごろ）から連絡・調整を重ね、連携体制を構築することが大切であり、それによって、更なる防災力が生み出されるのです。

こうした意義ある訓練を、2000人以上の方に参観していただきました。うれしいのは小・中学生がとても多いことです。よくぞこれほどの訓練になったものだ、感慨も一入（ひとしお）です。

「天災は忘れられたる頃来（きた）る」は古くからの言葉ですが、昨今の災害報道は、むしろ「忘れる暇（いとま）もない」ほどです。改めて、日々の備えと連携の大切さを肝に銘じたいものです。

江戸川区長

多田正見

平成 22 年 9 月 1 日号

先日、百歳を迎えた山崎たづさんを訪問しました。すこぶるお元気で、「よく来てくださいました」と喜びを満面に迎えてくれました。6人のお子さんも健在で、明るく賑（にぎ）やかなご一家です。

山崎さんは21歳で結婚後、32歳の若さでご主人と死別され、世の中の辛苦を乗り越えて、今日の長寿を噛（か）み締めておられます。

「ご長男が、私に一冊の冊子をくださいました。それは、6人の兄弟が記憶の糸をたどってまとめあげた、『母の

一生』と題する100ページを超える山崎さんの一代記です。幼少の頃（ころ）、学業は常に一番でありながら、貧しさ故に学校を辞め、厳しい



奉公を体験。夫と死別後は死に物狂いの子育て。そして戦中・戦後の厳しさを乗り越え、今なお続くナット製作の会社を興す等々。母としての愛情

や仕事への飽くなき情熱、そこから溢（あふ）れ出る逞（たくま）しい生き様は、ご長男曰（いわ）く「まさに『おしん』の世界ですよ」とのこと。

一代記の巻末には、『母の一言集』として、珠玉の言葉が綴（つづ）られています。「私はどこに行っても幸せの歌を唄（うた）って、そこに幸せを置いてくるんだよ。大きな顔して、しっかりした姿で幸せの気持ちで唄うんだよ」。

苦難を幸せに、暗闇（くらやみ）を光に変える、これは人間の持つ底知れぬ力でしょうか。

江戸川区長 多田正見

平成 22 年 10 月 1 日号

昔から「暑さ寒さも彼岸まで」と言いますが、暑かった夏が終わり、木々の葉が美しく彩りを増す秋を迎えました。それにしても、今年の夏は猛烈な暑さでした。真夏日や猛暑日の日数もさることながら、1か月近くも雨が降らないという、気温・日照ともに記録づくめの夏でした。必然、道路や公園の樹木も衰弱します。高木は自らの葉を枯らして生命を保ちますが、低木や株物はそうはいきません。区内のあちこちで、可哀想（かわいそう）に枯れた草木を見

かけました。

一方、これだけ晴天が続く、例年に比べ台風が発生も少ないですが、それでも山間部にはある程度の降雨があり、東



京で生活用水やプールなどの水に困ることはありませんでした。

姉妹都市ゴスフォード市のあるオーストラリアは、広大

な大陸ではありますが砂漠化が進む国です。雨が降ってもたちどころに大地に吸収され、湖すら乾いてしまう土地柄です。水は極めて貴重で、渇水期には洗車さえ制限されるということ。日本も同様に、雨が降ればあつという間に海に流れ込む貯水力に乏しい国土ですが、山間部に建設された数多くのダムのおかげで水に困ることがありません。いかに幸せかと考える昨今です。

江戸川区長

多田正見

平成 22 年 11 月 1 日号

区では2年に一度、区民世論調査を実施しています。先日、今回実施した調査の結果がまとまりました。

「永住意向」は前回を上回る78・8%、これは、他区と比べても高い水準であり、大変うれしいことです。

区政や暮らし全般に対する満足度も大きく上昇しています。中でも高い評価を頂いたのが、「公園や水辺の整備」です。本区の公園面積は約756haで23区1位を誇ります。2位の江東区と3位の足立区を足しても及ばない、圧

倒的な広さです。まさに「水と緑のまち江戸川区」です。

また、「買い物物の便」の満足度も59・5%と、前回から7ポイント近く上昇しました。



これは、区内商店街のみならず、人の努力の証（あかし）だと思います。

今後推進してほしい施策としては、防犯対策、高齢者福

祉、子育て支援、震災・水害対策、学校教育などが挙げられます。確かにいずれも重要課題で、これからますます拡充を図っていかねければなりません。

ただ、今回の調査結果を見て思うのですが、2年前と比べて、総じて区政への評価が高まっていることが感じられます。これは、「わがまち江戸川区」を思う、区民のみなさんと区の協働による努力の成果だと思ふのです。

江戸川区長

多田正見

平成 22 年 12 月 10 日号

仕事などの事情で、ご家庭でお子さんを保育できない方への保育支援は重要な課題です。中でも乳児期の保育は格別大切です。区では、乳児はできるだけ家庭的な愛情やスキンシップの中で育てることが望ましいと考え、保育ママ制度による保育を進めています。

昭和44年に始まったこの制度は、既に40年が経ち、保育ママにお世話になったお子さんは、これまでに1万4000人を数えます。そうした中、保育ママの皆さんが、お互い

の資質を高め、励まし合っていこうと「保育ママの会」をつくり、こちらは30周年を迎えました。先日、その会合に出席し、心打たれる話を数多



く聞かせていただきました。保護者が赤ちゃんを預けるのはわずかな期間です。しかし、保育ママとの家族ぐるみの縁は、その後、入学式、成

人式、そして結婚式と、何十年にもわたって続くこともあるそうです。お母さん自身の子育ての悩みにも答えてくださいます。まさに、かけがえないもう一人の母なのです。

赤ちゃんを預かることは責任の重い仕事で、決して楽なものではありません、でも、皆さんから異口同音に、「私たちは、赤ちゃんから元気と生きがいをもらっています」と言われ、何とも頭が下がる思いでした。

江戸川区長

多田正見

平成 23 年 2 月 1 日号

今年、区内で新たに成人を迎えた皆さんは6200人。成人式会場の総合文化センターは、終日、晴れ着姿の男女で賑（にぎ）わいました。式典は厳粛な雰囲気の中で行われ、参加した皆さんは、成人を迎えた喜びをかみ締めたことでしょう。

また、区内の各障害者施設でも「成人を祝う会」が催され、施設利用者や保護者の方々が集い、アットホームな雰囲気の中、式典やアトラクションが行われました。その中で、成人を迎えた我が子に

向けてお母さんが朗読した一編の詩に、とても心を打たれました。

「望んで、望んでやっと生まれた、小さな赤ちゃんだった。」



た『隆矢（りゅうや）』が成人式を迎えました。電車で母子通学をした9年半、母はどれだけ泣いたか分かりませんが、でもあなたの障害と向き合い、

一緒に電車を通う中で、母親である私が育てられました。二十歳になったあなたと、休日のために都内各地に遊びに出かけているなど、あの頃には夢のようでしたね。今は夢のように思えることも、いつかきつと実現させましょうね。感謝を忘れず、ハンデがあっても豊かな人生を歩いていきましよう。成人おめでとう」。人は、悩みながら懸命に生きてこそ、大きな喜びを得ることができのだと思います。感動一入（ひとしお）でした。

江戸川区長

多田正見

平成 23 年 3 月 10 日号

正月が過ぎて、早、桃の節句かと思えば、いよいよ桜の季節です。水温（ぬる）む3月を迎え、つぼみも膨らみ、開花が待ち望まれます。区内を見渡せば、至る所に桜の若木や古木。その花の下で、我が世の春とは言わないまでも和気藹々（あいあい）の光景が見られるのも間もなくのことです。

かつて区内の桜と言えば、篠崎水門付近にしかなかったように思います。この桜は、日露戦争の戦勝記念として植えられました。当時の桜から

は代替わりしているでしょうが、今でも立派な大木が見応（ごた）えのある花を咲かせてくれます。

区はこの40年、区民と共に



緑化運動に取り組んできました。その中で、皆さんから要望が高いのは、やはり桜です。そこで、街中の公園や親水公園などに、数多くの桜を植え

てきました。

今では区内の桜は1万5000本。中でも小松川千本桜は圧巻です。また、江戸時代に水運の要衝として栄えた新川にも千本桜を造成中で、現在およそ半分が完成しています。都内の桜と言えば、新宿御苑や千鳥ヶ淵、上野恩賜公園などが有名ですが、それらにも勝る名所になりつつあると言えるでしょう。

桜の下で輝く笑顔。「花処（どころ）、江戸川区」に、春はそこまで来ています。

江戸川区長 **多田正見**

平成 23 年 4 月 10 日号

大地震、大津波、そして原発の事故。これらの文字の上に「超」が付くような大災害になりました。亡くなられた多くの方々に哀悼の意を表します。また、今なお痛ましい生活を続けている方々に、どのような言葉をかけてよいのか分かりません。国を挙げて、あるいは海外からも救援の手が差し伸べられています。が、長い苦難の道のりがまさに始まったばかりです。

この地震により、区役所本庁舎屋上の重さ30トンの煙突が根元から折れ、2日間かけ

て撤去しました。もし地上に落ちていたらと思うと肝を冷やしました。

また、清新町の液状化には驚きましたが、隣の浦安市で



は埋立地の大半が大被害を受けました。市長から直接電話で復旧応援要請があり、区内業者の皆さんにも大変お世話になりました。

一方、多くの義援金をはじめ、区民の皆さんの温かい支援の輪が広がっています。福島県から被災者が避難しているくつろぎの家では、近隣の皆さんが食事の差し入れや生活用品を提供してくださっています。

作家で僧侶の瀬戸内寂聴さんの朝日新聞への寄稿、「無常 どん底は続かない どんな不幸の中でも希望の見える世 信じて」のように、みんな希望の光を灯（とも）していきたいものです。

江戸川区長

多田正見

平成 23 年 6 月 1 日号

震災で甚大な被害を受けた宮城県気仙沼市に区から多くの支援職員を派遣していることもあり、過日、現地を訪ねました。その凄（すさ）ましい惨状は、まさに目を覆うほどのものでした。

地震、津波、台風、火山の噴火……。日本列島はその歴史の中で幾多の災害に繰り返し見舞われ、その都度、人々は悲惨な苦痛を味わってきました。次なる災害に備え、人知の及ぶ限り対策を講じて、その努力が一瞬にして打ち碎かれることが幾度もあったこととでしょう。有史以前のこと

は知る由もありませんが、今回、東日本を襲った大災害は、今を生きる我々が受けて立たざるを得ない試練です。

一方、東北・関東地方は、平時にあっては太平洋の豊かな海原や風光を、自然が与えて



てくれた何よりの贈り物として享受してきたことも事実です。むしろその恵みにより、日本人独特の自然観や文化観を養うことができました。私たちの心の中には、自然を畏

怖（いふ）すると同時にこよなく愛する、その両面が存在しています。震災に直面した日本人の冷静さや秩序が、諸外国から大きな称賛を受けていますが、それもこのような自然観の中で培われた「心の遺伝子」なのでしょう。

歴史は繰り返すと言われます。災害も繰り返し襲ってくると考えれば、先人がそうであったように、その苦難を逞（たくま）しく乗り越えていく勇気が私たちにもあるはずです。いつの日か、再び平穏な海を取り戻す日まで……。頑張らしましょう。

江戸川区長

多田正見

平成 23 年 7 月 1 日号

夏至を待っていたかのように一気に気温が上がリ、暑い夏がやってきました。昨夏、日本全国を猛暑が襲い、熱中症が多くの人々を苦しめたことは、記憶に新しいところです。

気象庁の発表によると、関東地方の今年の暑さは平年並みかやや高めとのこと。しかし、この夏がどうなるかは別として、昨年と大きく違うのは原発事故による電力危機があることです。

もし電力消費量が昨年同様ということになると、電力供給が間に合わず、計画停電あ

るいは予期せぬ大規模停電が発生することになりかねません。これは、全ての社会的機能が停止することを意味します。こうした事態を何として



も回避しようと、国は昨夏比 15% 減の節電を呼び掛けました。本区では、その目標値の達成にとどまらず、区施設で 20%、25% の節電を目指した

取り組みを進めています。

今、街なかの家電販売店では、エアコンや冷蔵庫、テレビなど、省エネ型の製品が在庫不足になるほど売れているそうです。買い替え費用はかかりますが、皆さんの高い節電意識がうかがえます。もちろん、長い目で見れば電気代の節約にもつながります。

ご家庭や街の灯りは幾分暗くなりますが、心は明るい夏にしたいものです。

江戸川区長

多田正見

平成 23 年 8 月 1 日号

被災地にも厳しい夏がやってきました。未（いま）だ復興への道筋も見えませんが、この大震災で被災された方々に対し、多くの区民の皆さんが、震災発生直後から義援金を寄せてくださいました。

小学生による募金活動、様々な地域団体や町会自治会の皆さんの一丸となったご協力など、個人・団体を問わず、本当にたくさんさんの真心が集まりました。

5月末で一旦集計し、被災地にお届けしましたが、その額は3億5千万円に達しました。

た。これは、阪神・淡路大震災のときをはるかに上回る金額です。しかも、その後も義援金を寄せてくださる方は途切れることがなく、6月以降



だけでも1千万円を超えています。

先日、各区に直接寄せられた義援金額の一覧を目にする機会がありました。すると江

戸川区は、何と断トツの第1位、2番目の区の2倍以上の金額です。また、1億円を超える区は、23区中、半数にも及びません。思わず「うーんと…」。

他区のことをあれこれ言うつもりはありませんが、江戸川区民の格別な心意気が確かに存在することを感じ、温かい気持ちに包まれました。これこそ江戸川区に脈打つ「思いやりの文化」なのではないか…と、しみじみ思うのです。

江戸川区長

多田正見

平成 23 年 9 月 1 日号

被災地の一刻も早い復興を願ひ、宮城県気仙沼市へ職員を派遣し始めてから4か月余が経ちました。この間、派遣した職員は実人数で272人、日数を乗じた延べ人数では3320人を数えます。現在は、仮設住宅への入居手続きや避難所運営などの支援を行っています。

職員が現地に着ている江戸川区の防災服は、気仙沼市民の皆さんにすっかりお馴染み（なじ）みだそうです。現地から戻った職員の話によると、多くの市民から感謝や労（ね

ぎら）いの言葉をいただき、仕事の励みになっていようです。しかし、支援が必要とされる業務は膨大です。職員派遣もまだまだ続けていかな



ければなりません。

先日、私の手元に、気仙沼市の皆さんから一通の手紙と色紙が届きました。手紙には住民代表の方の丁寧な感謝の

言葉が、そして色紙には多くの方々のお寄せ書きがありました。「たくさんのご支援、ありがとうございます」

「皆さんのおかげでたくさん
の勇気をいただきました」

「復興に向けて、少しずつ
ですが前進しています」

この色紙に込められた気仙沼市民の深い思い、そして復興に向けたその努力に、改めてしっかりと応えていかなければ…という気持ちになりました。

江戸川区長

多田正見

平成 23 年 10 月 1 日号

今年は稀（まれ）に見る災害年となりました。東日本大震災、台風12号による紀州熊野川の氾濫や十津川村の豪雨災害、そして台風15号は、関東地方や大震災被災地にも大きな爪痕（つめあと）を残しました。

自然災害は、地震や津波、台風による高潮や洪水、地滑りなど様々です。加えて今年は、原発事故まで発生しました。放射能汚染はもとより、それに伴う風評被害、電力危機など、国際的にも大きな波紋を投げ掛け、未（いま）だ

世界中が揺れ動いています。民主党政権が発足して2年が経（た）ちました。この間、ハッ場（やんば）ダム建設中止や事業仕分けによるスー



パー堤防廃止判定などが突然持ち上がり、低地帯に暮らす私たちは強い衝撃を受けました。国交省はこの問題を、それぞれ専門家による検討会に

委ね、このほどその結論が出されました。当然のことながら、ハッ場ダムは「続行」、スーパー堤防は「都市部の低地帯で必要」との判断が示されたところです。政府が一刻も早くこれを再開すべく決断することを、切望せずにはいられません。

自然災害への100%の防備はありません。しかし、出comingる限り被害の減殺を考え、今できることに地道に取り組んでいくことが、いつの時代でも我々の最優先の責務であると思います。

江戸川区長 **多田正見**

平成 23 年 11 月 1 日号

昨年に続き、先日、天皇陛下に本区への行幸を賜りました。今回は、先進技術を誇る企業のご視察でした。

区内には、中小とはいえ優れた技術を持った企業が数多くあります。陛下が視察されたのは、創業60年の歴史を誇る松江5丁目の㈱不二製作所。同社は、機械の部品を加工する「サンドブラスト装置」のトップメーカーで、これまでに経済産業省の「元気なモノ作り中小企業300社」や東京都産業振興功労など、数々の賞を受賞しています。

1時間半のご滞在でしたが、陛下は製造工程に興味深くご覧になり、熱心に質問されていました。ご案内役の間瀬社長は、至って平常心で分かり



易（やす）く説明され、終始和やかな雰囲気でした。また、同席していた社員との懇談では、8名の方が自身の仕事を説明したのですが、皆さんい

ささかも緊張した面持ちを見せることなく、その姿は感動的でした。

陛下のご視察とあらば、会社にとって最高の栄誉であり、幾多の受賞よりも価値あるものでしょう。私は卓越した社長の経営手腕はもとより、社員の皆さんのこの堂々たる応対に、不二製作所の真骨頂を見た思いがしました。この厳しい時代、本当に頼もしい企業であることを囁（か）み締めることができたひとときでした。

江戸川区長

多田正見

終戦から66年。戦時下の学童疎開がご縁で山形県鶴岡市と江戸川区が友好都市盟約を結んでから30年が経ちました。戦局が厳しさを増した昭和19年、本区から約4400人の学童が一年余にわたり鶴岡市にお世話になりました。盟約締結の時に中里前区長が贈った「其恵不忘（そのめぐみわすれず）」は、まさに鶴岡市の皆さんに対する江戸川区民の真実の思いでした。

疎開を受け入れてくださった、湯田川温泉たみや旅館の故今野民弥氏の手記をご紹介します。

「この日村中の婦人会、国民学校児童等出迎えのため村端れまで出た。（中略）初等三年と言えば家庭に居ればま



戦争なればこそこんな可愛盛りの子供をよくも手離して、百里隔たる此処あたりまで送ったもんだ。自分にも三年生が、私の家の子も三年生だ。並々ならばとうてい離せないし、又子供も離れはしまい。等ささやきあい出迎えの一同は潜然と泣いた」（「疎開の記録」より）

物資の乏しい時代、我が子以上に慈しんでくださった鶴岡市の方々の心を、私たちは永遠に忘れることはありません。

江戸川区長
多田正見

平成 24 年 2 月 1 日号

毎年、総合文化センターでの成人式の後、区内障害者施設で「成人を祝う会」が行われます。先日、ある施設で新人のお母さんが、多くの利用者や保護者の前で、挨拶をされました。

「淳平は、出生直後は全く異常がなく、本当にすくすくと成長しておりましたが、3歳の誕生日の前日に、重症乳児ミオクロニーという、私も初めて聞く病名を告知されました」。

そのときに受けたお母さんの衝撃は、如何（いか）ばかりだったことでしょう。その後は、40度の高熱や毎日100回を超える痙攣（けいれん）が続き、入退院を繰り返す日々。どのように育てたらいい



のか、お母さんは途方に暮れたそうです。そしてこの日、無事、成人式を迎えることができ、親子で夢のようだと感じているとのこと…。

「今、20年間を振り返ると、淳平の周りには神様がくださった小さな奇跡がいっぱいあって、たくさんの愛に支えられて今日まで命をつなげて来られたのだと、心から皆様に感謝したい気持ちでいっぱいです」。

お母さんは重い障害と向き合う日々の中で、嘆きや苦しみ、そして喜びや幸せを、どれほど深く重く味わってきたことでしょう。我が子との一心同体の命と絆、母の大いなる愛が、私たちの胸に強く響きました。

江戸川区長

多田正見

平成 24 年 3 月 10 日号

「降る雪や明治は遠くなり
にけり」。昭和 6 年、当時大
学生だった俳人の中村草田男
が、雪の日に母校の小学校を
訪ねて詠んだ歌です。

今年百歳を迎える方は、明
治 45 年、つまり「明治」最後
の年の生まれです。現在、区
内には百歳以上の方が約 13
0 人いらっしゃいます。私は
百歳を迎えた方を訪問してお
祝いの気持ちを伝えるのです
が、最近は元気はつらつの方
がとて多くなりました。僅
かな時間ながら話を伺ってい
ると、百年という歳月の移り

変わり、そしてその方の人生
の重みをしみじみ感じます。
先日、百歳を迎えた女性が
話してくださいました。

「私は亀戸で生まれ、大正



6 年、6 歳のときに、下町を
襲った台風による高潮を経験
したのよ。その 6 年後に関東
大震災。それから二十数年後、
やっと復興しかけたところに

東京大空襲、亀戸は火の海だ
ったわね。そしてその 2 年後
にはカスリーン台風、更に 2
年後にキティ台風、何年か後
には狩野川台風にも見舞われ
たわ。よくこれだけの災害を
体験して…とつくづく思うわ
ね。特に、戦後の暮らしは大
変だったねえ。でも、東京は
今、立派に立ち直って…、人
間とは大したものですよ。あ
なたも若いのだから、頑張っ
て」と。

胸にこたえる話でした。

江戸川区長

多田正見

厳しい寒さの冬も終わり、今や春爛漫（らんまん）です。今年は桜の開花も例年より遅く、まだしばらく楽しめます。

我が国がワシントンD.C.ポトマック河畔に贈った桜は、今年で寄贈から100周年を迎えました。この間、病虫害の発生による焼却処分や日米開戦による伐採の危機など悲喜交々（こもごも）の歴史がありました。今では日米友好の証（あかし）として多くの人々に親しまれています。本区でも、行船公園にはゴスフォード市から寄贈された

シダレザクラや鶴岡市のソメイヨシノが、また、新川のほとりには、韓国ソウル市から贈られたソメイヨシノなどが植えられ、友好親善の役を



担っています。咲き誇る記念樹を眺めていると、それぞれの地と深めてきた交流の思いがふと呼び覚まされるのです。桜は、日本人の「心の花」と言われますが、今や世界中

の人々がこの花を愛（め）で、この花に魅せられています。艶（あで）やかに咲き誇り、やがては花吹雪となつて風に舞い、散っていく桜。その美しさと潔さが、数多（あまた）の人々の心を惹（ひ）き付け、互いをつなぐ力となるのでしょう。

「春風の花を散らすと見る夢はさめても胸のさわぐなりけり」。平安時代の歌人、西行法師の歌です。千年の時を経ても変わらぬ、桜に寄せる日本人の心です。

江戸川区長

多田正見

平成 24 年 5 月 1 日号

かつて旧中川は、地面よりも水面が高い天井川でした。背伸びをして護岸越しに川を眺めると、よどんだ川面に数多くのいかだが浮かんていました。その当時、いざ台風が来れば水があふれ、丸太が民家を襲うのではないかというのが、地域の皆さんの心配事でした。

そこで東京都は、40年前、旧中川をはじめ、江東低地帯の河川の水位を下げる事業に着手したのです。旧中川は隅田川から水を入れ、最北部の木下川排水機場から荒川に放

出するという人工的な流れをつくりました。毎年8月、この川で灯籠（とうろう）流しが行われますが、灯籠が川下から川上に向けて流れていく



という光景が見られ、来場者を不思議がらせます。そのからくりは、こうした仕組みによるもので、江東デルタ地帯の安全を守る要（かな

め）ともなっているのです。

そしてこのほど、水位低下と併せて取り組んできた親水化事業も完成し、旧中川は名実共に、安全性と快適性を兼ね備えた親水河川として生まれ変わりました。長い歳月を経たこの事業の完成は、多くの関係者の知恵と並々ならぬ努力の結実と言えるでしょう。

川辺を散策すれば、間もなく開業する東京スカイツリーが、至る所から顔を覗（のぞ）かせ、つい、カメラに収めた気持ちにさせられます。

江戸川区長

多田正見

平成 24 年 6 月 1 日号

「大阿蘇の千里が原のはな
ち馬 雲にいななく夏は來
(き) にけり」。北原白秋らと
「パンの会」を結成し、明治
から昭和にかけて活躍した歌
人、吉井勇の作品です。この
季節になると、大自然を謳(う
た) い上げたこの一首が思い
出されます。

小岩の川辺に立つと、大河
江戸川の上に広がる初夏の空
にその思いが重なり、大いな
る自然の恵みを感じます。河
川敷の小岩菖蒲園では、まも
なく薄紫や白色の菖蒲が咲き
揃(そろ) い、花を愛(め)
でる人々で賑(にぎ) わいま

す。その花にも、人々は明る
い初夏の趣を満喫すること
でしょう。

小岩菖蒲園から少し上流の
地に、北原白秋が住んでいた



ことを知る人は、今では少な
いかもしれません。大正5年
から一年ほど、白秋は自ら名
付けた「紫烟草舎」の寓居(ぐ
うきよ)で過ごしました。当
時、白秋の名声は揺るぎない

ものでしたが、暮らしは赤貧
に耐える日々。小岩田と呼ば
れた辺りの子どもたちや農家
の人々との温かい交流の様子
が、「葛飾小品」という作品
に余すところなく記されてい
ます。白秋もまた、この伸び
やかな自然に魅せられていた
に違いありません。

北小岩、八幡神社の境内に
建つ白秋の歌碑、「いつしか
に夏のあはれとなりにつけり乾
草(ほしくさ) 小屋の桃いろ
の月」。

江戸川区長

多田正見

平成 24 年 7 月 10 日号

過日、小学校の校庭でサッカーの指導をしていた方が、突然、心臓発作で倒れました。その時、現場に居合わせた他の指導者4人が、それぞれ人工呼吸や心臓マッサージ、AEDによる救命活動、そして救急車の要請など機敏に連携し、貴重な一命を取り留めたのです。

このような場面に遭遇したとき、人は戸惑いが先に立ち、冷静さを失ってしまいがちです。でも、皆さんは機転を利かせて落ち着いて行動しました。倒れた方は、丸一日間、

昏睡（こんすい）状態が続きましたが、現在は元気に活躍されています。この4人がいなければ、そして現場にいた多くの方々の協力がなければ



自分の命は失われていたと、しみじみ述懐されていました。区には、心温まる行為や勇気ある行動を表彰する善行者表彰があります。今回、この

4名の方々を表彰させていたできました。

善行にもいろいろあります。身の危険を顧みない人命救助はもちろんですが、人知れず地道な活動を続け、人々の鑑（かがみ）となる方も居られます。しかし、その根底に共通して流れているのは、勇気、そして人間愛ではないでしょうか。人の道に欠かすことのできないものを示してくださった方々に、心から敬意を表し、我が身の道標（みちしるべ）としたい思いです。

江戸川区長

多田正見

平成 24 年 8 月 1 日号

物理学者であり随筆家の寺田寅彦氏が残した「天災は忘れられたる頃来（きた）る」という名言。今、私たちは忘れるどころか、災害を痛いほど肌で感じています。

間もなく台風シーズンが到来します。ここ数年、地球温暖化の影響もあり、台風は巨大化し、日本近海で急速に発達するケースが増えていると言われます。日本列島は台風の進路にあたることから、これまで幾多の甚大な被害を受けてきました。海からの高潮はもちろんのこと、山間部に

降らす大量の雨が平野部で洪水を引き起こすことも稀（まれ）ではありません。低地帯である本区も、かつては度重なる水害に襲われました。カ



スリーン台風やキティ台風の惨状を、生々しく思い出す方もおられるでしょう。

加えて、首都東京では直下地震の発生が確実視されている

ます。地震により堤防が損壊しているところに台風が襲来すれば、まちが壊滅的状况となることは火を見るより明らかです。そうした複合災害という最悪の事態を見据えた対策も、今後は必要なのです。

日頃、海や川の恩恵に与（あずか）る我々ですが、一方で低地帯であるがゆえに、地震、台風、高潮、洪水といった様々な事態が起こり得ることを、肝に銘じておかなければなりません。

江戸川区長

多田正見

平成 24 年 9 月 1 日号

ロンドン五輪のメダリストを一目見ようと、銀座界隈（かいわい）に50万の人々が集まりました。「まるで満員電車に乗っているようでした」「遥（はる）か彼方（かなた）に選手の背中がちらっと見えただけです、幸せです」といった感想が聞かれました。

メダリストがそれほどに人々の心を捉えたということでしょう。何万人とも知れぬアスリートの頂点に立ったのですから、しごく当然のことです。その活躍に、「勇気」「希望」「感動」といった言葉が

飛び交い、奥深いスポーツ文化というものをしみじみと感じました。

話は変わりますが、篠崎中2年の石田琴美さんは、先月、



日本の「そろばん使節団」の一員として訪米しました。都大会優勝の実績の持ち主です。早大生の兄、成章さんも、中学2年のとき、同じ使節団員

として訪米しています。兄は暗算、妹は読み上げ算が得意とのこと。兄妹揃（そろ）ってこの道の第一人者。十数桁の数字を操るその能力とは、一体何なのでしょう。

「誰よりも3倍、4倍、5倍努力、勉強する者、それが天才だ」は、野口英世の言葉。彼（か）のイチロー選手は、「僕は天才ではありません。なぜかという、自分がどうしてヒットを打てるのかを説明できるからです」と…。

江戸川区長

多田正見

平成 24 年 10 月 1 日号

敬老の日を中心に、区内各所で「笑顔いっぱい長寿の集い」が催され、多くの元気な熟年者の皆さんにお目にかかることができました。生き生きとした姿や笑顔を見ていると、何か勇気をいただける気がします。

殊に昨今、女性の活躍は目覚ましく、何とも頼もしい限りです。我が国の平均寿命は女性86歳、男性79歳。また、区内で百歳を超える方は、いま132人ですが、うち120人が女性です。男性よ、しっかりして…と言いたいところ

です。

私も長寿の集いで、戦時中に歌われた「とんとんとんからりと隣組…」の歌詞をもじり、「とんとんとんからりと



江戸川区 仲間づくりはカルチャーで リズムで健康若返り 恋人探しも楽しいな♪』と披露し、会場を盛り上げることに一役買いました。

先日、ある施設の開所式の講演で、以前、区医師会会長を務められた小暮堅三先生が、長寿の秘訣（ひけつ）は「かきくけこ」の励行だと話されていました。「か」は感謝の心、「き」は何事にも興味を持つこと、「く」はいろいろな工夫すること、「け」はもちろん健康、そして「こ」は恋心で、これは絶対になくしてはいけない大事なものだと言われていました。熟年者の皆さん、どうかその気になって…。

江戸川区長 **多田正見**

「甘いわな はじめ天国
すぐ地獄」「少しだけ その
一言が 命取り」「薬物で
自分の人生 狂わすな!!」。
薬物乱用防止推進江戸川区地
区協議会が募集した、中学生
による標語の入賞作品です。
薬物の恐ろしさをよく理解し
た作品ばかりで、大変心強く
思います。

しかし、社会全体を見てみ
ると、意識の高い若者ばかり
ではありません。薬物への誘
惑は、至る所に転がっていま
す。「ダイエット効果がある」
という誤った知識や「気分が

ハイになり嫌なことが忘れら
れる」といった甘い言葉にそ
そのかされ、ふとした好奇心
から手を出してしまう若者が
多々見られます。



今や薬物は、インターネット
で簡単に売買される時代です。
また、繁華街にとどまらず、
閑静な住宅街にも売買の魔手
が忍び寄り、その手口も極め

て巧妙です。「うちの子に限っ
て!」という親の思いは、大
きな落とし穴になるのです。

一度だけ…、ちょっとだけ
…という安易な考えが心と体
をボロボロにし、人生を台無
しにすることを、子どもたち
にはきつく教えていかねばな
りません。協議会の皆さんと
力を合わせ、地域全体の目で
青少年を見守っていききたいも
のです。

今こそストップ! 薬物よ、
さらば!!

江戸川区長

多田正見

平成 24 年 12 月 1 日号

菊の季節が終わりました。この夏は暑さが続き、菊作りにも大変な苦労があったようですが、善養寺や総合文化センターで、見事な花を楽しむことができました。

区内には、菊作りの名人と言われる方が何人もいます。その一人、北篠崎の長島正さんが、驚くほどの立派な「大作り」を区役所正面玄関に飾ってくださいました。菊を咲かせるのは自然の為（な）せる業ですが、そこに人が丹精込めて手を加え、想像を超えた美しさを表現する。まさ

に菊作りは、自然と人の共作です。

ところで、阪神・金本選手の引退挨拶を聴きました。甲子園球場でスポットライトを



浴び10分間、野球人生への熱い思いを語りました。

最後に締めくくった言葉、「野球の神様、ありがとうございました」。後のインタ

ビューでは、「自分で思ってもいなかった大記録が出たり驚くようなプレーができたとき、いつも神様のおかげと思っていました」。

先日、タワーホール船堀で行われた産業ときめきフェア。知恵と努力で作り上げた信じ難いほどの技術の粋を、いくつも見せていただきました。時として、ものづくりに打ち込む技術者も、このような心境を味わうのではないのでしょうか。「天は自ら助くる者を助く」でしょうか。

江戸川区長

多田正見

平成 25 年 2 月 1 日号

寒い朝、子どもたちが白い息を吐きながら登校する姿は、春を待つ木々の芽の膨らみと重なり合い、見ていて明るい気分になります。

区民の平均年齢は42歳。長年「23区の中で最も若い」座を占めています。とは言え、高齢化は確実に進んでいます。65歳以上の方の割合を示す高齢化率は、5年前には16%台でしたが、現在は18%台に上がりました。人口で言えば、およそ2万人増えたことになります。

また、新年度予算案の編成

はほぼ終了しましたが、今回、福祉関係経費が初めて一般会計予算の50%を超え、1087億円になりました。平成11年の550億円から見れば倍



増です。医療、介護、生活保護費などの増加は、まさに高齢化が主な要因なのです。話は変わりますが、先日、ある女性の百歳のお祝いに伺

いました。ひとり暮らしで、とてもお元気な方です。家事万般はもとより、驚いたことに今なお御針（おはり）仕事が得意で、何着もの手縫いの半纏（はんてん）を郷里の被災地に贈ったということでした。私にもわざわざ一着、仕立ててくださり、感謝感激でした。

「針に糸を通すことなど造作ない」と言っておられました。このように元気なお年寄りも増え、改めて、健康長寿日本一の江戸川区を目指さなければ、と…。

江戸川区長 **多田正見**

平成 25 年 3 月 10 日号

三寒四温を繰り返しながら、春はそこまでやってきました。区内1万5千本の桜もあと半月もすれば咲き始め、春本番を飾ってくれることでしょう。いま、新川千本桜の造成を進めています。少し前に完成した小松川千本桜も年々成長し、最近では都内を代表する花処（はなどころ）となりました。

その桜にちなんだうれしい話題があります。このほど、国土交通省による「手づくり郷土（ふるさと）賞」に小松川千本桜を愛する会が選ばれ、

その受賞式が、3月31日の桜まつりの会場で行われることになりました。

この賞は地域の魅力や個性を演出する街並みと、その価



値を高める優れた地域活動に贈られる名誉ある表彰です。

小松川千本桜を愛する会は、まつりの開催はもとより桜を育てる施肥活動、美しい環境

を保つクリーン作戦など、日本一の桜名所づくりを目指して積極的な取り組みをしています。

実は本区の受賞は、これで12回目になります。水と緑に恵まれた江戸川区らしく、親水公園や親水緑道が中心ですが、こうした受賞は多くの区民の皆さんの、優れた環境づくりに向けた情熱、努力、そして心意気があってのことです。

世情はまだまだ厳しいですが、明るい春の光を待ちましよう。

江戸川区長

多田正見

平成 25 年 4 月 10 日号

プロスキーヤーや登山家として世界的に有名な三浦雄一郎氏が、何と80歳にして3度目のエベレスト登頂に挑戦することが報じられていました。氏は、70歳と75歳で登頂に成功し、人々を驚かせました。過酷とも言える目標に向かい、ここ数年、厳しいトレーニングを積んできたそうです。何が氏をそこまで奮い立たせるのか、想像もつきません。

ところで、区内でもすばらしい挑戦がありました。毎年、小松川平井地区と小岩北地区で行われる「小学校卒業記念

ナイトウォーク」です。地域の多くの方々が運営や警備にあたってくださり、続けられている催しです。

どちらも夜10時に地元の小



学校を出発。一方は皇居を一周する27kmコース、かたや江戸川沿いをなぎさ公園まで往復する26kmのコースで、明け方6時頃に戻ってきます。ポ

ランティアも合わせ、それぞれ総勢数百名という大集団が夜を徹して歩きます。これほどの距離を歩くのは、子どもたちにとって初めての体験でしょう。

「行きはよいよい、帰りは…」、帰りは足にマメを作りながらも、元気いっぱい笑顔で帰って来るそうです。

この体験は、子どもたちの人生にとって、この上ない大きな挑戦への第一歩となることでしょう。

江戸川区長

多田正見

平成 25 年 5 月 1 日号

若者きずな塾。昨年4月、若い人たちの就労支援の一環として区が始めた事業です。昨今、人とのコミュニケーションが苦手という若者もいます。そこからくる自信喪失によって就労につまずき、社会に出る勇気を失った若者に、自信を回復させ、自立を促すトレーニングを行う塾です。毎月2回開催されるこの塾は、全て自由参加。キャリアコンサルタントの塾長を中心に、多くの若者が自らの悩みを打ち明け、議論し、意見を聴き合うことで自信を取り戻

していこうというものです。先日、開塾1周年を記念したイベントが催されました。企画・運営は塾生たちです。これまでは、人前でうまく自



己表現できなかった若者が、自らの様々な思いを発表し合いました。

塾生が寄せたメッセージ。「きずな塾がなければ出会え

なかったタイプの人にたくさん出会えました」、「塾長や皆さんの言葉によって自分の可能性を信じることができました」、「内面的には大きな変化がありました。次は就業を目指し、更に自分を磨きたいと思います」。

自らの資質に悩み、苦しんでいる若者が、立派に立ち直っていく姿が見られます。この塾がより幅広く、若者に勇気を与えることができればと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 25 年 6 月 1 日号

この春、区内各地で地域まつりが盛んに行われました。折しも、季節の花々が咲き乱れ、眩（まぶ）しいばかりの新緑が芽吹く中、好天に恵まれた各会場は例年にも増して賑（にぎ）わい、区民の皆さんの幸せいっぱいの笑顔が見られました。

最近、「江戸川区は緑が多いですね」という声をよく聞きます。思えば、「ゆたかな心地にみどり」を合い言葉に緑化運動を始めてから40年余が経ちました。当時、区内の樹木数は120万本、区民

一人あたり2・6本でした。これを一人10本にまで増やそうと、区民の皆さんと共に努力を重ねたのです。年々人口も増えたため、目標の数には



届いていませんが、現在では一人あたり9・2本となり、区内の至る所でその豊かなボリュームを感じることができるようになりました。

先日、小岩駅前通り美観商店街の花壇コンクールが華やかに行われました。この催しも今年で39回を数え、商店街やボランティアの皆さんの力で素晴らしい風物詩となりました。花と緑を愛すること、地域を愛する気持ちが一層強まっていることがうかがえます。

「ゆたかな心地にみどり」まさにこの標語のとおり、長い歴史の中で、緑と共に人々の温かい心が大きく育ってきたと思うのです。

江戸川区長 **多田正見**

平成 25 年 7 月 1 日号

障害のあるお子さんを持つ親御さんにとって、人生最大の悩みは「親なき後」の問題です。これをテーマにした映画「くちづけ」を観（み）ました。竹中直人さん演じる父親の、娘に対するこの上ない慈しみとその悲しい結末は、涙なくしてはいられません。した。本区の障害者施策においても、何としても解決しなければならぬ重い課題であることは言うまでもありません。

受けながら寝食を共にするグループホームが、近年、数多くできてきました。

この春、鹿骨に開設された「虹の里」も、その一つです。



のです。上村さんは、本当に面倒見のいい、肝っ玉母さんと言えるようなお人柄で、思い立ったらとことんやり遂げる行動力の持ち主です。

上村さんのお誘いで、先日「虹の里」を見せていただきましたが、大変住み心地の良さそうな家でした。「この方の一念によってこの施設もできたのだなあ」と、安堵（あんど）を感じました。

でもこの問題は、まだまだこれからです。

江戸川区長

多田正見

平成 25 年 8 月 1 日号

盛夏を迎えました。今年は梅雨明けが平年より半月も早く、長い夏になりそうです。都心の水がめも赤信号。節水には十分留意していかなければなりません。

この季節、江戸川区ならではの初夏の催しがまちを彩りました。松江東善寺や小岩の朝顔市、行船公園で行われた金魚まつりなど、いずれも例年にも増して多くの人で賑（にぎ）わいました。

金魚といえば、江戸川区は金魚の三大産地の一つとして全国に名を馳（は）せていま

す。今、生産者はわずかに2軒ですが、その質の良さは折り紙付きで、価値ある地場産業を守り抜いていこうという強い思いと努力を感じます。



時を同じくして始まった篠崎文化プラザの金魚の企画展示も大好評とのこと。やはり日本人は金魚が好きなんだなあ…と改めて思い知らされました。

8月いっぱい、各地で夏祭りや盆踊りが行われ、夏らしい活気に溢（あふ）れることでしょう。この盆踊りも本区は格別に盛んで、ほとんどの町会自治会で行われます。

その話を他区の方にする、皆さん一様に驚きを隠しません。人々のこうした営みが江戸川区らしい郷土愛を育て、心の絆を紡いでいくのです。そしてこの絆こそが、いざ災害というときに、何にも勝る防災力になるのだと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 25 年 9 月 1 日号

ある国語辞典によれば、「猛暑」「激暑」は激しい暑さ、「厳暑」「酷暑」は読んで字の如(ごと)く厳しい暑さ、酷(ひど)い暑さ、「炎暑」は焼け付くような暑さ、そして「極暑」はこれ以上考えられないような暑さとされています。

そんな暑さの中、甲子園では高校球児の熱闘が繰り広げられました。本区でも、「僕たちの甲子園」との思いで、リトルリーグ、ポニーベースボール、少年軟式野球、女子軟式野球などの全国大会が開催され、元気いっぱい、頂点を目指す選手たちで賑(にぎ)わいました。全国の少年や若

者が、江戸川の地を思い描いて練習に励んでくれていると思うと、心の底から応援したくなるのです。

さて、この夏も各地で盆踊りが盛んに行われました。暑



さも何のその、人々の元気を感しました。このご時世、近隣の理解が得られず、なかなか実施できないところも多いと聞きます。本区では、お互い理解し合って何のトラブル

もなく…、実に素晴らしいことだと思います。

そして、夏の極め付きは、やはり花火大会でしょう。今年の花火の美しさは格別でした。夜空に咲く大輪の競演に、しばし時を忘れました。

記録的な暑さ続きのこの夏も、はや終わろうとしています。ツクツクボウシの声にゆく夏を惜しみながら、宿題に勤(いそ)しむ子どもたちも多かったことでしょう。間もなく、長寿を祝う集い、区民まつりへと時は移ります。実り多き秋を迎えましょう。

江戸川区長

多田正見

平成 25 年 10 月 1 日号

2020 オリンピック・パラリンピックの招致が決定しました。7 年後、世紀の国際スポーツイベントが東京で開催されます。青少年に夢と希望を与え、我が国の活力を大いに高める機会となることでしょう。被災地の復興にも、一層の拍車がかかれば何よりです。

さて、いよいよ東京国体が開催しました。東京都での開催は 54 年振りで、本区では開会式に先立ち、荒川を舞台にボート競技が行われました。全国から集まった約 900 人

の選手や関係者の方々、観客など、会場は連日、数千の人々で賑わいました。都代表として出場した本区在住の石鍋幸太郎選手は決勝まで勝ち進み



ましたが、台風接近により決勝は中止。決勝出場予定の 4 チームが全て優勝という結果になりました。

選手に気持ちよくレースに

臨んでもらえるよう、会場では地元町会やボランティアが「おもてなし隊」を結成。会場案内をはじめ、豚汁や飲み物が振る舞われました。選手にも大好評で、連日仕入れを増やして対応してくださったそうです。

ほかにも区内では、少年男子のラグビー、そしてローラースポーツが開催されます。いずれの選手たちも、地域に満ち満ちた温かい歓迎の気持ちを、心から味わってくれることでしょう。

江戸川区長

多田正見

新聞でも紹介されていましたが、東京都が先日発表した昨年合計特殊出生率によると、本区が23区中第1位で1・40人でした。この数字は、一人の女性が一生のうちに産む子どもの数です。この数が2・07を超えないと人口が減少すると言われていたのですが、決して高くはありませんが、国が1・41、23区平均では1・12ですので、まずまずの数字と言えますでしょう。

東京都が公表を開始した平成5年以降、本区は20年連続で23区トップの座を維持して

います。他区の方に年間6千人の赤ちゃんが生まれると話しますと、いつも「えっ!?!」と驚かれます。

今から8年ほど前、朝日新



聞の社説に「江戸川区のふしぎ」と題して、なぜ江戸川区では子どもが多く生まれるのか…という記事が紹介されました。それは、都心へのアク

セスといった利便性、23区一を誇る公園面積、多くの水辺と緑豊かな自然といった環境が、子育てには何よりと…。

また、子どもは地域で育てるものという温かい思いが根付いています。保育ママ、すぐすくスクール、中学生の職場体験など、皆さんの応援なくしては成し得ない取り組みです。

子どもは宝。地域の子育て力と教育力は、本区のかげがえのない財産です。

江戸川区長

多田正見

平成 25 年 12 月 1 日号

11月22日は「いい夫婦の日」。毎年多くの婚姻届が出されます。今年は喜ばしいこととに大安と重なり、昨年同日の2倍以上となる約200件の届出がありました。中には午前0時を待って出されたカップルもありましたし、この日は夜遅くまで窓口を訪れる方が後を絶ちませんでした。いついつまでも仲良く、幸せな家庭を築いていただきたいですね。

本区は人口も多く、年間で受理する婚姻届は7000件近くになります。平均年齢の

若さはトップクラス、出生率は長年第1位という特長が、こうした面からもうなずけます。

一方、離婚届は年間約2200件。案外多いな...と思う



のですが、近年、離婚は若い世代に限ったものではありません。むしろ40代、50代で増えている傾向があります。時代と共に世相も変わり、さま

ざまな事情が生じているのでしょう。

ところで、ある機関のアンケート調査で、興味深い結果が報告されています。「生まれ変わったとしたら、今のパートナーを選びますか」という問いに、「もちろん選ぶ」と回答した人は、30代以下では男女ともほぼ半数ですが、60代では男性の42%に対し、女性は16%ということですが、さて、あなたは？

江戸川区長
多田正見

平成 26 年 2 月 1 日号

本日2月1日、区の公衆浴場組合が「地域づくり総務大臣表彰」を受賞します。この賞は、地域をより良くしていくと頑張っている団体や自治体を表彰するもので、今回は全国17のうちの一つとして選ばれました。特定業種の皆さんが受賞するのは大変珍しいことです。

今、内風呂を備えているご家庭は98%を超えます。そうした中、経営の厳しさ乗り越えて、地域のためにいかに役立つべきかという強い思いが感じられます。

ご存じのように、本区の銭湯は健康長寿協力湯で熟年者の健康増進やコミュニティづくりに、一役も二役も買っただいただいています。



ほかにも、小・中学生のお背中流し隊、東京ニュー YORK（入浴）寄席、スタンプラリー、四季折々のイベント湯、ゆるキャラお湯の富士、そし

て地域の方々の見守りなどなど、そのユニークな活動は他の地域では到底まねのできない、羨望（せんぼう）の的になっています。

こうした活動は、組合の皆さんの知恵と結束力、そして何よりも区民の皆さんに喜んでもらいたいという情熱がなければできないことではありません。しみじみ誇らしく思います。

裸の付き合いで人々の絆を：という心意気は、まさに「地域づくりの金メダル」ですね！

江戸川区長

多田正見

平成 26 年 3 月 10 日号

先達（せんだつ）てお正月を迎えたばかりかと思えば、もう3月。水ぬるむ季節となりました。間もなく木々の芽が一斉に吹き始め、草花も春を待ちかねたかのように咲き出します。自然の営みは寸分狂うことなく、私たちに命の輝きを見せてくれます。3月は卒業式を迎える季節。それぞれの年代に応じ、自らの努力やその成果を振り返りながら、充実した喜びに浸っていることでしょう。

先日、83歳の女子高生球児のことが報じられていました。

この方は晩年、ご主人を亡くしてから、仏壇の前で手を合わせて過ごす日々。娘さんから「何か始めてみては？」と進言され、英語を勉強しよ



うと中学校夜間学級に入学しました。孫のような生徒たちと楽しく過ごし始めたのです。

その後、定時制高校に進学し、何と軟式野球部に入部し

ました。チームは昨年、県予選決勝戦まで進みました。惜しくも敗退しましたが、この間、選手たちを叱咤（しつた）激励し、時に優しく慰め、もはやチームの精神的支柱となっていたのです。

この3月、晴れて卒業式を迎えられました。ご本人曰（いわ）く、「最高の気分です！」。何と素晴らしいことでしょう。これからの高齢社会にあって、「生涯現役」の手本となるようなお話です。

江戸川区長

多田正見

平成 26 年 4 月 10 日号

例年より遅いと言われている今年の桜前線ですが、予想外の早さで満開となり、そろそろ見納めの頃となりました。先日、子どもたちの新たな旅立ちを祝うかのように、入学式を華やかに彩ってくれました。

また、小松川千本桜まつりは、雨天のため残念ながら中止となりましたが、今年初めて行われた新川さくらまつりは、新川さくら館を中心に、お花見和船の運航など、歴史ある新川ならではの催しとなりました。

先頃の調査によれば、区内には1万5千本余の桜が植えられています。この季節、皆さんも昼夜を問わず、思い思いに花見を楽しんだことで



しょう。「花より団子」という諺（ことわざ）もあります。が、やはり花を眺めるだけでは物足りず、その下で酒肴を交わし、お互いの心を通わせ

合うことが日本独特の楽しみ方なのだと思います。

江戸の花見の興りとして、その昔、上野寛永寺の開山、天海僧正が庶民のためにわざわざ奈良・吉野山から苗木を取り寄せて植えたという話が伝わっています。当時、楽しまの少なかった江戸庶民は大いに喜び、今日までその慣習が続いているということです。

桜の花は、人々の心をつなぎ、幸せの輪を広げてくれる、不思議な力を秘めているように思います。

江戸川区長

多田正見

平成 26 年 5 月 1 日号

今、わが国の平均寿命は、女性が86・41歳で世界一、男性は79・94歳で5番目です。これは、豊かな食生活、優れた医療、国民皆保険によるものと言われています。

ところで、平均寿命もさることながら、問題は健康寿命です。つまり、健康でいられる年齢を上げていかなければなりません。

本区では、早くからリズム運動、くすのきカルチャー教室など、熟年者の健康増進施策に取り組んできました。もちろんこればかりでなく、皆

さん自身がスポーツを楽しみ、さまざまな地域活動に打ち込むことで、健康な心身を勝ち得ているのだと思います。本区の区民一人当たりの医療費



や介護保険認定率が、長年にわたり23区で最も低いことも、そうした成果を物語るものでしょう。

ところで、先月初旬、カル

チャー教室開講式がありました。今年は33科目・79教室に2045名の方が受講、相変わらずの人気です。生徒さんの平均年齢は70歳。男性の最高齢は何と95歳で実践英会話に挑戦、女性は93歳で詩吟に取り組みます。まさに生涯学習のお手本とも言えるお話です。

この方々は、きつとそれぞれ、世界漫遊や晴れ舞台での喝采といった夢をお持ちなのでしょう。頑張っていただきたいですね。

江戸川区長

多田正見

熱中症の季節がやってきました。新聞によると、昨年、熱中症で救急搬送された人は全国で5万8729人。うち65歳以上の高齢者が47%を占めるそうです。汗をかく機能が衰えていること、そして細胞内の水分量が若い頃より減っており、脱水症状になりやすいとのこと。

ではどうすれば？ この時期、夏本番を前に早めに暑さに体を慣らすことがオススメです。血液や汗の量が増え、体温を調節する機能が改善されるらしく、そのため

には毎日30分程度のウォーキングや軽いジョギングが最適とのこと。

先日、知り合いのお医者さんとも言っていました。歳（と



し）と共に血管は硬くなりませんが、それを防ぐためには何といったも運動、つまり生活習慣病の予防が大切です。「やはりウォーキングが一番。区

長、歩きたくなるような魅力的な道をつくるのが、区民の健康の秘訣（ひけつ）ですよ！」と…。

そういえば昨今、区内を歩くと花や緑が美しく、親水公園や緑道などウォーキングに適した道がずいぶん整っているなあ…と改めて思います。皆さんと共に築き上げてきた緑豊かな江戸川区、実は健康への道づくりでもあったのです。まさに、転ばぬ先の「杖（つえ）」ならぬ、「ウォーキング」ですね。

江戸川区長
多田正見

平成 26 年 7 月 10 日号

7月に入り、本格的な夏を迎えました。夏と言えば、この季節ならではの風物詩が、日本人の暮らしにはたくさん息づいています。

例えば自然に目を向けてみれば、夕立や雷、入道雲。行事では縁日や盆踊り。夏の夜の思い出に欠かせない花火。そして胡瓜（きゅうり）や茄子（なす）、西瓜（すいか）などの食材は、まさに夏の味覚です。

伝統文化が数多く残る本区にも、江戸川区ならではの言える夏の風物詩がたくさんあります。篠原儀治さん・裕さ

ん親子が作る江戸風鈴、深野晃正さんのつりしのぶ、松井宏さんの江戸扇子、堀口英明さんの金魚の養殖、これらはいずれも全国に誇れる江戸川



ブランドと言えましょう。この道一筋、何十年もかけて作り上げた名品ばかりです。

また、花卉（かき）栽培の盛んな本区では、この時期、色鮮やかな朝顔が町を彩りま

す。松江東善寺や小岩駅南口で行われる朝顔市は、多くの人で賑わいます。そして、金魚の三大産地として名の知れた江戸川区ならではの催し、金魚まつりは子どもたちからマニアの皆さんまで、大人気のイベントです。

これら夏の風物詩は、古くは江戸の庶民が暑い夏に涼を呼ぶ、暮らしの中の知恵だったのでしょうか。時を越えて伝わる匠（たくみ）の技に、衣服の清涼感を感じます。

江戸川区長

多田正見

平成 26 年 8 月 1 日号

世界各国の球児が集う、第32回少年軟式野球世界大会が、今年も江戸川区球場を舞台に開催されました。オーストラリア、中国、ブラジルなど、7カ国・1地域、250名の選手・関係者で賑わいました。大会会長として主催してくださっているのは、広島東洋カープ元監督の古葉竹識（たけし）さんです。野球を通して広い視野で子ども達を健全に育てたいという熱い思いから続けられている大会です。心から敬服いたします。古葉さんをご存じの方は多

いと思いますが、古葉さんの広島入団、そして監督就任は、いずれも長嶋茂雄さんの巨人入団、監督就任と同じ年です。赤ヘル軍団を率い、前年の最



下位から球団創設以来初のリーグ優勝を達成。その後、3度の日本一に輝きました。就任1年目のシーズン終了後、最下位に沈んだ長嶋監督との

対談があり、「順位を度外視して熱く野球を語る長嶋さんの人柄に心を打たれた」と、私に話してくださいました。

「耐えて勝つ」が古葉さんの信条です。この大会に参加した少年たちも、これからさまざまな試練を乗り越えて成長していくことでしょう。きっと古葉さんのような選手、そして指導者が生まれてくれるに違いありません。

江戸川区長

多田正見

平成 26 年 9 月 1 日号

先日、江戸川区保護司会の皆さんを中心に、関連団体が主催する、社会を明るくする運動「第24回区民の集い」が開かれました。当日は酷暑にもかかわらず、タワーホール船堀の大ホールは満杯の盛況でした。

この活動の一環として、中学生による標語コンクールが行われ、優秀作品の表彰がありました。なんと、一万点を超えるほどの応募があったということです。

■見るべきは スマホじゃなく
相手の目(三代風花)
■もどれるよ みんなまって

る 君のこと(稲場梓)
■見てるだけ そんなあなた
も いじめだよ(鈴木七海)
■伝えよう 感謝の言葉 自
分の声で(酒徳真由)



■自分から 仲間気につけ
声をかけ(初芝優希)
■「やめようよ」その一言が
友救う(高橋香帆)
■思いやり 人が心を ひら

く鍵(中田健太郎)
■出会ったら 笑顔の挨拶
わたしから(天川美音)
■声かけ合い 広がる笑顔
地域の輪(水内良優)
■ごめんなさい 言える強さ
を大切に!(清水美穂)
■だめなこと だめだといえ
る それが友(安藤桃夏)
■ここから 言えるといい
ね ありがとう(小峯真柚)
■気づいても 見て見ぬふり
は 同じ罪(中村祐貴子)
中学生の深い思いに、明る
い未来を感じました。
(敬称略)

江戸川区長

多田正見

平成 26 年 10 月 1 日号

今年も敬老の日を前に、国が高齢世代の人口を発表しました。それによると、我が国の百歳以上の方々は5万8820人ということです。前回の東京オリンピックが開かれた50年前には191人、1000人を超えたのが昭和56年、そして1万人を超えたのは平成10年です。これなどは、ついこの前…という気がします。が、ここへ来てにわかに長寿大国になりました。元気な老年寄りが増えているというのは、まことに喜ばしいことです。

現在、日本人の最高齢は女

性が116歳、男性が111歳で、お二方とも長寿世界一だそうです。また、区内を見ても、最高齢は108歳の女性です。百歳以上の方は



141人いらっしゃいますが、このうち男性はわずか13人、これは一体どうしたことでしょう。

敬老の日を含めた3連休、

区内32施設で「笑顔いっぱい長寿の集い」が行われました。参加された方々は実に2万5000人です。皆さん元気いっぱい、私も「長寿を祝う」と言うにはまだまだお若いです。すね」と申し上げたところで。

漫談家のケーシー高峰さんが、「長寿の秘訣（ひけつ）は、死なないこと」と言っていました。面白いですね。何をおいても健康長寿、明るく元気に頑張りたいですね。

江戸川区長

多田正見

平成 26 年 11 月 1 日号

秋も深まり、其処此処（そこそこ）で菊祭りが開かれています。総合文化センターや善養寺では、咲き誇る大輪が実に見事です。

「菊作り 菊見るときは陰の人」、吉川英治氏の有名な一句です。同氏が菊人形展を訪れた際、菊作りの老職人に贈った句とされています。著名な作家が自分の作品をどう言ってくれるかと思い、物陰に隠れて見ていると、吉川氏は「見事な出来栄えだ」と感嘆し、それを聞いた作者が涙を流したということです。この句は結婚式のスピーチ

で度々引用されます。立派に成長した新郎新婦を大輪の菊に例え、会場の末席から見ているご両親のご苦労があればこそ…ということです。それ



ほどまでに菊作りは難しい作業を伴います。愛情がなければ美しい花を咲かせることはできません。

ところで先日、上小岩小学

校で33回目を迎える菊祭りが行われました。同校では毎年、全校児童が菊作りに挑戦しています。難しい作品を見事に仕上げられるのは、地域の菊名人、松原昇次さんをはじめ、ボランティアや保護者の皆さんのお力添えによるものです。実に素晴らしい教育活動だと思います。

松原さんは菊祭りの挨拶（あいさつ）で、こう結びました。「中学生になったら菊作りはもう卒業ですね。今度は自分の夢に向かって、大きな花を咲かせてください」と…。

江戸川区長

多田正見

平成 26 年 12 月 1 日号

竹宇治（旧姓田中）聰子さんは、1960年ローマ五輪に出場し、100メートル背泳ぎで銅メダルを獲得。4年後の東京五輪では4位入賞を果たしました。五輪だけではありません。数々の大会で世界記録を更新すること13回。当時、水泳界の女王として、「世界のサトコ」と謳（うた）われました。

その竹宇治さんが、本区の水泳教室の指導に携わってくださってから30年になります。今でも週4日、スポーツセンター、総合体育館、小岩アー

バンブラザで「サトコ水泳教室」を続けてくださっています。一方で、ぜん息児のための水泳教室にも取り組まれ、こちらも25年が経ちます。これ



まで延べ1600回開催、11万人を超える子どもたちが、水泳を通して健康を取り戻しています。

また、ご自身が関わるマス

ターズ水泳大会では、これまでに世界記録を35回も更新し、今なお4種目の記録を保持しています。まさに元氣ハツラツのサトコ先生です。

いつも笑顔を絶やさない、人に勇気を与えてくださるお人柄。「一度きりの人生、『明るく、楽しく』をモットーにチャレンジしていきたい」とのことです。前回の東京五輪から50周年。この間の大いなるご活躍を、心から讃（たた）えたいと思います。

江戸川区長
多田正見

平成 27 年 2 月 1 日号

ある障害者施設での成人式、比較的重い障害のある新成人のお母さんが、こう話しました。「今日は大勢の方に祝福していただきうれしいです。私はこの子が生まれた時からずっと、この子のおかげで幸せでした。生まれた時も幸せだったし、1歳の誕生日の時も、幼稚園に入る時も、小学校に入る時も、中学校に入る時も幸せでした。高校もそうだったし、二十歳の誕生日、そして今日も私はものすごく幸せです。これからこの子は、私にいろいろな幸せを

持つてきてくれると思います。その日まで、私は頑張ります」。母親ならではの言葉です。ところで、今年の成人式は、寒風こそ吹きましたが、青空



が広がり良い天気恵まれました。区内では、昨年より360人ほど多い7118名の方々が新成人を迎えました。女性には振り袖、男性はダーク

スーツか羽織袴（はかま）の装いで、総合文化センター周辺は朝から夕刻まで大変な賑（にぎ）わいでした。式典は肅然そのもの。昨今、一部の成人式でのトラブルが報道されますが、本区の新成人は実に立派です。

ご家族をはじめ多くの方々に祝福され、大きな幸せを噛（か）みしめたことでしょう。これからは、大人としての自覚と責任を持って歩んでください。おめでとう！

江戸川区長
多田正見

東京江戸川ライオンズクラブの創立は昭和38年。その2年後から始まった同クラブ主催の「善行少年少女表彰式」が、今年で50回を迎えました。今では後続の区内5クラブも協賛し、毎年盛大に行われています。半世紀にわたり、他に例を見ない素晴らしい取り組みを続けて来られた区内ライオンズクラブの皆さんに、心から敬意を表します。

今年の受賞者は146名。青少年活動や環境美化、事故防止、防犯・防火など、さまざまな分野で活躍している子

どもたちばかりです。その純真な笑顔を見てみると、こちらまで明るい気持ちに満たされます。

善行の根底には、人を思い



やり、地域のために何かをしたいという気持ちが欠かせません。しかも、思うだけでなく、行動として示してこそ善行となります。そして、実行

するには勇気がいります。努力も必要です。それを成し遂げた子どもたちにも心から拍手を贈りたいと思います。

最近「おもてなし」という言葉がよく聞かれます。おもてなしとは心であり、見返りを求めることなく相手を思いやる気持ちにほかなりません。昨今、ややもすれば自分本位になりがちな社会ですが、こうした青少年がたくさんいてくれることに頼もしさを覚えます。

江戸川区長

多田正見

季節の移ろいは早いもので、例年より3日早く開花した東京の桜はあっという間に満開となり、桜前線は北へと去っていきました。区内1万5千本の桜も艶（あで）やかに咲き誇り、人々に春の彩りを満喫させてくれました。ちょうどこの時期は、卒業式や入学式、送別会など出会いと別れの季節です。人生の節目と重なり、人それぞれに深い思いを味わったことでしょう。

桜ではなく、梅の観賞が一般的だったようで、平安朝の時代になると次第に桜に取って代わり、貴族の間で一気に花見の習慣が定着しました。



山から苗木を取り寄せて植えたものです。その後、幕府は隅田川堤や飛鳥山などに桜を植え、庶民に行楽を勧めたそうです。

この3月、新川千本桜の工事が終わり、区内にまた一つ桜の名所が誕生しました。小松川千本桜と共に東京を代表する花処（どころ）として、都民のみならず全国の注目を集めることでしょう。区民の皆さんの心意気が花開いた、桜のまちづくりです。

江戸川区長

多田正見

平成 27 年 6 月 1 日号

江戸川区俳句連盟春の句会
でご披露のあった、小学生の
俳句です。「一年生のきょうし
つさよなら新がつき」(一年
生)、「桃の花飛んで行ったら
君がいた」(2年生)、「空に
うくおせんべいかな春の月」
(4年生)、上手(うま)い!
文化・スポーツ活動など、
その道の先生の下で、また、
すすすすスクールなどでさま
ざまな活動に取り組む機会が
多くなっています。お茶・お
花・書道・ダンスなど…、将
来に役立つ資質を身に付ける
ことでしょう。

このところ、区内の子ども

たちが挑戦した幾つかの事例
を挙げてみましょう。シヨパ
ン国際ピアノコンクール・イ
ン・アジア中学生部門で、当
時瑞江三中の翁(おきな)康



介(こうすけ)さんが金賞、
全国中学生人権作文コンテス
トで清新一中の小矢野(こや
の)玄佳(ひろか)さんが都
特別優秀賞、江戸川区少年少

女合唱団が「花とライオン児
童合唱音楽賞」を受賞、ほか
にもいろいろ。

スポーツの分野では、先日
開催された水泳ジャパンオー
プンで小岩四中の池江(いけ
え)璃花子(りかこ)さんが、
50m バタフライを中学新記
録で優勝。明治大学の小日向
(こひなた)一輝(かずき)
さんは200m 平泳ぎで優勝
しました。この二人はリオ五
輪出場が期待されます。

ほかにも、東京五輪に向け、
体操や女子サッカーなど有望
選手がたくさんいます。明る
い未来を感じます。

江戸川区長

多田正見

去る6月30日、本区が「美(うま)し国づくり景観大賞」という栄誉ある賞を頂きました。

この賞は、国が進める「美しい国づくり政策大綱」を基に、さまざまな立場の学者や実務家が参画して結成されたNPO法人美し国づくり協会が、創立10周年を記念して始めた表彰制度です。その第1号の大賞として本区が選ばれたのです。

今回の受賞は、区民と行政が力を合わせ、数々の課題を乗り越えて今日を迎えた、その軌跡と成果に対する高い評

価です。この半世紀、急速に膨張する人口や都市化に伴う環境問題など、多くの課題が噴出しました。度重なる水害への対策、区画整理、下水道



整備、葛西沖や小松川防災拠点の開発、鉄道誘致、道路整備、幾多の親水事業等々…。中でも、その中心に据えたのが緑化運動です。「ゆたかな

心地にみどり」を合言葉に、今では緑・公園ともに23区随一を誇るまでになりました。

こうした歴史の中で、熱い郷土愛、強い連帯、そして協働の文化が育まれました。この標語は、単に緑を増やすということを超え、江戸川区住民文化の根底思想になったと言えるでしょう。

今、緑の多いこの季節と頂いた大賞を前に、区民の皆さんと喜びを分かち合いたい気持ちでいっぱいです。

江戸川区長

多田正見

平成 27 年 8 月 1 日号

甲子園といえば、全ての高校球児の夢舞台です。しかし、そこに立つのは容易なことではありません。

この夏、わが関東一高は東京大会で見事優勝し、甲子園出場を決めました。優勝までの道のりは、まさに破竹の勢い。準決勝では宿敵帝京高校に打ち勝ち、昨年の雪辱を果たしました。

今年はベスト4のうち2校が江戸川区という快挙。篠崎高校は、準決勝で敗れはしたものの都立の星として大健闘、あっぱれな活躍でした。

さて、甲子園ともなれば、これまた簡単に勝てるものではありません。全国四千校の頂点を決める大舞台、強豪相手に死闘が繰り広げられます。



関東一高には願わくは、まだ手にしたことのない深紅の大優勝旗を持ち帰ってほしいものです。

今回、両校の選手たちは、

想像を超えた厳しい練習と規律ある生活の中で、ゆるぎない強靱（きょうじん）な精神と卓越した技術、そして逞（たくま）しい体力を身に付けたことでしょう。報道によれば、神宮球場の気温は場所によって55・5度だったとのこと。プレーする側も見ると尋常ではありません。これに耐え抜く強さも必要です。浜風が吹くとはいえ、選手諸君には炎天下の甲子園で爽やかに輝いてほしいと思います。熱い応援をお願いします。

江戸川区長

多田正見

平成 27 年 9 月 1 日号

8月15日終戦記念日、旧中川で恒例の灯籠流しが行われました。東京大空襲により、この川で命を落とされた3千人の御霊（みたま）を慰めるこの催しも今年で17回目。終戦から70年ということもあり、例年よりはるかに多くの方々が参加してくださいました。それぞれの胸の内を、灯籠にしたためてくれたことと思います。

第二次世界大戦で亡くなった方々は全世界で数千万人。わが国では軍人230万人、民間人80万人、合わせて31

0万人が亡くなったと言われています。外地での戦闘はもとより、本土は200以上の都市が空襲を受け、ついには広島、長崎に人類史上最大の



悲劇がもたらされました。そして、死者数をはるかに超える負傷者や、全国12万人にもおよぶ身寄りを失った子どもたち…。そうした人々の戦後

を考えると、先の大戦が残した負の遺産は計り知れません。

文明は人々に多くの福音をもたらしてきましたが、一方で多くの不幸をも生み出しました。今、われわれが享受する平和な社会は、こうした悲劇の上に築かれてきたことを忘れてはなりません。そして改めて、「不戦の誓い」の5文字を何よりも重く受け止め、今一度、心に刻んでおかなければならないと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 27 年 10 月 1 日号

防災月間の 9 月、関東・東北地方が豪雨災害に見舞われました。堤防が決壊し、濁流が町や田畑を襲い、家が流されました。逃げ遅れた人の救助、避難所生活、復旧に取り組む人々の姿が、ニュース映像に克明に映し出されました。悲惨な災害現場を目の当たりにして、誰もがやりきれない思いにかられたことでしょう。本区にも多くの義援金が寄せられています。復旧に向けて、できる限りの応援をしたいと思います。

その数日後、埼玉県加須市

で行われた国交省主催の「治水の日」式典に出席してきました。昭和 22 年 9 月、関東地方を襲ったカスリーン台風で利根川は決壊し、関東一円は



甚大な被害を受けました。この未曾有の大災害を忘れないようにと、決壊地点で毎年慰霊と継承の式典が行われています。本区の被害は、浸水家

屋約 3 万戸、り災者約 13 万 3 千人。戦後間もない時期で救援や復旧もままならず、多くの区民や当時の役場、警察、消防などが懸命に立ち向かった様子が、江戸川区史に詳細に記されています。

区内には、この災害の体験者もおられます。われわれは過去の災害を忘れることなく、将来に向かって今できることを、可能な限り積み重ねていく努力を怠ってはなりません。

江戸川区長

多田正見

上小岩小学校は、校門のそばに大きな櫟（けやき）の木があることから、以前は「櫟の学校」と呼ばれていました。それがいつしか「菊の学校」と呼ばれるようになったのは、34年前、当時の山下孝子校長先生が開校50周年を記念して、児童全員に一人一鉢の菊作りを：と思い立ったのがきっかけです。校長先生は近所にお住まいの、自他共に日本一の菊作り名人をもって任ずる松原昇次さんに、指導を懇請しました。松原さんはその熱意にほだされ、始めることになったのです。

菊作りは易しいものではありません。初冬、落ち葉を集めての腐葉土作りから差し芽、

鉢上げ、水やり、消毒など、花が咲くまでには多くの労苦を伴います。松原さんはその一つひとつを丁寧な指導し、秋には全校児童の見事な大輪が咲き揃（そろ）うようになったのです。松原さんだけでな



く、保護者や地域ボランティアの方々が菊作りを支えました。こうした活動が高く評価され、昨年、文部科学大臣表彰が贈られました。

毎年10月下旬には、子どもたちはもちろん、地域の皆さ

んも総出で菊祭りが行われます。今年も晴天に恵まれ、34回目となる祭りが行われたのですが、寂しいことに菊祭りはこれが最後となりました。齡（よわい）九十を迎える松原さんが、これまでのように指導を続けることが難しくなったからです。

菊作りを通して、これまで子どもたちが学んだものは計り知れません。祭りのあいさつで松原さんは、「6年生の皆さん、菊作りはこれで終わりますが、これからは自分自身の人生に大輪を咲かせるよう努力してください」と、はなむけの言葉を贈りました。

江戸川区長

多田正見

江戸川区保護司会と関係団
体が主催する「社会を明るく
する運動」の一環として行わ
れた中学生標語コンクール。
およそ1万点という応募の中
から選ばれた優秀作品です。

- 話そうよ 文字ではなくて
君の声（田中里莉香・松江
四中1年）
- 間違いを 直せる勇氣 素
敵だね（橋本莉良・清新二
中1年）
- 書き込みと 心の傷は 消
えません（中島大弥・清新
一中2年）
- だれにでも 居場所はある
よ 一人じゃない（米山果
凜・上一色中1年）

■ 思いやり 社会へ踏み出す
第一歩（蟹江拓彌・松江五
中2年）

■ 信じるの？ 顔の見えない
その相手（齊藤奈津子・小
岩二中3年）



■ 見つけよう 自分と違う
友のよさ（佐藤由季子・小
岩三中2年）

■ ゆずり合い 一つの我慢で
二人の笑顔（福永萌・小岩
四中3年）

■ いじめから 仲間を守ろう
君の手で（遠藤瑠有・南葛
西二中1年）

■ 気がついて 言葉の暴力
心の傷（吉良風紗・東葛西
中1年）

■ やらないで 人にやられて
いやなこと（川村愛梨・瑞
江中3年）

■ 言う前に 考えてみて そ
の言葉（飯塚輝・小岩五中
2年）

■ 見逃すの？ 君の勇氣が
救いの手（川名ひかる・鹿
骨中3年）

中学生の意識の高さに感心
します。（敬称略）

江戸川区長 **多田正見**

平成 28 年 2 月 1 日号

世界に挑む 若人が 陸と
水とで 競い合い

日々の努力で 高めゆく
誇れる都市よ わがさとよ

ああ 江戸川は未来への
きらめく虹の 立つところ

東京オリンピック・パリリ
ンピックが4年後に近づいて
きました。江戸川区でもカ
ヌー・スラローム競技が行わ
れます。この気運を盛り上げ
るため、昨年度歌4番の歌詞
を募集したところ、実に87
8点という多くの作品が寄せ
られました。冒頭の歌詞は、
その中から選ばれた最優秀作

です。受賞者は葛西第二中学
校3年生の5人。力強い、希
望に満ちあふれた作品です。

ところで、皆さんお馴染(な
じ)みの本来の区歌は昭和40



年に制定されました。こちら
も全国公募で選ばれた歌詞で、
江戸川区で生まれ育ち、結婚
後、茨城県に移り住まわれた
岡久美子さんの作品です。既

に他界されていますが、ご存
命であれば90歳を迎えていま
す。

制定から50年がたちました
が、この歌詞もいつの時代にも
通用する素晴らしい内容で
す。それゆえ多くの区民に愛
され、今日までさまざまな場
面で歌い続けられてきました。
これほど区歌が歌われるまちは、
そうそうあるとは思われ
ません。先人は素晴らしいも
のを残してくださいました。

江戸川区長 **多田正見**

まもなく、春の選抜甲子園大会が開幕します。関東一高の活躍が期待されます。また、リオ五輪・パラリンピックも間近となり、スポーツの話題が至る所で賑（にぎ）やかになってきました。

昨年、長嶋茂雄さんのインタビュー番組を見ました。その際に書き残したメモを頼りに再現してみます。

「自分は落ち込むことはない。いつも〴〵勝つ〴〵勝つ〴〵勝つ〴〵これしかなかった。決して自信を失わない。打席に立てば4打数4安打4ホームラン、

それしか思い描いていなかった」。長嶋さんは、東京で試合がある日は深夜に帰宅後、ひたすら地下室で素振りをしたそうです。手にマメができ、そ



れが潰（つぶ）れて血がにじむ。日々その繰り返しだったということでした。

「私は、こうして努力する姿を人に見せたことはない。

良い結果だけを見せる。孤独ではあるが、見せれば自分に甘くなる。いつも部屋を真っ暗にしてバットを振る。ひたすら音だけに集中する。これが私のやり方だ」。バットが音を出すなどということは私には考えられません。只々（ただただ）すごいなあと…。

かのエジソンはこう言いました。「天才とは99%の発汗であり、残りの1%は靈感である」。まさに長嶋さんは天才です。若きアスリートに贈りたい言葉です。

江戸川区長

多田正見

平成 28 年 7 月 1 日号

このホットラインもしばらくご無沙汰していましたが、今号から再開いたします。

最近「食品ロス」という言葉をよく聞きます。まだ食べられる食品が捨てられてしまうことを意味しますが、これを何とかなくしていこうという運動が各地で起きています。

新聞のコラムで「30・10運動」という取り組みが紹介されました。長野県松本市長による職員の懇親会での決め事です。乾杯後30分間はお酌に立たずに食事を取る、そしてお開き前の10分間は、自席に

戻って残った料理をしっかりと食べようというものです。思えば私たちも、宴席の料理を食べ残したり、うっかり賞味期限を過ぎしてしまったりと



自戒するところです。

国連食糧農業機関によると、世界の飢餓人口は8億500万人。地球上の9人に1人という割合です。一方、まだ食

べられるのに廃棄される食品は世界で年間13億トン、日本の一般家庭だけでも300万トンを超えるそうです。家庭のみならず、学校での給食など、幼い頃から食べ物を大切にする経験を積み重ねることで、食品ロスは相応に減らせるものと思います。

本区でも、小松菜をはじめ質の高い農産物がたくさん生産されています。生産者の心のこもった野菜を、その切れ端にも「ありがたい」という気持ちで無駄なくいただきたいものです。

江戸川区長 多田正見

平成 28 年 8 月 1 日号

『朝顔に 釣瓶（つるべ）』

とられて もらい水』、誰もが知る加賀千代女の句。朝顔が庭先を彩る季節になりました。入谷の朝顔市は先日終わってばかりですが、この市に並ぶ朝顔は10万鉢ともいいます。なんとその7割は江戸川区産とか。昔、入谷では植木職人が朝顔を作って市を立てていたそうですが、戦後作る人がいなくなり、これを何としても復活させたいと、花どころ江戸川区の園芸農家に頼み込んだというのがご縁の始まりということです。

生産地ということもあって、

区内の朝顔市も盛況です。東善寺境内で行われる朝顔市は今年38回目を迎えました。松江銀座商店街の皆さんが、地域の夏の思い出づくりのため



に汗を流してください。今では、夏を告げるよい風物詩となりました。

また、小岩駅南口のあさがお市は27回目。身近な場所で

朝顔を楽しんでほしいという思いから、駅前の各商店街が協力して開催しています。

昨今は、夏らしい風情を感じる場面も少なくなってきましたが、うれしいことに本区には、朝顔のほかにも風鈴、つりしのぶ、扇子、金魚などなど江戸期から大切にされてきた貴重な伝統文化が残っています。世代を超えた継承を心からうれしく思います。

釣瓶とられて…にあやかっ
て一句、『朝顔や 夜にから
んで 朝のびる』（酔人）

江戸川区長

多田正見

平成 28 年 9 月 1 日号

江戸川区保護司会と関係団

体の皆さんが主催する社会を
明るくする運動「区民の集い」
は、今年で26回目を迎えまし
た。その一環として行われて
いる中学生の標語コンクール
には、驚くことに区内全33校
から一万点の応募があったそ
うです。表彰された作品をご
紹介しましょう。

- 誰にでも 一人一人の よ
さがある (森山優助)
- 持つべきは 断る勇気と
固い意志 (入夏康平)
- 大丈夫 引き返せるよ 今
だって (櫻井健太)
- 一言で 人の心は あたた

まる (中村海友)

■ ありがとう ごめんなさい
言える自分を大切に！ (小
池稜)

■ 失敗は 自分を見つめる
チャンスだよ (佐藤世那)

ホッ
ライ
ン

■ 作ろうよ みんなの絆で
笑顔の輪 (有賀くるみ)

■ ありがとう 5文字でつな
がる 心と心 (長岡美詩)

■ 物よりも もらって嬉しい

ありがとう (秦采未)

■ 知っている？ あなたは誰
かの たからもの (原本真緒)

■ あいさつは 心と心 結ぶ
ひも (瀬川龍郎)

■ かかえずに はなしてみよ
う 悩み事 (土肥大桜)

■ 心ない その書き込みに
ブレーキを (佐藤桃菜)

■ わずか17文字の中に、改め
て気付かされることがたくさ
んあります。中学生の意識の
高さと日本の明るい未来を感
じます。(敬称略)

江戸川区長

多田正見

平成 28 年 10 月 1 日号

カスリーン台風が関東地方を襲ったのは戦後間もない昭和22年のことでした。山間部に降った雨が利根川を流れ下り、現在の埼玉県加須市付近で堤防が決壊。大洪水が流域自治体を飲み込みました。その2年後、キティ台風が東京湾を襲い、高潮により小松川・平井地区は完全に水没。東京東部地域に甚大な被害をもたらしたのです。

私たちの住む江戸川区や周辺の各区は、低地帯であるが故にこれまで数々の水害に見舞われてきました。現在は堤

防が強化され、護岸も相当程度整備されましたが、これを超えるような大規模水害が昨今の気候変動の影響により危惧されています。そこでこの



問題に取り組みべく、墨田・江東・足立・葛飾・江戸川の5区が共同して昨年10月に協議会を設立し、国や都、関係機関の参画を得て検討を重ね

てきました。テーマの中心は「避難のあり方」です。高台のない5区がこの難問をどう克服するか、これからまだまだ検討を続けます。いずれ区民の皆さんにもお伝えしてまいります。

今年はひと夏で6つの台風が上陸するという、観測史上まれに見る異常気象でした。台風シーズンは終盤ですが、気を引き締め、皆さんと力を合わせて水害対策に取り組んでまいります。

江戸川区長 **多田正見**

平成 28 年 11 月 1 日号

東京2020オリンピック・パラリンピックでは「おもてなし」がキーワードになっています。最近、各地域のイベント会場で「笑顔であいさつ おもてなし 東京2020オリンピック・パラリンピックを盛り上げよう！」というのぼり旗を目にします。世界各国から訪れる多くの方々を明るい笑顔とあいさつでお迎えすることは、何よりのおもてなしになることでしょう。

先日、新聞の投稿欄に「あいさつしない子どもたち」という記事がありました。登下校中の小学生に「おはよう」

と声を掛けても返事が来ない。聞けば、「知らない人にあいさつしてはいけない」と学校で教わっているとのこと。投稿者は、「何か怖くて悲しい、これでいいのかしら」と



。この投稿への反響に、「子どもを狙った犯罪が多い昨今、それも分からないではないが、むしろしっかりしたあいさつを交わすことができる地域社会にすることこそが大切なの

では…」という意見もありました。

本区では4年後に向け、あいさつ運動を区内に一層広げていきたいと思っています。そのためには、まず率先垂範、区職員がどなたにも明るい笑顔であいさつできるよう取り組んでいます。区歌4番「日々の努力で高めゆく 誇れる都市よわがさとよ ああ江戸川は未来への きらめく虹の立つところ」。この歌詞を、皆さんのすてきなあいさつで実現しようではありませんか。

江戸川区長

多田正見

平成 28 年 12 月 1 日号

区の広報紙でこのようなことを話題にするのはいかがかとは思いますが、本区は「自転車盗」が多いと言われ久しくなります。実に不名誉なことです。地域の皆さんの弛（たゆ）みない努力が続けられているのですが、残念ながら一進一退、大幅な減少は見られません。

警視庁が発表した9月末までの本区の刑法犯認知件数は、23区ワースト2。中でも自転車盗はワースト1で、これが全体の件数を押し上げています。本区は人口が多く平坦（へ

いたん）な土地柄で、自転車利用者が多いという事情はありますが、それにしても悲しい数字です。

最近、区民の皆さんを対象



に行ったアンケート調査では、自宅で自転車に鍵を掛けていないという方が14・2%、特に20代以下の若い世代では25%に上りました。その結果、

自宅内での盗難が全体の42・7%を占め、こちらも若い世代を見ると59・3%という状況です。「自宅なら安全」と思いがちではありますが、油断は禁物！

自転車は便利で手軽な乗り物ですが、自転車盗が原因で「犯罪が多いまち」と言われ、区のイメージダウンにつながってしまうのはとても残念です。若い皆さん、自分の持ち物を大事にして、一緒に自転車盗を撲滅していきましょう。

江戸川区長 **多田正見**

平成 29 年 2 月 1 日号

大相撲ファンを沸かせた初場所が幕を閉じました。うれしいことに本区に居を構える田子ノ浦部屋の稀勢の里関が初優勝し、横綱審議委員会の推薦を受け、「第72代横綱稀勢の里」が誕生しました。日本出身の新横綱誕生は19年ぶりです。地元小岩の皆さんだけでなく、日本中の人々がこの日を待ちわびたことでしょう。

が、これまで肝心なところで苦杯をなめ、あと一步で賜杯に手が届きませんでした。しかし今度ばかりは安定した強さで見事優勝。苦しいこと、



辛いこともたくさんあったでしょう。それを乗り越えてよく頑張ったと思います。

思えば、小岩は名横綱と謳（うた）われた栃錦関を生んだ地です。その業績をたたえ、郷土の誇りとして後世に伝えようと、多くの皆さんの気持ちが集まりJ・R小岩駅に銅像が建てられました。かつて栃錦関が、人々の熱烈な声援を受けて小岩のまちを闊歩（かつぽ）したように、これから稀勢の里関がいてくれると思うと心躍ります。

今後ますます精進を重ね、強い横綱に成長し、子どもたちに夢と希望を与え続けてほしいと思います。

江戸川区長 **多田正見**

平成 29 年 3 月 10 日号

今年、区立中学校12校が開校70周年を迎えます。戦後間もない昭和22年の教育制度改革で、六・三制がスタート。江戸川区でも、12校の中学校が新たに開校しました。

中学校が12校できたといっても校舎があったわけではありません。取りあえず小学校の教室を借りるなどして急場をしのぎ、その間に大車輪で学校建設に取り掛かったのです。当時、区の教育課長の職にあった中里前区長は、「校舎がなく、生徒と先生がいるだけ。こんなことでこの制度は

本当にうまくいくのだろうか」と、誰もがいぶかったとよく話していました。

急きょ迫られた学校建設です。用地や建設資材の確保、



資金の調達など、並の苦労ではなかったことは想像に難くありません。また、区は校舎を建てることで精一杯。机、椅子、黒板などの調度品は、

地元の皆さんに寄付してもらわなければならないというありさまでした。

こうして12校の取りあえずの木造校舎が完成したのは、新制度発足3年後のことでした。さらに、昭和30年代からの人口急増で、この70年間に区内に満遍なく106校の、鉄筋の小・中学校が建設されることとなったのです。

この、半世紀以上にわたる壮大な事業を振り返ると、区民と共に成し遂げてきた江戸川区の底力をしみじみと感じます。

江戸川区長

多田正見

平成 29 年 4 月 1 日号

東日本に未曾有の災害が襲って6年がたちました。物心両面にわたるその傷痕は深く、そう簡単に癒えるものではありません。復興は進んでいるとはいえ、多くの人たちがいまだ厳しい現実に向き合っています。

毎年3月11日、その時が近くなると報じられる数々の現地ルポ。「愛の遺影に朝晩 好物入り弁当」「子の巣立ち 万感の春 卒業、結婚：消えぬ不安も」「水産加工場 外国人頼み」「点在する漁村 存続へ懸命」「福島観光 風評との闘

い」「高台移転 高齢者に負担」。このような見出しで紹介される被災地の様子に、身近な人を失った悲しみを抱きながら新たな生活の再建に勇気を



つなげ、懸命に歩み続ける人々のことを、私たちは遠くから想像はできても実感として持つことはできません。一日も早く、希望を持って過ご

すことのできる、平穏な日々が訪れることを祈るばかりです。

ところで、発災直後から本年3月まで、区に直接寄せられた義援金の総額が実に4億円に達しました。熊本地震にも2千万円が寄せられています。江戸川区民に格別、富裕層が多いというわけではありません。他と比較することはありませんが、ただただ、区民の他を思いやる心の優しさ、温かさ、心意気の素晴らしさに頭が下がるばかりです。

江戸川区長

多田正見

平成 29 年 5 月 1 日号

「春眠（しゅんみん）曉を
覚えず、処処啼鳥（しよしよ
ていちょう）を聞く。夜来風
雨（やらいふう）の声、花
落つること知りぬ多少（いか
ほど）ぞ」。孟浩然（もうこ
うねん）の詩を実感する昨今
です。桜前線は早くも北に去
り、代わりに鮮やかなみどり
が目染む頃となりました。

今年、入学式は咲き誇る桜
の下で行うことができ、新一年生には思い出に残るものとなつたでしょう。区民の皆さんも区内のここかしこでお花見を楽しんだと思います。小松川・新川千本桜はいつの間

にか都内の「桜の名所」となり、J R 東日本が企画したお薦めのハイキングのおかげもあつて、遠方からのお客さんで随分にぎわつたと聞いてい



ます。

そして、これから先しばらくは若葉と美しい花々で町中が彩られ、「江戸川の春」を満喫できると思います。

日々の散策で気付く木々や草花の命の息吹、改めて見るわが町の素晴らしさ、親しい人との出会いや元気の出る会話、ごく当たり前の中に味わう何気ない幸せ。それもこれも健康であればこそ。さらに言えば世の中が平和であることの証しです。

今、大規模な自然災害で苦しむ人々や、世界各地の紛争で命の危険に晒（さら）され、衣食住に事欠く人たちのニュースを耳にするたび、無事平穏に過ごすが身のありがたさを思わずにはいられません。

江戸川区長

多田正見

平成 29 年 6 月 1 日号

今年は民生委員制度ができ
て100周年に当たります。
現在は児童委員を兼ねている
ことから民生・児童委員と呼
ばれます。厚生労働大臣から
委嘱を受ける特別職の地方公
務員ですが、純然たるボラン
ティアで報酬はありません。
その役割は社会福祉の増進の
ため、常に住民の立場に立ち、
援助を必要とする人々に対し、
生活や福祉に係るあらゆる相
談に応じ、適切な支援サービ
スへのパイプ役を果たす、極
めて重要なものです。
ところで、わが国の社会保

障制度は戦後経済の高度成長
期に飛躍的に拡充されました
が、時代の推移とともに社会
の変容は著しく、少子高齢化
や家族関係、社会的価値観の



変化によって多種多様な問題
を抱えつつ今日に至っています。
福祉には幾多の制度や施策
がありますが、それでよいと
いうものではありません。大

切なのは心です。悩める人へ
の民生・児童委員の親身に寄
り添う支援があつて公的施策
も生かされるのです。

人の生き方にはさまざまな
現実があり、そこに向き合う
には、高い人格と識見、深い
人間愛がなければなりません。
この一世紀、ひたすら地域の
福祉を支え、人々の幸せを守
り育んでくださった多くの民
生・児童委員の方々に、あら
ためて深い敬意と感謝を表し
ます。

江戸川区長

多田正見

平成 29 年 7 月 1 日号

先日、江戸川区高齢者事業団の定期総会に出席しました。文化センター大ホールを埋めた会員約1500人。まさに江戸川区の熟年パワーを見る思いでした。

この団体が中里前区長の英断により全国で初めて作られたのが昭和50年2月。今では地域に大きな信用と信頼の輪を広げ、会員数は発足時356人の約10倍、実に3797人。最近の契約実績は毎年11億円を超え、今や全国トップクラスの事業団に成長しました。これも歴代の会長、役

員、会員の皆さんが一丸となつて努力を重ねてきた成果です。江戸川区を見習って、たちどころに全国に広まったこの取り組み。法的制度の確立や



国の支援なども行われるようになり、平成22年には天皇、皇后両陛下の行幸啓を賜り、親しく励ましのお言葉をいただくことができました。

超高齢化社会を迎え、少子化や核家族化が進む中、子育てや熟年者への生活支援や介護などを社会全体で支えていくことが求められています。

社会参加の意欲がある元気な熟年者が、豊かな経験や知恵を活(い)かし、地域社会の担い手として活動することは社会の目標です。私たちの誇りとしてこの事業団をさらに充実発展させていきたいと思っています。頑張りましょう、熟年者！

江戸川区長
多田正見

落語家、八代目橘家圓藏師匠は生涯を通して平井で過ごし、「平井の師匠」と呼ばれ、ラジオ・テレビなどで人気を博した明るい芸風は多くの人々を引き付けました。惜しくも一昨年にお亡くなりになられ、残されたお宅は地元ファンからの要望もあり、ご遺族から区に譲っていただき、若干の整備をし、頂いたゆかりの品などを展示して、先月中旬「ひらい圓藏亭」として一般公開をしました。開館初日には多くの人が訪れ、人柄のよい往年の師匠をしのんでく

ださいました。

ある時、圓藏師匠に尋ねたことがあります。「大勢の前で話をすることが多いのですが、うまくいかずに落ち込むこと



があります。どうしたらいいでしょう？」師匠は「そんなことア、あたしだってしょっちゅうありますよ。でも引きずっちゃいけませんよ。それ

とお酒を飲み過ぎないことね」。そう答えてくれました。

一度、出演直前の師匠を見ていたことがあります。びっくりするほど緊張した様子に、私は一流の芸人というのはまさに真剣勝負で人前に出るのだということを痛感しました。私たちに笑いと幸せをくださった師匠ですが、第一人者としての厳しさを感じさせていただいた一コマです。改めてご冥福を祈り、この旧宅をいつまでも大事にしていきたいと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 29 年 9 月 1 日号

日本の歴史を大きく動かし
た昭和20年8月。多くの人々
の心に深い悲しみの記憶を刻
み、今年で72年がたちました。

昭和20年6月、沖縄戦の組
織的戦闘が終結し、本土への
空襲もますます激しくなり、
都市という都市は全て焼き尽
くされました。8月になると、
6日広島への原爆投下、7日
愛知県豊川海軍工廠への空襲、
8日ソ連の宣戦布告、そして
9日には長崎にも原爆が投下
され、まさに戦禍の嵐が吹き
荒れた4日間でした。
私の郷里は豊川市の一角に

あります。学徒動員の中学校
や高等女学校の生徒など25
00人以上が犠牲となった豊
川海軍工廠の空襲、この時私
は旧国民学校四年生でした。



爆撃のすさまじい地響きと空
に高々と立ち上る黒煙、その
記憶は今なお鮮明です。

終戦数日後、晴れた空にB
29より小さな飛行機がただ一

機、どこに行くのか飛んでい
くのを見て「ああ、戦争は終
わったんだ」と思ったことも
覚えています。

そして、今年も8月15日の
終戦記念日を迎え、新たな史
実や証言、検証などがメデイ
アによって数多く報じられま
した。人それぞれに戦争と平
和について深く考えたこと
でしょう。あらためて戦争で亡
くなられた幾多の方々の尊い
御霊（みたま）に心から哀悼
の意を表します。

江戸川区長 **多田正見**

平成 29 年 10 月 10 日号

秋山ヨシ子さん（74）は先日、江戸川総合人生大学の第12期生として、子ども・子育て応援学科を卒業しました。北野大（まさる）学長から卒業証書を頂き、さぞ感無量であつたでしょう。

秋山さんは67歳の時、事故で右脚を失う重い障害を負いました。しばらくは思うままに生活できず、要介護4の認定を受け、思い悩む日々が続きました。しかし、このまま何もしないでいれば寝たきりの状態になってしまうと、奮起一番、総合人生大学入学を

決意、介護・福祉学科で学び始めました。歩行は車椅子に頼らなければならず、最初はご子息の送迎に助けられましたが、途中からは自力でのバ



ス通学に変え、2年間頑張りましたのです。

ところが驚くことに、秋山さんはこれだけにとどまらず、引き続き子ども・子育て応援

学科に入学、合わせて4年間、一度も授業を休むことなく両学科とも皆勤賞を受賞。大学では毎回、授業開始の30分前には教室に入り、先生や友達達の顔を早く見たい、その事を励みに努力するうち良い友達も増え、通学することが楽しく、体もどんどん元気になつていったといいます。

「今は車椅子ですが将来は義足で歩きたい」と言う秋山さん。この不屈の精神には、ただただ驚嘆と敬服のほかありません。

江戸川区長

多田正見

平成 29 年 11 月 1 日号

小岩在住の笹岡武徳(雅号・晃山)氏は今月、100歳を迎えますが、先日もあるテレビ番組に出演、まれに見る元気な熟年者です。

31歳の時、現在の(株)笹岡工業を起こし、今も会長として経営に携わっています。笹岡氏は発明家としても知られ、自社の製品開発に長年打ち込んで、取得した特許は実に40を超えます。

趣味もなかなかのもので書を得意とし、江戸川区書道連盟の重鎮。他に尺八はこの道70年。江戸川区芸能文化協会

の名誉会員、併せて江戸川区音楽協議会の相談役を務め、時に演奏会にも出演し多くの人をうならせます。

昨年11月、100歳のお祝



いで笹岡氏を訪問した折、会社の応接室で一世紀にわたる自らの人生をいろいろ語ってくださいました。壁には立派な掛け軸が並び、その素晴ら

しい作風にひととき心を打たれました。

早稲田大学に学び若くして会社を起こし、さまざまな経営の苦難を乗り越えたこと。思い込んだらとことん最後まで極めずにはいられないその性格は、この100年を実に多彩なものにしたのでしょうか。その根性には敬服あるのみ、まさに傑人の面目躍如です。

江戸川区産業賞、文化功績賞も受賞された笹岡氏。この上ともご長寿であらんことを心からお祈りします。

江戸川区長

多田正見

東京都薬物乱用防止推進江
戸川区地区協議会が、中学生
を対象に標語を募集しました。
今年は818点の応募があつ
たそうで、その中の入選作品
13点をご披露します。(敬称略)

- 人生の 歯車 狂わす そ
のくすり (坂井結)
- 一度だけ その軽率が 命
とり (白石舞)
- 薬物なんかは たよるな
負けるな 手を出すな (岩
本侑生)
- 薬物に自分の未来は決めさ
せない! (米倉真乃人)
- 一度だけだと 自分にうそ

つく 薬物乱用(佐々木滉太)

- 誘惑に 乗らない 行かな
い 負けない心(竹川琴白)
- 薬物は あなたの心 壊す
敵 (大木結月)



- 守りぬけ 今の自分と 未
来の自分 (北林遼)
- 手を出せば あなたの未来
が壊される (高橋慶一郎)
- 立ち止まろう 闇への一線

越える前 (太田幹人)

- つかくても 薬物なんかは
逃げないで! (和田菜々美)
- その一度が 人生壊す 分
岐点 (大塚里菜)
- 薬物の 誘いに乗るな 関
わるな! (小野田凌)

どの作品も短い文の中に、
薬物の誘惑には負けないとい
う強い意志が込められていま
す。同時にポスターの募集も
あり、入選作品は区ホームペ
ージで紹介しています。どれ
も薬物の恐ろしさが鮮烈に表
現された作品です。中学生の
意識の高さを感じました。

江戸川区長 多田正見

平成 30 年 2 月 1 日号

「この子に障害があると告げられてから、少しでも良くなればと、まだ1歳にならないうちからさまざまな訓練に懸命に通ったこと。必死過ぎて周りが見えなくなっていた時、2歳上の姉が普通に接している様子を見て緊張がほぐれたこと。そんなことを思い出します。この子の近くにはいつも誰かがいて、助けてくれました。たくさんの人たちに感謝の気持ちでいっぱいです。二十歳になったこの子に手紙を書きました。」

『つらいこともたくさん

あったような、涙もたくさん流したような、不安に押しつぶされそうになった時もあったような。でも、あなたのおかげでたくさん笑い、たくさん



ん幸せを感じ、たくさん癒やされました。障害というハンデはあるけど、これからも楽しめることをたくさん見つけて生きていこうね。これから

どんな人と出会って、どんな経験をするのか楽しみです。いつも見守っていますよ。

最後にあなたに一番伝えたいこと。ママにしてくれてありがとう。大好きだよ」

これは区内のある重度の障害者施設での「成人を祝う会」でお母さんが話された一節です。どんな状況にも決して揺らぐことのない子を思う母の愛の深さ、偉大さに心を打たれ、しばし胸に熱いものを感じました。

江戸川区長

多田正見

平成30年3月10日号

昭和20年3月10日の東京大空襲の日から今年で73年目を迎えました。300機を超すB29から投下された1700トンの焼夷（しょうい）弾は、都心から江東地区一帯を猛火に包み、わずか2時間で東京下町は地獄へと変わりました。100万人が火に追われ、10万人の人々が命を落としました。区内では小松川・平井地区一帯が焼き尽くされ、死者800人、罹災（りさい）者4万人という空前絶後の被害に見舞われました。今ではこの惨劇を知る人も少なくなりま

したが、当時、小松川三丁目にあった区役所の焼け残った文書庫が今も空襲の激しさを伝えていきます。

平成3年には戦争の悲惨な



体験を忘れることなく、次世代へと引き継いでいくシンボルとして「世代を結ぶ平和の像」が、多くの方々の浄財により文書庫脇の公園に建立さ

れました。

毎年3月10日に隣接の小松川さくらホールで行われる犠牲者追悼式は、今年で30回を数えます。これを機に、区民の皆さんから寄せられた戦時中のさまざまな物品を整理して、このたび、常設の「平和祈念展示室」を設け、平井在住の真島武氏から寄贈された「国連平和の鐘」のレプリカも展示しました。全ての区民が平和を希求し、その活動を永続させる誓いの標（しるし）となることを願います。

江戸川区長

多田正見

平成 30 年 4 月 10 日号

この春、満開の桜とともにうれしいニュースに接しました。本区にゆかりのある児童文学作家の角野栄子さんが先日、「2018年国際アンデルセン賞」の作家賞に選ばれました。この賞は「児童文学のノーベル賞」ともいわれ、作家賞としては日本人3人目の快挙です。

角野さんは幼少の頃、北小岩に住み、中小岩小学校に通いました。結婚後は2年間ブラジルに滞在、そこから多くの海外経験を積み、代表作の『魔女の宅急便』をはじめ、

幾多の秀作を世に送り、数々の文学賞を受賞しています。これらの作品は、海外の子どもたちにも愛読され、今日まで長く親しまれています。



平成26年6月には、出身校の中小岩小でNHK教育テレビの番組「課外授業ようこそ先輩」に出演、その翌年、新春対談にもお付き合いいただいた

きました。その折、幼少の頃のどかな小岩で過ごしたさまざまな体験について触れられ、その忘れられない記憶は、作品のベースにもなっていると語っていました。

とても優しいお人柄で、子どもたちへの深い愛情と思いやりが作品となり、どんな境遇であっても強く生きてほしいという願いを作品に込めている、とも語られた角野さん。このたびの受賞に心からの祝意を表したいと思います。

江戸川区長

多田正見

平成 30 年 5 月 1 日号

江戸川区が国外の都市としては唯一、姉妹都市盟約を結んでいるオーストラリアのゴスフォード市が、一昨年の5月、制度改革により隣接のワイオン市と合併し、名前もセントラルコースト市となりました。

ゴスフォード市とは昭和63年の盟約締結以来、今日まで30年、さまざまな分野で幅広い交流を続けてきました。特に平成6年、本区の援助によって造られた市の文化施設「アーツセンター」内の日本庭園は、友好のシンボルとし

て、両市民の心の絆を強固なものとしてきました。また、毎年派遣している青少年の翼事業の受け入れや、関東第一高校生徒との交換留学など、



子どもたちの貴重な体験の場として、大変お世話になっています。

こうした関係を新市制となった後も、ぜひ継続してほし

いという私たちの願いに、先方も喜んで応じてくださるというお返事を昨年末にいただき、今月中旬、ジェイン・スミス市長をはじめとする5人の代表団が来区し、セントラルコースト市と本区は改めて盟約を締結することとなりました。

日本のはるか南、8000キロにある都市と、これまで30年の歴史の上に、さらにどんな素晴らしい交流が待ち受けているか本当に楽しみです。

江戸川区長

多田正見

平成 30 年 6 月 1 日号

今年は例年になく季節の巡りが早く、東京の桜は4月を待たず3月下旬には予期せぬ早さで満開となりました。小松川や新川の千本桜も見事に咲き誇り、その下では賑（にぎ）やかなおまつりも繰り広げられ、多くの人がこの世の春を楽しみました。

桜が終わり区内の公園や街角にはさまざまな春の花が咲き乱れ、道行く人を慰めてくれています。ハナミズキ、藤、バラ、レンギョウ、早咲きのアジサイ…。中でも区の花ツツジは花の持ちが長く、今な

お町を彩ってくれています。ところで区内に区の花ツツジを満喫できる所をつくりたいと以前から考えていました。が、格好の場所がありました。



総合レクリエーション公園の東端にある展望の丘の斜面です。3年がかりで55種1万株を植栽し、昨年3月に完成しました。実に素晴らしい眺め

でこれから木が成長すれば区内でも有数のツツジの新名所になることでしょう。この春も多くのファンが訪れてくださり、その見事さに感嘆しきりでした。

さて、6月は小岩菖蒲園です。100種5万本の紫や白の鮮やかなハナショウブが、区内外からのお客様を迎えてくれるでしょう。

咲くいのち芽吹くいのちのただ中に／安住正子（区俳句連盟句会より）

江戸川区長

多田正見

平成 30 年 7 月 10 日号

本区在住の梅原玲奈（れいな）さんは、今年の平昌（ピョンチャン）五輪に出場した唯一の区民です。種目はスキークロスで、惜しくも決勝トーナメント一回戦で敗退しました。シーズン終了後に引退を決めた梅原さんが先日、私のところに挨拶に来てくださいました。

小学生からスキーを始め、25年にわたって競技に打ち込んできた、さすがと思わせるほどの素晴らしい女性です。引退にあたり応援してくれた方々に書かれたブログを改めて読みました。

10代や20代で五輪に出場する選手がいる中、34歳での初出場はかなり遠回りのスキー人生だったこと。スキークロスに転向直後は無名で、スポ



ンサーも付かずアルバイトと節約の毎日だったこと。その期間があったからこそ、多くの助けや応援のありがたみを身に染みて感じたこと。

そして梅原さんは「自分から行動して周りを巻き込み、環境を変えていくことを学びました。何かを変えるには、とにかく動くこと。当たり前のことですが、難しくそして大切なことです」とつぶつぶっています。強い意志と感謝の気持ちで、この25年を支え、夢をかなえる力になったのでしよう。

「五輪は本当に特別な場所でした」。一つの目標に向かって青春の全てを懸けた若きアスリートの情熱にいたく感動しました。

江戸川区長

多田正見

平成 30 年 8 月 1 日号

2000年の伝統を誇る篠崎
浅間神社の幟（のぼり）まつ
り。今年、2年に一度の本祭
りが盛大に行われました。早
朝からほぼ半日かけて、約22
メートルの幟旗10本を大勢で
威勢の良い掛け声とともに綱
を引いて立ち上げる。そのさ
まは実に壮観です。

私は30年間このお祭りを見
てきましたが、そのたびに、
老いも若きも懸命に汗を流す
姿に深い感動を覚えます。高
齢の幟奉行はそれぞれの役割
を果たし若者に伝授する。若
者はそれを心得て意気盛んな

姿を見せる。見事な世代送り
の姿です。

伝えるのは幟を立てる技術
だけではなく、その手配にま
で及びます。多くの人々の知



恵と努力によって一つのお祭
りが続けられる伝統は、まさ
に地域の心意気と言うべきで
しょう。

昨今、地方の夏祭りが惜し

まれながら消えていくという
話を聞きます。時代の流れに
いかんともし難いさまざま
事情で、由緒あるお祭りが消
えていくのは、寂しいことと
言わざるを得ません。

本区ではこの他にもさまざま
まなお祭りが各所で続けられ
ています。どれも伝統を受け
継ごうという地域の情熱に
よって、その年が来れば盛大
に繰り広げられる様子を目の
当たりにできるのです。江戸
川区に住まうことの喜びを、
この夏も感じさせてもらいま
した。

江戸川区長

多田正見

「社会を明るくする運動」は、犯罪や非行の防止と、更生を支える社会の実現を目指し、保護司会などが中心となり取り組む国民運動です。先日、「第28回区民の集い」で、中学生標語コンクールの表彰式がありました。区内全33校から寄せられた一万点を超える作品。受賞した13点の優秀作品をご紹介します。(敬称略)

- やめようよ 遊びという名の いやがらせ(橋本瑞生)
- 見つけよう 悪いところより 良いところを(井川大我)
- ダメだよと 言える勇氣と 聞く勇氣(高田遥翔)



- メールでは あなたの表情 見えないよ(比嘉真梨奈)
- 君の手が 誰か救える 希望の手(熊井涼太)
- 家族との 会話で始める
- 一日を(黒田和正)
- あいさつは 世界をつなぐ 合言葉(向田杏朱)
- 一人じゃない 頼れる人は 側にいる(飯野智子)

- 顔あげて 周りを見れば 友がいる(菅原里紗)
- 声かけよう 注意するのも 思いやり(中森未貴)
- 守りたい 君の笑顔と その命(井樽真那)
- いつまでも あなたは家族の 宝物(宮田真)
- 灯そうよ 更生の灯(あかり) この町に(中島満咲)

誰もが幸せに社会の中で生きられるにはどうしたらよいのか。作品に込められた中学生の真摯(しんし)な思いを、私たち大人はしっかりと心得なければなりません。

江戸川区長

多田正見

昨今、熟年者の元気の秘訣（ひけつ）は、「教育？」と「教養？」とか言われます。つまり、「今日行く（きょういく）所ある」、「今日用（きょうよう）事ある」というわけです。なるほど、毎日そのように過ごしていれば、元気は間違いないでしょう。

ところで、近頃、区がある出版社にお願いして発行した「るるぶ大人の江戸川区」という情報誌が書店に並んでいます。手に取ってページを繰（く）ると実に楽しい記事が満載。本区の魅力が余す所な

く紹介され、思わず訪ねてみたくなるスポットの数々。総合人生大学やボランティア、楽しい職場探訪など、地域のために何かしたいと思ってい



る人にはズバリのページがいっぱい。目に留まったらぜひ読んでほしいと思います。この本の狙いは人生の節目ともいえる65歳を迎え、新し

いシニアライフを始めようとする皆さんを念頭に、これからも地域の主役として活躍してほしいと願って、必要な情報をたっぷり盛り込んでお届けしようというものです。もちろんこの世代に限ったことではありません。全ての世代の皆さんが、さまざまな事柄や風物との出会いに新鮮な感動と喜びを味わってもらえればなんとも嬉（うれ）しいです。さあ、この本を友として出掛けましょう。あなたの素晴らしい充実ライフを目指して。

江戸川区長
多田正見

平成 30 年 11 月 1 日号

この季節、澄み切った空を見上げると、スズガモやカンムリカイツブリなど、渡り鳥の姿が見られます。そんな野鳥が集う葛西沖がこのほど、ラムサール条約に登録されました。

ここは従前から三枚洲といわれてきたところで、国内有数の野鳥の飛来地として知られ、都内でも唯一初めての登録地となります。大都市東京の一角に、このような自然環境があることは私たち区民にとって大変誇らしいことで、これから迎える東京2020

大会に向けても大きな朗報です。国内外から訪れる皆さんに、葛西の魅力を一層高めることになるでしょう。

ところで私たちは、今日に



至る葛西沖の歴史を忘れてはなりません。昔、江戸前といわれていたこの辺りは、淡水と海水が入り混じる良質な海産物の宝庫でした。ところが

昭和40年代、高度成長期に海は荒廃し漁業ができなくなつたことに加え、伊勢湾台風級の高潮に備え防潮堤をそれまでの3・5mから一気に7mにかさ上げしたため、本区は海を失うことになりました。

以来、かつての自然豊かな海を取り戻したいという切なる区民の願望と、多くの先人たちの情熱と努力で今日のような姿を取り戻すことができたのです。

いま、公園の渚に立って深い感慨に胸打たれます。

江戸川区長

多田正見

木々の葉が色づき秋の深まりを感じる頃となりました。この季節、毎年行われる区内産業界の名物イベント。その一つは11月7日と8日に総合文化センターで開催された「江戸川『食』文化の祭典」です。今年31回を迎え、地域にしっかりと定着し早朝から多くの人で賑（にぎ）わいました。

区内の料理飲食業組合を中心に、食に関わる各種団体が一丸となり行うもので、区民の日頃のご愛顧に応えようという心のこもったイベントで

す。何といっても人気の的は、プロの料理人が提供する豊富な料理が並ぶ模擬店です。まるで歳末のアメ横を思わせる人出でした。



さて、もう一つは今回20回となる「産業ときめきフェア」です。こちらは11月16日と17日にタワーホール船堀で区内外130の企業・団体がブー

スを並べて、自社の製品を展示し、その素晴らしい技術力をアピール。企業間の交流や新たな製品開発、さらには受注拡大につながるなど毎年大きな成果を上げています。

企業人ばかりでなく一般区民も区内のものづくり産業の魅力に触れ、その素晴らしさに驚嘆しきりでした。

長年にわたり続けられてきたこの二つの催しに、改めて区内産業の底力と結束力、心意気を目の当たりにすることができました。

江戸川区長

多田正見

平成31年1月1日号

明けましておめでとうございます。平成最後の年を迎えました。時代の流れの中で、終わりと始まりの境目で、過去と未来を織り交ぜて記憶にとどめておきたいと思います。

1989年1月7日、当時の小渕官房長官が力強く書かれた「平成」を発表した時のニュースを覚えている人は多いと思います。時の首相談話は「国の内外にも天地にも平和が達成される」という意味が込められており、これからの新しい時代の元号とするに最もふさわしい」というものでした。

中里前区長は私たちに、「実に素晴らしい年号ではないか」と言われました。昭和を「激動の時代」といいますが、確かにあの悲惨な大戦を思えば、国民が等しく異常ともいえる体験を強

いられた時代でした。その中で、ひたすら区政にまい進した前区長にしてみれば、新しい「平成」の御世に格別の感慨が込められたと思います。

昭和から平成にかけて「心の時代」とよく言われました。高



度成長期を終えて物から心へと人々の価値観は大きく変化し、心の豊かさや暮らしの潤いが求められました。「ゆたかな心地にみどり」を合言葉に、区をあげて取り組んだ緑化運動はその一面を物語っています。平成元年、誕生した平成庭園、葛西臨

海公園・海浜公園や水族園、ホテルシーサイド江戸川など、まさに平成の幕開けを飾るにふさわしい祝砲でした。

そして、葛西海浜公園は先ごろ、待望のラムサール条約への登録を果たし、その魅力をますます高め、平成を締めくくることとなりました。

今、本区は区民の皆さんの旺盛な地域愛によって温かな支え合いの社会を目指し、力強い歩みを続けています。平成の先にある次なる時代に向け、人々の英知と努力によって迎える輝く未来を思い描きたいと思います。

江戸川区長

多田正見

平成31年2月1日号

重い障害のある中村光也（こうや）さんが、今年、成人を迎えました。小松川にある施設「さくらの家」で行われた成人を祝う会でいただいたお祝いの冊子に、光也さんの中学2年生の妹、涼日花（すぴか）さんの「私の兄」という一文がありました。

「私には、障害がある6歳年上の兄がいます。兄の事を私はずっと『こうちゃん』と呼んでいます。

私が1歳の頃、こうちゃんの隣でよく寝ていました。その時の光景を今でも少し覚え

ています。こうちゃんがつっていた特別支援学校では、毎年運動会やイベントが開かれ、その親子で参加する種目で妹としてこうちゃんと一緒に参



加することが、とても楽しかったです。

こうちゃんは、よく体調を崩し、救急車で運ばれ、長い間、入院することも何度かあ

りました。入院先の病院では、家族でも子どもは入ることができないため、3カ月間、会えなかったこともありました。

こうちゃんは今年で二十歳になり、これから今まで以上に大変なこともたくさんあると思うけれど、こうちゃんの一人の妹として、こうちゃんを支えていきたいです。」

幾度も読み返し、つづられた珠玉の兄妹愛に深く心を打たれました。いつまでも幸せに過ごされることを願ってやみません。

江戸川区長

多田正見

平成 31 年 3 月 10 日号

松尾雄治さんといえばラグビーファンでなくても知らない人はいないというスポーツ界の超有名人です。

その松尾さんの講演を先日、タワーホール船堀で聞きました。松尾さんとは年に数回、MXテレビの番組で一緒に一緒に縁があり、その底抜けに明るい人柄に魅せられて、今年にはラグビーワールドカップ日本大会が開催されることもあり、本区での講演をお願いしたところ、快くお引き受けくださいました。

題して「挑戦する心」。ほぼ

一時間少々、実に天衣無縫の語り口でユーモアたっぷり、終始満場に笑いを誘う話術で自身のラグビー人生を熱く語り、松尾さんの面目躍如でした。



た。

新日鉄釜石では日本選手権7連覇という不滅の大記録の原動力にもなり「ミスター・ラグビー」と呼ばれた松尾さん。

んの話は一貫して「物事すべて結果はやってみなければわからない」「だから何事にも全力で努力し果敢に挑戦する」というものでした。その生きざまはまさに闘魂溢れるラグビーそのものと思いました。

この日の入場者は約450人。若い人たちはもちろん、世代を超えて私たちに大きな勇気と力を与えてくれました。今年も元号が変わる年です。その始まりを飾るラグビーワールドカップ。がんばれ日本！

江戸川区長

多田正見

平成31年4月10日号

待ちかねたように、春を告げる花々が一斉に咲き始めました。その中でも一番は何といてもサクラ。3月下旬から区内の至る所で満開に咲き誇るさまを楽しむことができました。

50年ほど前、区内のサクラの見どころといえば、わずかに篠崎水門脇の古木5、6本程度でした。昭和45年から始まった区を挙げての緑化運動により、今では23区内トップレベルの樹木数を誇り、特にサクラは1万5千本と、どこにいても身近にあでやかな花

を愛（め）でることができるようになりました。まさに本区50年のまちづくりはサクラと共にあったといってよいでしょう。



思えば、私が本区に着任して今年で47年。振り返ると昭和から平成へさまざまなことがありました。そのうち平成の20年間は区長として、区民

の皆さんの力強い支えにより今日まで務めることができました。この間、本区には良き住民性が育まれ、愛区精神はもとより、旺盛な地域奉仕への活動も高まり、まちづくり万般にわたり成長発展し、その取り組みは高い評価を受けるまでになりました。本当に誇らしく思います。

就任以来、折に触れ感じたことや心に残ることなど小欄につづってきましたが、今回で筆を置きます。ご愛読くださった皆さん、長い間ありがとうございました。

江戸川区長 多田正見

江戸川遊歩

(平成3年10月10日号～平成6年3月10日号)

川は流れる

鳥すむ水辺

高地願望

新春風情

海浜慕情

鹿骨花物語

町の音色

緑の風景

紫烟草舎の風（一）

紫烟草舎の風（二）

地下鉄走る（一）

地下鉄走る（二）

白帆の町

大河荒川

旧道往来

庁舎変遷

境川昔日

小岩行進曲

春色篠崎水門

彷徨する荷風

旧跡御番所町

新川歴史絵巻

落雷のない町

親水さくらかいどう余聞

新中川秋景

古刹巡礼

感懐東篠崎

ああ、古川

探訪名刹界限

妙趣平成庭園

川は流れる

江戸川散歩

江戸川の堤に出かけてみた。悠々として、寡黙な流れを見つめているうちに、思いは歴史の彼方へとらせていった。

江戸川が登場するもっとも古い文献は、835年の大政官符である。当時、関東南部には様々な河川が乱流しており、今の江戸川は太田河（太井川）と呼ばれていた。名称の変化は人とかかわりを示す。江戸川と呼ばれるようになったのは、1640年の大改修の後、江戸への物産を輸送する航路として「江戸へ行く川」と称されてからだ。

この江戸川をはじめ、荒川・中川といった大河川に江戸川区は囲まれている。しかも区内には小河川が縦横に走り、南には東京湾が広がっている。人々の暮らしは、古くからこれらの川や海とともにあった。

まず、川について考えてみる。川の道筋は、



昔と今とはまるで違ったものだった。その歴史は改修の歴史とも言えるほどだ。川は恵みを与えてくれると同時に、災いをもたらす水を治め、水を利用することが、生活や、ときには生死を左右したのである。

中川の大改修が行われたのは、八代将軍吉宗の時代であった。それ以前の中川の流末は、幅2〜3メートルで東京湾に注いでいた。

その名のとおりの荒れ川であった荒川は、たびたび氾濫していたため、江戸時代から何度も流れを変えられた。現代の姿になったのは、明治にはいつてから20年余りの歲月をかけた大改修によってである。

川はまた、水上交通路としても利用されてきた。区を東西に横断している新川は、江戸時代、行徳からの塩の運搬をはじめ輸送路としてにぎ

わった。明治になってからは、外輪船の「通運丸」が新川から江戸川を運航し、人気を博したという。

時は流れ、昭和30年代からの高度成長時代に入って、川の不幸な歴史が始まった。特に中小河川は水質の汚濁がひどくなった。生活

排水・工場排水の流入は川を「ドブ川」と化した。

一方、かつては葛西のりの産地であった葛西沖も、海洋汚染や埋立などによって減産の傾向をたどっていた。ついに昭和37年、漁業権の放棄により、その歴史は幕を下ろすこととなる。

このような時代を背景として、人と水のかかわり方も変化した。夏ともなれば、子どもたちの水遊びの歓声がこだました街の姿も遠のいた。都市化の代償を払うかのように、自然との触れ合いの場が周囲から消えていったのだ。

昭和48年の古川親水公園完成は、そんな時代の分岐点といえる。

下水道の普及により不要となった古川を埋めてしまおうか、あるいは河川として残すか、という選択を前にして、昔の古川をよみがえらせるという方向を選んだのである。「親水」という言葉が表わすように、それは、水と闘い水を利用することから、水と共生することへという、これからの時代の人と水との付き合い方を示している。

現在、区内には3か所の親水公園がある。水質が改善されてきた江戸川・荒川などの大河川とともに、かけがえのない環境として、未来へ手渡していききたいものだ。（多田）

鳥すむ水辺

江戸川散歩

日々の暮らしの中で空を見上げることが少なくなったような気がする。建物は上へ上へと伸びていくが視線はどうだろう？

そんな取り留めのないことを思いながら、ふっと、晩秋の空を見上げてみた。すると鋭い影が、遠く日差しをかすめていくではないか。

「鷹？まさか……」

そういえば江戸時代、この辺り一帯は、將軍の鷹狩りが頻繁に行われたところであった。

鷹狩りは、よく訓練された鷹を獲物となる鳥に向かつて放す狩猟である。狩りの対象となるのは、雉、鴨、雁など多種にわたっていたが、その中心は何といっても鶴であった。その頃の江戸川区は沼や湿地が多く、河口も広がっていたので、えさが豊富であり、多種多様な鳥が飛来し、生息していたのである。



鷹狩りによって捕らえられた鳥には、前述した鶴をはじめとして、鴝、鷺、鶴、白鳥といったものもいたというから驚くばかりだ。240年間続いた鷹狩りだが、特に八代將軍の吉宗はこれを好み、小松川付近をしばしば訪れた。その折に食した青菜を「小松菜」と命名したという逸話も残っている。

一方、忘れてならないことは、鷹狩りという行事が当時の農民にとって、大変な負担になっていたということだ。鷹狩りの時は秋から冬にかけてだが、この間は農耕が禁止されたのみならず、さまざまな夫役も課せられた。また、鳥が降り立ったらその場を回り道するよう規制されたり、その当日ともなれば20項目にもおよぶ禁止事項のお触れ書が出まわったりもした。

そんな時代であったから、人々の鳥を見る目も、今とは違ったものだったのではないだろうか。では、翻って現在はどうだろう。夫役やお触れ書もなくなったが、鶴や鴝もいなくなった。しかし、春になればツバメの巣を見つめることができるし、夏には風に乗ったカモメの鳴き声を聞くこともできる。冬が近づいた

ことを教えてくれる鴨の群れに出会うことも難しいことではない（特に、葛西沖は近年、鴨の飛来数が日本一になったこともあるほどの場所だ）。

季節の移り代わりを告げる風物は数多くあるが、鳥の飛来をその一つとして数えることができる自然環境というのは、何とも貴重なものだと言える。

しかも、新たに、「野鳥の楽園」とも称すべき地が、この江戸川区には誕生した。葛西臨海公園の東人工なぎさである。ここは鳥類保護のため立入禁止だが、それだけに水鳥などの宝庫となっている。

このように、水辺では鳥が行き交っているが、区内にいるのは、もちろん鳥だけではなく、

「自然動物園」にはおよそ54種の動物が暮らしているし、「ポニーランド」では河川敷の風を受け乗馬が楽しめる。どちらも動物とのふれあいを大切にしている場だ。

―空はぬけるように青い。先刻、日差しをかすめたのは何だったのだろうか？

過ぎ去った時間をなつかしむ鳥かげだったのだろうか？（多田）

平成3年11月10日号

高地願望

江戸川散歩

街の表情が日一日とせわしないものになってきた。師走。この時季になると空も一段と澄み渡り、連綿と続く街並みのかなたから、富士の頂が顔をのぞかせる日も多くなる。

人は古来から、高い場所に対して格別の思いを抱くものらしい。区内には、この富士山をかたどった『富士塚』が11基現存している（そのうち8基が区の文化財として登録されている）。富士塚というのは、富士の溶岩を運んで積み上げたもので、富士信仰の一形式として江戸時代から始まった

という。富士への登山が容易ではなかった時代、ここに登ることで富士登拝と同じような「霊験」が得られると考えられ、各地に築造された。富士塚の最盛期は、江戸時代末期から明治にかけてだが、区内にあるものは明治初期から昭和にかけて築かれたものである。



そのほとんどが川べりにあるのは、岩を船で運んだからであろう。高さは最大でも5メートル程で、起伏に乏しい江戸川区にとっては、ささやかながら土地の「隆起」とでも言えようか。

さて、富士塚という「隆起」は別にして、江戸川区の地形は実に平坦である。これは、地盤が江戸川の運んできた土砂などによって形成されているからだ。

しかし平坦とはいえ、まったく変化がないというわけでもなく、小岩から篠崎にかけての江戸川沿い一帯から葛西方面に向かって、なだらかに勾配をなしている。地盤高は高いところで3メートルから4メートルあり、低いところではいわゆる「ゼロメートル地帯」と呼ばれた地域になっている。

このように全体的には低地と言ってもよい地形だけに、またそれに加えて、周囲が水に囲まれていることもあり、過去にはいくたびも水害に見舞われた。その中でも、昭和22年のカスリーン台風による被害は特にすさまじく、堤防の決壊も重なって新川以北が水につかってしまったほどだ。浸水

家屋は3万戸、被災者は13万3000人を数えた大災害であった。

自然の脅威を呼び込むこともある地盤は、同時に、暮らしを支える地盤でもある。人はそれを一新することはできないが、より暮らしやすくなるよう、改良を加えていくことはできる。例えば、防波堤（護岸）や下水道がそうだ。特に今日では、防波堤は治水・防災上の役割を超えて、人々が憩うことのできる水辺空間（スーパードーム）としても整備されようとしている。下水道については、新川ポンプ所の稼働によって、普及率100パーセントに手が届くところまでできた。

与えられた自然条件の中で、より快適な生活環境を創造していくという営みが、そこにはある…。

ところで、区内で一番高い「場所」はどこだかご存じだろうか…。それは、今年10月に一部開放となった大島・小松川公園の「展望の丘」である。高さ12メートルのこの丘の上に立つと、周囲を一望できるばかりか、日常の喧噪から離れたひとときを味わうことができる。師走のせわしなさを忘れたいときに、出かけてみたい場所である。（多田）

平成3年12月10日号

新春風情

江戸川遊歩

新しい年を迎えた。家々の門口からは松飾りもとれて、街や生活も、すっかりいつものリズムを取り戻している。

日本人は年の変わり目に格別の感懷を抱く民族らしい。年末から年始にかけてさまざまな行事や風習が伝わっていることは、その現れのひとつと言えようか。それらの中には、今も暮らしに息づいているものが多い。

では、江戸川区内の行事や風習についてはどうであろう。

江戸川区はもと農耕地帯ということもあり、農作物の収穫に関する行事が多い。これらは「五穀豊穰、豊年万作」、および「家内安全、無病息災」の二つの祈願のために主として行われた。

たとえば、『鉏はじめ』という行事がある。これは1月11日に農村で儀式的に鉏を使い



じめる、いわば仕事はじめの行事で、その年の実りを祈るものであったという。11日は蔵びらきでもある。また、1月14日の朝に、柳の枝に米の粉で作った小さな玉を鈴なりにつけ、これを神だんなや仏だんな、畑などにさし、病氣にからまないよう祈る行事がある。このときの小さな玉は『餅花』(まゆだまだんご)と言われている。

一方、古くは『大般若』という行事が同じく14日に行われていた。『大般若』は悪魔払いの行事のひとつで、江戸時代の終わりごろ、コレラが流行したことから始まったと伝えられているものである。

翌15日には、『あずきがゆ』をつくり、20日には、『麦こがし』をつくった。『麦こがし』はワラにつけて稲の花にみたてたのである。これを神だんなや屋敷神にまつた。

いずれも、農村の暮らしぶり、と、災厄に有効な手だてを講じることのできなかった時代とを偲ばせる行事だ。

ところで正月といえ、初詣で行かれた方も多かったのではないだろうか。その中でも七福神詣では、よく知られ、今も盛んにおこなわれているもののひとつである。

福神信仰というのは、室町時代、町衆の間に蓄財の觀念が発達し、金運を望む現世利益のための民間信仰として定着したものだ。江戸時代になってからは、特に大黒天と恵比寿の信仰が活発になり、やがて七福神が生まれた。区内では七福神のうち、福祿寿と寿老人を除いたものが確認されている。

ほかに、年の初めの表情を彩るものとしてはシクラメンや福寿草、千両などの花々がある。特にシクラメンは江戸川区産が有名である。江戸川区の園芸花卉栽培というのは、江戸時代に大杉あたりで菊の栽培を始めたことに由来するといわれている。それが付近の村に広まっていき、現在、鹿骨は東京の花どころと呼ばれるほどになった。

このように、正月にちなんだいくつかの行事や風物に触れてきたが、忘れてはならないものとして、人が集まる「場所」がある。日の出の新名所、葛西臨海公園だ。海の彼方から登り来る太陽は、いつ見ても人を魅了して止まない。

今年も10日を過ぎた。かけがえのない日常生活はすでに活気に包まれている。(多田)

平成4年1月10日号

海浜慕情

江戸川遊歩

寒の入りを過ぎて間もない日、葛西臨海公園を訪ねてみた。まだ早いせいかな人影はまばらである。雲一つない快晴、富士や房総の山並みもくつきりと望むことができる。

丁度、満潮時で波がすぐ近くまで寄せている。手を差し延べて水をすくってみたがさすがに冷たい。あたりに漂う磯の香を胸一杯吸い込んだ。子供の頃、海水浴に行ったことがあれば、誰もが記憶に留めている懐かしい海の匂いだ。

先日、熱燗を酌み交わしながら聞いたMさんの話を思い出す。彼はこの地で生まれ海と共に青春を過ごした男だ。こうして浜辺に立つとMさんが語ってくれた古の海が、彷彿として浮かび上がってくる。

彼方に立林する浦安のホテル群、あの辺りは昭和40年頃まで海であった。そしてディズニーランド、そこは江戸川河口の中州で『大



三角』と呼ばれていた。目を転じて江東区、あれに見える陸地もない。さて江戸川区はどうであったか。今の清新町、臨海町、この臨海公園も悉く海、岸寄りには葦が生え、潮が引けば果てしもない干潟に変わっていた。葛西市場の北側に旧海岸堤防の一部が残されているが、ここが岬の突端のようになっていて、海の家などがあり、海水浴や潮干狩りの人達で賑った所だ。

干潟は沖へ進むにつれ、大きな起伏を繰り返し、東側人工なぎさの沖合で最も高く盛り上がり、ここを『高州』と言っていた。今でも南風が吹くと白い波頭が上がるのでその位置が分かるという。立派な蛤が沢山取れた所だ。江戸川河口から干潟を縫って幾筋もの滞りが走っていた。水流によつてできる深みの中で漁師達の船道でもある。一旦沖に漕ぎ出せば、見えるものは房総半島と来し方に日本口ールの工場、季節によって富士、ただこれだけだ。船の位置や進路を決める重要な目印であった。冬、富士山の頂に雲がぼっかりかかるとやがて強風が吹き荒れる。漁師達はこれを見て帰路を急ぐのだ。

この海で春から夏は魚や貝を取る。秋から冬は海苔の収穫期、9月下旬、木更津沖の種子場にヒビ（竹から後、網に変わる）を建て、一か月程かけて海苔の包子を付ける。それを葛西浦に持ち帰り生長を待つ。河口の淡水が塩分の薄い極上の『葛西海苔』に仕上げてくれるという訳だ。とり分け1・2月は最盛期、身を刺すような寒風の中での摘み取りや家での加工作業の厳しさは到底筆舌に尽くせない。昭和30年代、日本経済復興の陰で東京湾は汚れ荒廃した。37年、遂に漁業権の放棄によって海との決別を余儀なくされた人達は、断腸の思いで転業していった。Mさんもその一人である。海岸堤防は高潮対策で嵩上げされ、まるでベルリンの壁のように海との交わりを閉ざしてしまう。海岸を失った江戸川区……、しかし、時を移さず遠大な構想が動き始めていたのである。20数年前に着手された葛西沖開発の一大プロジェクトだ。

ベールを脱いで再び登場した葛西の海、それはあまりに劇的であった。今、沈黙していた海が潮騒とともに語りかけてくる。この変貌は正に人知が生み出した奇跡ではないかと。（多田）

平成4年2月10日号

鹿骨花物語

江戸川遊歩

陽光が日一日と輝きを増してきた。新中川の水はぬるみ、水面をわたる風も心なしか暖かい。そんな気配に包まれて、俄に花が恋しくなり鹿骨を歩いてみた。さすが花の町、至るところ温室がある。中に咲き乱れる色とりどりの花を見ると妙に心が弾む。

江戸川園芸市場から威勢のよい競りの声が聞こえてきた。毎日午前中、曜日を变えて鉢物と切り花が売られていく。中に入っていると思わず息を飲んだ。何という見事な花、花、花。鉢物が次々とベルトコンベヤーに乗せられて買受人の前を通過する。この日の出荷はざっと250種、7万鉢、これが2時間以内にならなくなってしまうのだ。それでも2月は商いが一番少ない時であるという。最盛期には15万鉢が数時間のうちに売れていくそう。この花は江戸川産のものばかりではない。



切り花を入れ全国7千軒の生産者が出荷する。買手の方は関東一円、約500人が登録している。市場での取引額は年間35億円、これから春に向かってピークを迎える。

ところで東京の花弁栽培は入谷に始まり、やがて都市化とともに亀戸方面に、さらに明治の後半、江戸川に移ってきた。大正年間、

温室栽培も盛んになり、鹿骨に生産者が急増し、一気に関東有数の鉢物生産地としての地歩を占めていく。「東京の花暦は鹿骨から」と言われ始めたのはこの頃からだ。

今、この鹿骨を中心に江戸川花卉園芸組合員は65名で、生産、卸、小売販売の三部門に分かれる。締めて年商50億円、首都圏生活者に四季折々の潤いを届けている。特に朝顔、菊、ポインセチアなど、いづれも7万鉢は下らない。

入谷の朝顔市も50%以上は江戸川産だ。一昨年から小岩にも市が立つようになった。

鹿骨街道と東井堀が交わるところに鹿見塚神社の小さな社があった。狭い境内だが箒目を残してきれいに掃き清められ、付近の人の心が慰められる。社殿の前に鹿見塚がある。昔

むかし、常陸の鹿島大神が奈良春日に向かう途中、急死した神鹿の骨を祀ったという。鹿骨の名の起こりとされている。

都立農業試験場もこの地域の目玉の一つだ。2年前全面改修に取り掛かり、この5月装いも新たにオープンする。天に翼を広げたような大温室が早春の日を受けて眩しい。案内してくれた職員は、江戸川区の農家は実に研究熱心で恐れ入ると感服しきりであった。研究施設以外は公開され、鹿骨の魅力を高める新名所になりそうだ。

帰路、M農園に立ち寄った。ハウスの中にはさんさんと光を浴びて春の匂いに満ちている。サクラ草、サイネリア、ポリアンサスが咲き誇り、傍らでは早くも夏花の苗が育っている。当主は3代目、花づくりに打ち込んだ。だが生産緑地法の改正で先行きに不安な面もある。そんな話を聞きながら鹿骨という花の暖簾はいつまでも守り続けてほしいと思う。

深く神秘的な花の色に目を奪われながら、戦後の耐乏生活のさ中でも、花だけは不思議に売れたという話を思い出す。花は人間にとって永遠の恋人なのだ。(多田)

平成4年3月10日号

町の音色

江戸川遊歩

町には固有の音がある。それは、時代の変遷に呼応して、さまざまな音色で奏でられている。

花曇りの穏やかな午後、平井駅を降りた。荒川と旧中川に挟まれたここ平井・小松川地区は、区内でも最も早くに開けたところだ。特に、大正から昭和の初めにかけては、格別の賑いをみせていた。では、そのころ、この町にはどんな音が響いていたのだろうか…

明治3年、工業面で発展の先駆けとなる工場が、旧中川沿いで営業を開始している。醤油の醸造所だ。従業員2人ほどとはいえ、区内第1号の工場である。周囲と不釣合な土管の煙突が1本、ひととき目立っていたという。一方、交通網の礎石となる総武鉄道の平井駅が明治32年に開業した。後に省線、国電と呼ばれるこの鉄道は、当初一日に上下一本程度の運行だった。



黒煙を吐いて進む汽車の汽笛が、時折、辺りに飜した情景が目に浮かぶ。

大正に入ると市街化が本格的にすすむと共に、さまざまな娯楽施設も登場してくる。寿亭、田中亭といった寄席がそれだ。定員は150人前後と小振りだったが、安来節、講談、落語などを演目とし、笑いの源となっていた。

また、京葉道路の南側には、小松川電気館という活動写真館もあった。朱塗りの建物だったという。弁士の喜怒哀楽に満ちた名調子がいかにも良く似合ったことだろう。

さて、この館のすぐ南側を走っていたのが城東電車である。マツチ箱のような路面車で、工場の間を縫うようにしていた。その後都電となり、「チンチン」とのどかな音を立てながら昭和43年まで存続した。

官公庁もこの地域には集中

していた。区役所も今から60年前、小松川にあった南葛飾郡役所の跡地で開庁している。はじめは、東京府の土木出張所と共用の手狭な庁舎だった。そのほかにも、税務署、登記所、消防署などが町の中心にあった。

一方で、商業の発展にも目を瞞るものがあ

る。特に駅前商店街は、昭和10年ごろ、区内第一の規模となっていた。ここは、平井駅と小松川の双方から商店が伸びて出来上がったもので、南側半分にあたる春日町商店街だけでも、衣料品店、食料品店など100店舗を超えていたという記録がある。

また、平井駅西側の線路沿いには、三業（料理屋、待合、芸者屋）の栄えた一帯が広がっていた。柳の脇に赤い燈籠が点り、三味線の撥音がきこえてきた場所だ。最盛期には芸妓250人を抱えた、区内唯一の花街であった。ところで、ここまではおおよそ戦前の話である。この町の様相は戦争により一変してしまった。復興後、都市化の波によって、主役の座が入れ替わったかのように見えた…

とはいえ、現在では新しい街造りが進んでいる。小松川は防災拠点として整備され、平井では駅前を中心として再開発が取り組まれているのだ。

今、耳を澄ますと、春風に乗って町のざわめきが聴こえてくる。それはまるで未来への胎動であるかのように、心の奥にまで広がっていくこの町の音だ。（多田）

平成4年4月10日号

緑の風景

江戸川遊歩

初夏の煌めきがふり注ぎ、5月の風は薫る。この季節、街を歩くと、至るところで緑に出合う。街路樹や公園の木

立、路地裏の生け垣などが瑞々しく光り、歩道の植え込みの花は可憐に揺れる。これらの緑がどれほど心を和ませてくれることか。緑色は目に最も優しい色というが、都市はただでさえ自然色に乏しいこともあって、樹木や草花は我々が貴重な隣人とでも呼べよう。

ところで江戸川区の緑の風景というのは、以前はどんなものだったのだろうか。近年の街並みの変化は、どんな影響を及ぼしたのだろうか。

江戸川区はもともと低湿地帯であり、自然に生えた樹木というのは大変に少ない。これは、たび重なる浸水と地表近くにまで迫る地下水とによって、樹木の生育が阻まれてきたからだと思われる。従って、鬱蒼とした原生



ハス掘り

林などはなく、沼地や湿地に生える低木が主であった。ところどころに木立があったとはいえ、高木ということになると、比較的地盤の高い江戸川沿岸の神社仏閣や旧家の周囲に、生い繁っていたぐらいだ。今も、その中には樹齢数百年という老木が枝葉を広げている。

一方、農村地帯だった江戸川区の姿も忘れることはできない。江戸時代から新田の開発が行われたということもあって、この地の農業は長い間、稲作が中心であった。昭和の中頃まで、区内のあちらこちらでは、延々と田んぼの続く田園風景が見られたのである。昭和も後半期にはいると、田んぼと畑の比率は逆転し、農業の中心が、野菜や花卉栽培に移行したことが窺われる。

また、今ではその面影もないが、松江から船堀にかけての1帯では、蓮が特産品だったこともあり、蓮田が辺りに広がっていた。沼のような田の水面を蓮の葉が覆い、収穫期ともなれば腰まで泥につかって蓮根を掘る姿が見受けられた。夜になると、カエルの鳴き声が響いたほどである。

さて、これらの風景が変わり始めたのは、

高度成長時代にはいつてからだと言える。都市化の波は、次々と田や畑を埋め立て、造成し、宅地や工場用地に変えていったのだ。田や畑ばかりではない。以前は各地に点在し、子どもたちにとっての遊びの王国であった原っぱも、ふと気が付くと姿を消していたのである。

そんな中、都市における緑化という方向がクローズアップされてきた。およそ20年前に始まった緑化運動、これが現在の緑の風景の原点である。クスノキやイチヨウ、ポプラやスズカケノキといった常緑樹、落葉樹をはじめ、さまざまな種類の樹木が、今、街中で息吹いている。これらの大部分は、人の手によって植えられたものだ。

先日、久しぶりに小松川境川親水公園を歩いたときのことを思い出す。驚くほど樹木がこんもりとしていたのだ。幹は太く、枝のふくらみも一段と豊かになっていた。そういえば、この公園も完成してから7年は経っている。区内には、若い樹木がまだまだ多い。そう遠くもない日には、生命の香りでむせかえるほどに成長していることだろう。(多田)

平成4年5月10日号

紫烟草舎 の風

江戸川沿い

いつしかに夏のあはれとなにけり

乾草小屋の桃色の月

北小岩八丁目、三谷八幡神社の境内に残る白秋の歌碑にはこう刻まれていた。

江戸川の土手に立つと薫りを含んだ初夏の風が心地よい。眼前に広がる伸びやかな視界、遠くゆつたりと河が流れ、対岸正面の丘に栗山浄水場の塔が見える。国府台から左手の矢切へ、長く連なる丘陵の緑が鮮やかだ。しばし佇むと、かつて白秋が浸った閑寂がこの風景の中に偲ばれる。

大正五年三十一歳の白秋は、二番目の妻江口章子と結婚し五月中旬麻布から市川真間の手児奈廟堂のほとり、亀井院に寄寓する。そして翌六月末には早くも小岩村小岩田三谷に居を移すのである。

「そこにたったひとつ赤い郵便函の下った



市川市里見公園内の紫烟草舎

家、前は柴又と千住の別れ道、石の地藏が一体立ってすぐ下手に橋がある、これが矢つ張り地藏橋。橋の横手のこの草葺の家を遠くから見ると南に柳が枝垂れて風情がいい。(中略)その家を前の日河を渡って見に来た時の嬉しさつたら。」(葛飾小品)

白秋が借りた新居は軍馬用の乾草商の離家で八畳と六畳の二間続き、縁側がカギの手に回っていて八畳の部屋には床の間や違い棚もついており、家賃は五円であった。一見してすっかり気に入った白秋は翌日約束も交わさないうちに引越してきてしまった。

その日、土手に上って三谷の方を振り返ると、そこには広々とした葛飾の野、見渡す限りの青田である。大きな紅い太陽が西の空に傾きはじめ、ふとわが家の方を見ると細々と紫の煙が立ち上っている。

「妻がもう夕餐の煙を立ててゐる。私はたまらなくなつて茄子やもろこしの間を駆け抜けた。紫の煙！紫の煙！私は私達のこの畑の中の新居を、その晩、紫烟草舎と名をつけた。」(葛飾小品)

この頃、白秋の名声は揺るぎないものと

なっていたが暮らしの方は赤貧に耐える日々であった。しかし愛する章子と苦楽を共にし、世俗を離れて創作一途に打ちこんでいく。純朴な村人や子供達との交流に慰められもする。後年ここでの生活を基に「雀の生活」「白秋小唄集」「雀の卵」などの名品を著すが、高雅な白秋芸術の精神は、この頃深く養われていったと言われている。二人はここで一年を過ごす、思うところあつて次の年の七月、小岩村に別れを告げていく。

ところで当時の住居の位置は、今河川敷になつてしまつて定かでない。後の江戸川拡幅工事によつて百メートル後退し、現在の北小岩八丁目三十番付近に移築されたというから、およその見当はつく。しかしこの場所も再々の改修工事で所有者が変わり市川市大野町に移される。ところがここでも護岸工事にかかることになり、とうとう解体保存ということになつてしまった。結局市川市が寄贈を受け、今里見公園内に復元されて、白秋が愛した江戸川べりを見おろす位置に往時の姿を留めている。

河土手に蜜の臭い

すずろなれど

朝間はさびし月見草の花

(葛飾閑吟集)

(多田)

平成4年6月10日号

紫烟草舎 の風

江戸川を歩

江戸川の流に沿ってで
きた広大な河川敷公園、京
成江戸川駅はその玄関口の
ところにある。乗降客は平
均して一日当たり六千人、
区内にある十三の駅中最も
少ない。十二年前、鉄橋の
架け替え工事に合わせ、き
れいに改修されたが今なお
ローカルな雰囲気を残す長
閑な駅だ。

プラットホームに立つと
眼下に広がる江戸川緑地と
樹々が生い繁る国府台が一
望のもとに見渡せる。そし
て遙かな空に湧き上がる夏の雲——ふと詩情
をかき立てられるような趣がある。

最初この駅は「市川」と言った。大正元年
十一月、押上と江戸川間が開業し、さらに二
年後に江戸川を渡る鉄橋が完成して駅名も
「江戸川」となった。白秋が小岩に移り住む



白秋旧居付近から望む江戸川と国府台

少し前のことだ。総武線はこれよりずっと早
く、明治二十七年に本所（現両国）、佐倉間
が開業していたから小岩村と言っても都心と
さ程隔絶していた訳ではない。

谷崎潤一郎の初期の作品に「詩人のわかれ」
という短編があり、仲間三人と江戸川に白秋
を訪ね、帝釈天近くの「川甚」で遊び、柴又

の停車場から帰途につく話が
書かれている。その三人とは
作者と歌人吉井勇、劇作家長
田秀雄のことで、当時このよ
うな文人が江戸川駅から紫烟
草舎への道を往来したものと思
われる。

「朝早く起きて、井戸端で、
紫のあやめを見ながら顔を
洗つてると、まだ露にぬれた
田舎の一本道を、郵便脚夫が
手を振って来る。午ちかくな
ると豆腐屋も通れば、時折に
は、柴又さしてダリヤや紫陽
花をいっぱい載せた花屋の車

も前の土手を通ってゆく。江戸川べりの河舟
にゆけば新しいピンピンする鯉や鯰が買へ
る。肉類その他は、市川迄十二三丁行かねば
無いが、鐘詰で済ませば済む。野菜はそこら
中の畑から真青の奴をもぎてくれる。東京に
は近い。住み馴れて見たら、さほど不便も感

じまい。不便でもいい。私はこの地面にびつ
たり合つた生活がしたい。（中略）今庭の向
うの曼陀羅村の秦皮林を紅い燈をつけた
押上行の電車を通つた。あれは恐らく今夜の
最終のものだらう。」（葛飾小品）と昔日の情
景が偲ばれて面白い。

白秋は無類の子供好きであった。村の子供
達が毎日遊びに来て縁側の泰山木の下で朝食
が済むのを待っている。白秋は筆をとって子
供達の手の中に絵を描く。乞われるまゝに赤
い花、雀や蝸牛、蜻蛉、蛙、蛭など一人ひと
り白秋の前に来てみじのような手を差し出
す。土手に出ると野菊の中から一人の女の子
が現れる。父やんや母やんが「済まねえから
今度葡萄が熟つたら汝持つてつてやれと云つ
たよ」と言う。別の子に又出会う。先生はい
い人だから「今度玉蜀黍が熟れたら俺が持つ
てつて行るべえつて」と話してくれる。村の
若衆も仕事を終えたと「先生、唄はできて
かね」とやって来て、白秋の即興詩を都々逸
調に謡い興じるのだった。

紫烟草舎の傍を流れていた北小岩川は今親
水緑道となり、白秋が見た一面の青田は閑静
な住宅街に姿を変えた。だが味が味わつた小
岩村の人達の素朴な心の温もりは、今もこの
地に生き続けているに違いない。（多田）

平成4年7月10日号

地下鉄走る

江戸川沿歩

地下を抜け出た車両が鉄橋にかかった。進行方向右側に荒川の河口が広がる。斜め前方で高速道路がゆるやかな曲線を描く。背後には清新町の高層ビル群が林立している。

23年前の昭和44年、東西線の東陽町と西船橋間15キロメートルが開通した。およそ3年の月日かけた、荒川以東全線高架式という地下鉄である。

それ以前で区内の鉄道路線といえば、北部を走る国鉄総武線と京成線だけであった。バスが区内各地を結んでいたとはいえ、道路交通が輻輳ふくそうしていたこともあり、南部地域は余りに駅まで遠い交通の過疎地だったのである。

開通当初、東西線の区内駅は葛西駅のみであった。殺風景で賑わいと呼べるものもない



駅周辺。環七通りも駅広場もなく、民家や農家が周囲を形づくり、どうかすると潮の香りが漂うことさえあった場所である。ところがその一方では、ドーナツ化現象に象徴される都市化の波が打ち寄せ、無秩序な市街化傾向が見えはじめていた地域でもあったのだ。開通に先立つ昭和42年、この地域では、長

島、宇喜田、小島、新田という四つの土地区画整理事業組合が設立され、事業を開始している。町の体質改善がすでに始まっていたのである。そして、このような動きと並行して走り出したのが東西線であった。その銀色の車体は、文字通り南部地域の「夢」を乗せて「発進したのである。

当然のことながら、東西線はこの地域の変遷をつぶさに見ることになる。

完成当時、全長1236メートルの、日本で2番目の長さを誇った鉄橋である荒川・中川橋梁。この鉄橋は永らく葛西海岸の一部を200メートルほど横断していた。車窓からはコンクリート護岸と岸辺が見下ろせた。今の清新町の辺りである。鉄橋を渡る音が、遠く一之江付近にまで運ばれてくることもあった。音を

遮るものも、視界を邪魔するものもほとんどなかった。

それから10年後の昭和54年、当初から計画されていた新駅、西葛西駅が開設される。59年には葛西駅に現在の駅広場が完成する。どちらとも土地区画整理によって誕生したものだ。葛西駅の広場には、昔日の葛西の様子が偲おもばれるモニュメントが置かれている。題して『蓮の子』。雨が降ったとき、近くの蓮田から蓮の葉を取り、それを傘がわりにした子どもの像である。

さて、姉妹駅とも言える両駅の周辺に特徴的なのは路地がないということだろうか。計画的に整備された街並みは、古くから開けた小岩や平井などとは趣きが異なる。高層マンションや商業ビルが並び立つ景色には、広い歩道や規則的な街路樹が実に良く似合っている。若々しい街の表情がそこにはある。

——開設当時、葛西駅の乗降客数は一日8000人前後であった。現在は7万6000人、西葛西駅では8万3000人を超える。人々が集い、出会う場に成長したのだ。23年前に「夢」を乗せて「走り出した東西線は、たくさんの夢を運んできた。そして今もたくさんの夢を運んでいる。（多田）

平成4年8月10日号

地下鉄走る

(二)

江戸川を歩

満々と水を湛えた荒川。

対岸には建築中のビルが立ち並ぶ。その狭間から真新しい鉄橋が伸びている。試運転の車両がその先端に姿を現わした。銀色の車体が光る。見つめる人々の胸が弾む。レールの響きが風に乘ってかすかに伝わってくる。徐々に近づく車両に、大人も子どもも顔が一段とほころんだ。期せずして拍手と歓声が沸き起こる。待ち焦がれた新宿線が、荒川を初めて越えた瞬間——今

からおよそ10年前の光景だ——

東西線開通から14年、この日が来るまでには紆余曲折の歴史があった。鉄道誘致の動きそのものは実に昭和39年から始まっていた。区内でまだトロリーバスが走っていた時代である。昭和40年代にはいり、鉄道の運行は具



体化する。地下鉄10号線の計画が東大島まで延伸することになったからだ。当初、荒川以東は高架式となっていたが、それも地下方式へと変わった。

この時期、船堀から篠崎にかけての区中央部は、陸の孤島と呼ばれていた。都心へ行くには、バスで総武線か東西線の駅に一度出な

ければならない。1時間ないし1時間半は優にかかった。車窓からは蓮田や畑を見つけることができた。空地も目に付いた。そのような地に地下鉄が通るのだ。

昭和48年、東大島と本八幡間の免許が取得され、いよいよ本格的に幕が切っておとされる。その時点で、開通は昭和53年春の予定となっていた。ところがこの計画の前途には、昭和50年代になって俄に暗雲が立ち込めてくる。オイルショックと都の財政難である。

そのため、計画の縮小など再検討を迫られる事態に陥ってしまったのだ。

このような状況に直面して、建設促進の大会唱がおこるのに時間はかからなかった。区を挙げての国や都への度重なる要請行動、署名も5万3000人分集まったこともある。

沿線からだけではなく、鹿骨地区からも声は挙がる。それらの甲斐があり、昭和55年、鈴木知事の英断によって、待ちに待った建設が着工された。このときの駅名は一部今とは異なり、船堀・春江・西瑞江・篠崎となっていた。

さて、船堀から篠崎にかけては軟弱地盤である。地層も粘土層であったり、粘土と土砂が混合していたりする。建設にあたっては、それぞれの地層に合った工法が取られた。また、新中川の下を通るため、一之江駅は地下20メートル近くまで潜ってもいる。その上、新中川については、戦時中の不発弾があるとの疑いが持ち上がり、大規模な調査が行われたというところもあった。建設にはこのようにさまざまな困難が伴ったが、地元の協力は都営地下鉄建設史上初めてと言われるほど積極的なものだった。地下駅が駅ビルと駅前広場を持つていることから、この路線が町の核として期待されていたことが見て取れる。

——開通も間もないある日、篠崎駅に色とりどりの小さなリュックサックがそろうた。子どもたちの遠足だ。賑やかな列の中から声が出る。「わあ、ここから新宿行きの電車が出るんだ!」。ああ、この子の声は町の声でもあったのだ。(多田)

平成4年9月10日号

白帆の町

江戸川散策

秋の一日、水上バスでのんびり江戸川散策を楽しもうと、葛西臨海公園から船に乗った。

船上から見る景色は趣が変わり、新鮮な気分にさせてくれる。田山花袋の「東京近郊一日の行楽」（現代教養文庫）を手に今井の船着場に降り立った。

「白帆は東郊の特色だ。荒川にも中川にも墨田川にもある。しかし江戸川ほど白帆の多いところはなかった。『どうだ！あの帆』川がすべて帆だ』『皆な上流に登って行くんだね』とにかく奇観だ』：私は故郷から何遍となくこの川を往復した。それだけこの帆影になつかしみを抱いている」

そこに佇んでも往時の姿は残っていない。葉が深く繁り、白鷺や鴨が青空に舞い、川面に白魚の群れていた頃を知る人は、果たしてどれだけいるだろう。変わらないのは、豊か



な川の流れと往来の賑わいか。

花袋の紀行文はなかなか面白い。「昔は今井の船着を川口と呼んでいた。この水路（江戸川）は、昔から東北地方より江戸に入ってくる重要な交通路として役立って居たものであった。……従って、この今井の一角は、江戸に入る前の船着として、昔は非常に繁昌

したものに相違なかった。料理店もあれば、旅籠屋もある。飯盛女もいたに相違なかった。それが明治になって、汽船が出来て、すっかりさびれた。……しかし私は、その川口のさかえた名残をかすかに覚えていた。そこに、わずかに残った料理店があつて、私は祖父や母につれられて、船から上って食事をしたことを覚えていた。『川口に行けば、さし身が食える。それにあそこに乗って、あさりの剥身の汁を食うのが何よりも楽しみだ』……私の祖父もいつも其処でその汁を食うのを楽しみにした一人であつた」

江戸時代、物資の大量輸送の方法は、水上が主だ。河川の改修に拍車（はくしゃ）が掛かり、新川も開削された。行徳の塩を運ぶ長渡船（ながとせん）（行徳船）を利用した成田参詣も盛んになり、今井は人

びとの往来で益々賑わいをみせたのである。

明治になると蒸気船が登場する。「利根丸」「通運丸」「銚子丸」だ。当時の江戸川は浅瀬も多く、通運丸はスクリューを使わない外輪船だった。船内で駄菓子やラムネも売られ、弁当も注文に応じた。そのためか人気も高まり、陸蒸気といわれた鉄道に対し、「大蒸気」と呼ばれ、錦絵に描かれて売り出されたほどだ。大正八年「通船」「葛飾丸」という定期船が相次いで就航し、通学・行商などに大いに利用される。通船は白、葛飾丸は青に塗られ、競って航行する。この色を目印に、子供達はどちらが速いか賭けて遊んだという。

しかし、江戸川や中川に橋が架けられると、交通手段は陸上にとつて変わる。船からバス、電車からトロリーへ。今井はいつもその起点にあつて、時々様相を見せ、別離と邂逅（かいこう）の物語を遺してきた。都内でも珍しい交通機関の変遷を歴史に持つところだ。

公園の緑陰にいと、遊びに飽きた父子があいさつをしながら通り過ぎた。心が和む。見知らぬ人を温かく迎えてくれる人情は、今も昔と変わらない。（山口）

平成4年10月10日号

大河荒川

江戸川遊歩

秋晴れの美しい午後、小松川橋を歩いて渡ってみることにした。橋上、疾走する車を尻目に欄干から下をのぞき込む。荒川。なんと豊かな水量であることか。昭和41年まで「荒川放水路」と呼ばれた人工の大河である。

大きく右にカーブして海へと続く川面に、照り返しが揺れる。銀の魚の群れが踊っているかのような。橋を渡り切って土手を登ると、そこは広々とした河川敷で、秋の野草が風になびいている。この大河は周囲の喧噪を包み込み、滔々としていく。



荒川は秩父の甲武信ヶ岳に源を持つ。関東平野を南下し隅田川となるのが昔の流れだ。蛇行が多く、支流も豊富なため、有史以来、洪水や氾濫を繰り返してきた。明治以降の40年間だけでも、主な水害は30を数える。大雨が降れば出水に怯える、そういう状況が続いて

ていたのである。

明治も後半になると、さすがに地元住民からの、治水事業を望む声も強くなってきた。当時の東京府会・市会や埼玉県会も意見書や建議を国に提出している。殖産興業を旗印とした時代で、工場の立地が進んでいたことも治水を求める背景にはあったと思われる。

その頃の資料をみると、荒川の治水の方法として、改修によるものと放水路開削によるものの二つの方向があった。それが放水路開削に決まったのは、すでに下流（隅田川）周辺では市街化が相当進んでいたこと、開削の方が経済的であることなどの理由による。方向が決まったとはいえ、さてどこを掘るかという段になると、おおよそ四つの案が考えられていたようだ。その中には、小石川を通して神田川へ抜けるという、今では想像もできない案もある。残りのものは、千住の北を回るか、西を回るかなどの違いはあったが、いずれも中川へつなぐというものだ。結局、治水効果や当時の市街化状況などから、北区の岩淵町から千住の北を回る現ルートに落ち着いたのである。

開削は明治44年に始まった。工事はまず人力で河川敷を整え、機械で水路を掘削する方法で進められた。土砂を運搬する蒸気機関車が煙をあげ、馬に引かれたトロツコが行き交った。掘削で出た土砂は堤防の築造に使われた。仕事を求めて人も集まってきた。一方では、人命が失われる痛ましい事故が起きたこともあった。

開削によって移転など直接の影響を受けたのは、東京・埼玉の合計19町村に及ぶ。江戸川区内では、小松川村・平井村・船堀村の一部が水の底に沈んだ。

このようにして、延長22キロの大事業は、実に20年後の昭和5年に完成したのである。荒川放水路は、治水の要になっただけではない。舟運の確保も目的としていただけに、水上交通の発展にも役立つこととなった。

今、目の前に広がっているこの荒川も、完成から60年以上が経過した。〝人工〟という表現が不似合いな、風格さえ感じさせる大河だ。土手でジョギングや散歩を楽しむ人々の姿も、すっかり風景に溶け込んでいる。野鳥も多く集まる。時間がふっと止まる、不思議な空間と言えるだろう。（多田）

平成4年11月10日号

旧道往来

江戸川遊歩

八蔵橋の交差点から千葉街道を東へ歩いていくと、右の道端にコンクリート製の小さな

祠がある。納まっているの

は、文化五年（1808）

に建てられた道標だ。正面

に浮き彫りにされた像は何

の像だろう、長い歳月を経

たため判別することが難し

い。地に埋もれた台座の側

面には「両国マテ二里」市

河マテ一里」の文字が刻ま

れている。道標の前には白

と黄の菊、それに蜜柑が二

つ、そつと供えてある。

ここは江戸時代、篠崎に

抜ける河原道との分岐点に

あたっていた地点だ。河原

道は今でも新中川付近までは辿ることができ

る。車一台が通れるぐらいの細い道だ。工場

や住宅の間を曲がりくねりながら、ほのかに

旧道の趣を伝えてくれる。少し入ってみる

と、子どもたちのはしゃぎ声が木枯らしに

乗って運ばれてきた。広場でボール遊びをし



ているのだ。変色して硬くなった落ち葉が、かたかたと足元を転がっていく。どこにでもあるようなこの道が、数世紀も前から続いているとは。はたして、その昔人人は、どのような思いを抱きながらここを歩んでいたのか。

千葉街道に戻ると、暮れの気忙しさを呼び

覚ますかのように、車が間断

なく行き交っている。河原道

とは違い、こちらは一直線だ。

江戸時代、千葉街道は元佐倉

道と呼ばれ、逆井の渡しから

小岩の渡しに通じていた。ほ

ば現在の道筋と同じである。

逆井の渡しは安藤広重の『名

所江戸百景』にも描かれてい

る渡しだ。一方、小岩の渡し

は、幕府が河川に橋を架ける

ことを禁じていたこともあ

り、江戸と房総とを結ぶ交通

の要衝となったところであ

る。

ところで、元佐倉道は、宝暦年間（1751

～1764）の絵図にその名が見えるとはい

え、いつ頃できたかになると定かではない。

同じような名称に佐倉道（佐倉街道）があり、

千住から新宿を経由してやはり小岩の渡しに

通じている。佐倉道の方は幕府の直轄におか

れており、参勤交代の大名や成田詣での江戸庶民などの往来で、賑わいをみせていた街道であった。では元佐倉道というと、鷹狩りの将軍一行が利用した記録などが残っていないものの、格段の通行量を誇った程ではないらしい。江戸城の鬼門にあたるということでも敬遠されたという俗説もある。小岩や小松川には宿場らしい街並みができていたが、幕末から明治にかけて次第に寂れたというのが実情のようだ。

明治の初め、千葉街道と改称された頃の道幅は、二間二尺四寸（約4.5m）だった。今と比べ随分と狭い。また、大正時代の一日の交通量をみると約1000人、荷を積んだ牛馬車が約350台となっているから、実のどかなものだったことがわかる。

当時の様子を伊東銀河という郷土の俳人は、「十戸に満たぬ人家と松森の奥深いお宮とが千葉街道に沿うてあるばかり。（略）何となく前世紀の遺物の様に思われて甚だ懐かしい気持がする」と書いた。

——今、八蔵橋の袂に立ってみると、人々が歩んだその足音が聴こえてくるようだ。それは名もない人々の歴史の足音であろう。

（多田）

平成4年12月10日号

庁舎変遷

江戸川区

区役所は、これまで所在地を数度変えた。その度に地域の人々の熱い思いが込められた。今、その変遷の歴史を考えてみる――

「江戸川区」は昭和7年10月1日、小松川町・松江町・小岩町・葛西村・瑞江村・篠崎村・鹿本村の七か町村の合併で誕生した。

その背景には、大正2年の関東大震災後の郊外人口の急増があった。帝都復興後もそのままの地に定住する人も多く、江戸川区も例外ではなかった。この時35区が誕生。

しかし、江戸川区はすんなりと誕生せず、区域の設定、区名などをめぐり、住民運動はなかなか賑やかだった。

区域では、当初小松川町は亀戸区にという案も。だが歴史の繋がりからみて江戸川区に入った。

区域設定と絡んで区名も大騒ぎになり、各



町名をかぶせようと争い始めた。結局「本郡東部を流下する江戸川の名称を採り江戸川区と称す」（『東京市域拡張史』）となって、現区名に。

つぎは初の区役所庁舎の誘致が騒ぎとなった。松江町・小松川町・小岩町の争奪戦は燃えに燃えた。この争いは都心に直結している

地の利を主張して、当時江戸川区の霞が関といわれていた小松川町が勝った。

最初の区役所庁舎は、旧南葛飾郡役所を利用して開庁。5課16係（因みに昭和9年職員数250名）。

同時に、葛西派出所は旧葛西村役場を、小岩派出所は旧小岩村役場を使用することで、新しい江戸川区行政はスタートした。世帯数2万3000、人口は約10万4000人だった。昭和20年3月10日の東京大空襲により、歴史を刻んできた庁舎は焼失してしまった。そのため都立第七高等女学校（現小松川高校）一階を借りて、戦中戦後を乗り切った。

戦後の同23年11月、懸案の庁舎が現庁舎の位置に新築落成した。中央地域の人人にとって長年の夢の実現である。建設にあたっては

並み並みならぬ協力が寄せられる。敷地の確保、基礎工事、机などの備品類は、区民自らが組織した「庁舎建設協賛会」の資金で用意したもの。この時の人口はもう19万人を超えた。

住民の熱い思いは葛西・小岩も同様で、同24年支所の建設時には「協賛会」が結成された。戦後の財政難の時代、区は大いに助けられた。

この時期ユニークな事業がある。区営の浴場・ミシンの貸付・公益質屋・カナリヤの貸付などだ。

同30年代に入るとこの木造二階建ての庁舎は、戦後の建築資材の乏しい時代に建てられただけに、老朽化が激しく倒壊寸前に。そのため巨大な丸太の突っかい棒で支えられていたという。

その上、人口集中による事務増大、組織の拡大などから手狭になったので、本格規模の庁舎建設に着手。現在のグリーンパレスに仮庁舎を建て移転。一年後の同37年11月、鉄筋コンクリート造り五階建ての近代的庁舎が完成する。すでに人口は34万人になっていた。

その後各棟を建設、現在の姿になった。人口58万都市になろうとする江戸川区。人々の暮らしや風景を見てきた庁舎。活気に満ちた新しいふる里も見続けていくだろう。（多田）

平成5年1月10日号

境川昔日

江戸川遊歩

冬の陽が低く射し、周囲はほのかな茜色に染まる。ここは、小松川境川親水公園。ささ

やくようなせせらぎに誘われ、束の間の散策と洒落てみる。雪吊りの松や裸の枝々、岩から弾ける白いしぶきと清冽な水の流れなどが、街中にいることをふと忘れさせる。至るところで出合う趣向は目にも楽しい。

この公園も誕生から8年近くが経つ。親水公園として甦る前の小松川境川は、都市化により汚染された、いわば死んだ川だったが、その姿は今や記憶の彼方へと遠のいた。さらに昔ともなると、一体どのような表情をこの川は見せていたのだろうか……。

小松川境川は人工の河川ではない。雨水の排水路として自然にできた流路である。上小松村（現在の東新小岩4丁目辺り）から発し、



東西両小松川村の境を流れ、その昔は船堀川（新川）へと注いでいた。勾配が緩く水害の危険も多い川だったが、人々にとってなくてはならない川でもあった。殊に江戸時代から戦前にかけては、暮らしとの関わりが最も密で、それはさまざまな面から窺うことができる。

この川はまず第一に、農業用水路であり排水路であった。支流のような小さな用水水がところどころに引かれ、辺りの水田へと伸びていた。用水口には水神社が祀られることも少なくなかった。低湿地で渇水より洪水に怯えた地域のためか、水神への信仰も深かったようだ。

また、交通路としての小松川境川も忘れることはできない。水上では農産物や肥料をはじめ、生活物資、建築資材などを乗せた舟が往来していた。当然、河岸も設けられた。特に上一色村はこの川が唯一の交通路であったため、村にあった塚の越という河岸は、荷の上げ下ろしで大層賑わった。村人は天秤棒で野菜をかつぎ、舟着場に運んで市場に出荷した。

一方、川の水を飲料水に利用したこともあ

る。潮の干満によって水がきれいになったとき、濾過して飲んだのである。その水で赤飯を炊くと、鮮やかでおいしくできあがったという話も残っている。また、洗濯や風呂にも川水は使われた。風呂などは汲んだ水をそのまま沸かしたので、魚と一緒に茹であがったこともあったらしい。生活の川らしさが良く出ているではないか。

ところで、区内にはもう一つの境川がある。中央部を流れる一之江境川だ。この川も自然にできた河川であり、暮らして深く溶け込んでいた川である。明治初期の『東京府志料』によれば幅は5間から7間（9mから13m）とある。小松川境川は江戸時代後期の地誌『新編武蔵風土記稿』に8間（15m）とあるから、同じような規模だ。川の性格も似ており、辿った運命も似ている。親水公園化の計画も進められている今、その完成の待ち遠しい河川だ。

——さて、小松川境川親水公園に戻ると、欄干のそばで初老の男性と擦れ違った。リハビリに励んでいるのだろうか、一歩一歩を慈しむように歩んでいる。振り向くとその姿が陽溜まりの中にあった。春を待つ境川のほとりでのことだ。（多田）

平成5年2月10日号

小岩行進曲

江戸川散歩

水ぬるむ三月、小岩に春が訪れた。この町の朝はJR小岩駅から動き出す。六時半を回る頃から通勤、通学客で賑

わい始め、八時前後にピークを迎える。丁度入試のシーズンで地方からの受験生らしき姿も多い。今この駅の乗降客は一日平均13万5千人、名実共に江戸川区の北の玄関である。

昭和47年、総武線の複々線化に合わせ、鉄道は高架に、駅舎も近代的な装いに改められ小岩のイメージは一新した。フラワールード、昭和通り、区役所通り、そして北口通りなど道の形は

そのままなのに、街並みはすっかり様変わりして昔日の面影はない。昨年、南口広場の二層化工事が終り、見違えるように垢抜けた空間をつくり出している。何と言っても発展への地元の熱意と努力が実って、明るく活気のあるいい町になった。駅周辺の商店街を抜け



ると落ち着いた住宅街、かつての小岩らしい分囲気がそこかしこに残っていて懐しい。どこからか沈丁花の甘い香りも漂ってくる。灯点し頃、町は次第に表情を変えていく。繁華街は様々な光の中で輝きを増し仕事帰りの人達を優しく迎えてくれる。やがて有楽の巷は浮き世の哀歓を包み込み、更けていくのである。

駅に近い大衆割烹の主Oさんは、戦後間もなくこの店を始めて40年、この辺りの移り変わりを見続けてきた。だからついで、古の話にも花が咲く。その昔、この町は「かいわ」の異名で世に知られた。至る所に沼地があったため、蚊の発生が尋常でない。ブーンという飛行機音にも似て町中を飛び回る。路地や街路灯の下に蚊柱が立つほどだ。

また蚊帳への入り方が面白い。先ず、ローソクの火で外の蚊を追いつかう。素早く中に入って次は紛れ込んでいる厄介者を一匹ずつ火を翳して撃墜するのである。実は蚊だけではない。これを食べにくる蝙蝠の群れが宵闇の空を乱舞する。また、これを鳥もちで捕えて興ずる子供達。空を飛ぶものと言えば鬼やんま、赤とんぼな

ども沢山いた。

それにしても以前から小岩はよく賑わった所だ。何と言っても物価が安い。市川が高級住宅地、こちらは蚊岩といわれても、買物客は皆ここにやってきた。名物ベニスマーケットには衣料品、食料品、進駐軍物資など何でも揃っていて年中こった返していた。

Oさんが昭和6年に発行の「文化の小岩」という小さな冊子を見せてくれた。東京府南葛飾郡小岩町時代の町の紹介誌だ。著作兼発行者は新妻光三氏、石井伊三郎町長が序を著している。元瑞江村長海老原太郎氏作「小岩行進曲」なる詞が巻頭にあった。

むかし暢氣な農業地帯
今は文化の小岩町
區劃整理や交通便利
すゝむ發展目まぐるし
さかる停車場あの沖あたり
夜は灯の花パラダイス
書くや戀文札場の窓で
首尾の中會根かなふやう

(以下省略)

当時の發展目まぐるしい文化の小岩とは、一体どのような姿であつたらうか。

それにしても、小岩をこよなく愛し、町の繁栄を願う住民の思いは昔も今に変わらない。

(多田)

平成5年3月10日号

春色

篠崎水門

江戸川遊歩

春は誰にも待ち遠しい。それはさんさんと降り注ぐ日射しがあるからだ。その光を浴び

て、十日前、ここ篠崎水門の桜が待ちかねたように咲き誇り、春爛漫を告げた。

明治の末、日露戦争の戦勝記念で全国各地に桜が植えられたが、この桜もそういう謂れを持つ。勿論代は変わったが、なかなかの見応えだ。

人びとは花の下に集い、杯を交わし、放歌高吟してこの世の悦楽を満喫し合ったばかりである。今は早、葉桜となり日々刻々その色を変えていく。しばらく前の喧騒がまるで嘘のような静けさだ。

水門の上に立つ。区内にこれ程長閑^{のどか}で伸びやかな眺めがあるだろうか。上流に目を向けると、広い水面と空の色が一つになって、まるで青い宇宙を見るようだ。その空間を江戸川大橋が真横に分断する。



その左手前に川に突き出るようにポニーランドの馬場が見える。数頭の馬が陽春の河原を心地良さそうに疾駆する。芽をふいた高水敷の草むらから雲雀^{ひばり}が舞い上りそうな風情である。

下流は水上バスのステーション、その隣に堂々たるスポーツランド、とにかくこの界限は家族連れの行楽にはもってこいの施設や環境が揃っている。

先程水門と言ったが、ここにはもう一つ「閘門^{こうもん}」というものがある。これは水門で仕切られた上流と下流を船が通り抜けできるよう設けられた水路のことだ。水門の上と下では水位が違うため、パナマ運河と同じ理屈で水路の両端にゲートがあり、船が通る度に交互に開け、どちらにも水が流れないようになっている。だからここは水門と閘門

を合わせ、正式には「江戸川水閘門」と言う。この種の閘門は珍しいものではないが、最近では川を利用する水運が減ったため、現役で活躍している例は関東でも希になった。今ここを往來する船は冬期で一日10杯、夏は50杯程度であるという。

水門を渡ったところに建設省江戸川河口出張所の4階建ての白い建物がある。ここに立ち寄って所長の佐々木春喜さんにいろいろ聞かせてもらった。若く元気のよい人だ。「いやあ、この水閘門は丁度この3月、50周年を迎えたのですよ」から話が始まる。昭和5年、江戸川下流域を水害から守るためこの地点から真直ぐ海に向けて放水路が竣工、続いて昭和18年、江戸川水閘門が完成した。この水門は当然ながら放水路と旧江戸川の流水を適切に配分する治水上の役割を負う。しかしより大きな目的は異常渇水時に大量に塩分を含んだ海水が、川を逆流していくことを防ぐためなのだ。

大正15年には金町浄水場ができ、昭和15年には市川市も取水を始めた。飲料水だけではない。流域の農業や工業用水も必要だ。塩分が含まれることは許されない。時代が進むことで起きた利水対策なのである。

時に大暴れする水も日常は欠くことのできない生活基盤である。閘門を通る船のために職員は24時間の勤務体制をとっている。「江戸川区民、いや東京都民の暮らしを支えて50年ですよ」所長さんはさわやかな笑顔でこう言った。(多田)

彷徨する

荷風

江戸川遊歩

昭和11年、砂町から長嶋町（今の東葛西）
行きの乗合自動車に乗った永井荷風は、その
時の模様を次のように日記
『断腸亭日乗』に記した。

「比道は葛西橋をわたり
宇喜田町の堀割に沿いて東
行するなり。このあたり江
戸川区と称すれども水田麦
圃遠く海岸に達し、松並木
うつくしき田舎道幾筋もあ
り。むかしの大森海岸を憶
起せしむ。農婦赤き腰巻を
翻へし野川の流に蓮根を洗
ふ車は人家の間を走る。こ
れ葛西町なるべし。茅葺の
家多し」

当時の葛西橋は現在地か

ら300m程上流へ行ったところにあり、大
橋と小橋とに分かれていた。幅4・5mのこ
の橋を渡ったバスは、フォードT型というボ
ンネットタイプの車で、関東大震災後大量に
輸入されたものだ。定員は11名、大きさは今
のバスの三分の一位であろうか。粗末な造り



のこのバスは、震災後の応急交通手段と考え
られていた節がある。

さて、バスは東南に下っていく。松並木と
あるのは防風林として植えられた松のことで
あろう。蓮田が広がり水路が縦横に走る。今
では貴重な茅葺の民家が点在するその風景は、
田園と言うに相応しい。終点の停留所は現在
の雷公園付近にあつて荷風は

そこから今井へ船で上り、城
東電車に乗り換え帰路に就い
ている。

この行程は荷風にとって初
めてではなかった。別の日に
「電車道に沿ひたる。水田は
大方蓮の浮葉に蔽はれ、畠に
は玉蜀黍既に高くのびたり。
稲田には早稲青々として風に
なびき、夏木立茂りたる処々
には釣堀の旗ひらめきたり」
と、今井街道沿いの水郷風景
を書き留めている。

『断腸亭日乗』によると、
この地域を足繁く訪れたのは、昭和6、7年
ということになる。その頃麻布に居を構えて
いた荷風は、昼すぎ日本橋の病院に顔を出
し、その後足を伸ばすというのが常であった。
電車やバスを乗り継いだこともあれば、汽船
で訪れたこともある。

「宇喜田村の岸にて汽船より、陸に上る。
橋ありて堀割の水分れて田家の間を流る。岸
辺には竹藪あり老松あり、風景描くが如し。
岸に沿ひて歩むこと数町にして放水路の堤に
出づ。放水路は二條あり。東を中川放水路と
いひ西なるを荒川放水路と称す。二流の間に
築かれたる堤防の上に佇立めば、右も左も枯
蘆ばかりにて船も人家も遮られて目に入らず。
幽静限りなし」

この時は余程感じるところがあつたのかス
ケッチを残している。蘆の生い茂る川面と遠
くで煙を上げる2本の煙突の絵だ。河口の眺
めについては「荒涼寂莫として、黙想沈思す
るによし」とも述べている。

ステッキ代わりに傘を携え、川辺に佇んだ
荷風はこの時五十を超えていた。軍靴の響き
喧しいその時代、時勢に背を向けた彼が愛惜
を込め書き記した風景は、半世紀たった今で
はすっかり変わってしまった。堤防の上には
高速道路が走り、岸辺には高層ビルが居並ん
でいる。この変貌ぶりを見たら彼は何と言う
だろう。人の営みの営々たるさまに、その遅
しさに、驚嘆の声をあげるだろうか、それと
も彼が記した風物と重ねあわせ、時の推移に
黙想沈思するであろうか。（山口）

平成5年5月10日号

旧跡 御番所町

江戸川沿い

早朝、小岩菖蒲園に行ってみた。近くの人
が静かに散策している姿が見える。回遊式の
庭園には100種5万本が

植えられている。紫・白・
ピンクなどの花が鮮やかに
咲きそろっている姿は、さ
すがに圧巻だ。花びらの上
の滴が朝日に輝くと、それ
がたまに吹いてくる川風に
揺れて転がり落ちる。蜘蛛
の巣は朝露の重みで壊れそ
うだ。いつ迄眺めていても
飽きそうもない。

草滑りのできそうな土手
に登ってみる。川風を肌に
受けると、身も心も目の前
の風景に溶け込んでしま
いそう。江戸川に沿って、手入れの行き届
いたグラウンドが幾つも見渡すことができる。今
は野球の区民大会が真っ盛りと聞く。日曜日
の度に選手の歓声が揚がっているのだろう。
熱戦の様子が目に浮かぶ。

河川敷の野球場は、かつては強者共の決戦



角屋旅館

場でもあった。治承四年(1180)源頼朝
は、伊豆石橋山の合戦で平氏に一敗地にまみ
れた。再挙をはかって上総下総国を通り、国
府台の駐屯地からこのあたりを渡河して鎌倉
を目指した、と吾妻鏡にはある。

時代は下って、永祿七年(1564)安房
の里見義弘と小田原の北条氏康の合戦の舞台
もこの一帯だ。

この合戦で里見氏の家老の
家柄だった篠原伊豫は、その
後この付近の江戸川べりの新
田開発に尽力した。が、度重
なる江戸川の氾濫や改修で今
は跡形もない。ただ土地の古
老によると、伊豫の号をとっ
て道高耕地と呼ばれるところ
が、今でも市川橋の南方にあ
るといふ。

江戸時代に入るとこのあた
りはより重要な地点となる。
房総と江戸を結ぶ佐倉道が
通っていたからだ。江戸川に

はまだ橋はなく、「小岩市川の渡し」で行き
来していた。幕藩体制維持のため、元和二年
(1616)定船場として利用されていたこ
こに番所を置く。特に「入鉄砲に出女」を監
視した。番所は由井正雪事件ののちに、「小岩・
市川御関所」と呼ばれ、箱根の関所などと同

じく重要22関に入っていた。関所の位置は京
成鉄橋の下流50m程のところ、今の河川敷
グラウンドの中。その先に渡しがあった。八代
將軍吉宗も元文三年(1738)行列してこ
の渡しを通り真間山に参詣した。

関所の界限は御番所町と呼ばれ、旅籠屋・
小料理屋などが並び旅人で賑わったという。
今は江戸川の改修工事で跡もない。この中に
あつて創業300年をこえる角屋旅館のご主
人に話を聞く。「昔は成田山や慈恩寺参りの
旅人が、戦後は葉の行商人が、今は建設関係
の人が多かったです」残念ながら昭和36年改築さ
れたが、料理の味と親切、そして気軽な旅館
としていつまでも頑張つてほしいものだ。角
屋旅館の前に史跡の案内板がある。慈恩寺道
石造道標、常燈明など旧跡のことが解説され
ている。

京成江戸川駅の前を100m程北に行くと
N氏宅のアパートにミニ歴史館がある。明治
末から昭和30年代末までの食の生活史が学べ
て興味が尽きない。

駅前通りで人につかりそうになる。昔の
ままの道幅だ。バラの甘い香りと青葉にお
いが混ざりあつた空気を胸に吸い込むと、ふ
と夏の到来を感じた。(多田)

平成5年6月10日号

新川 歴史絵巻

江戸川遊歩

いくぶん湿り気を含んだ風に、古川親水公園の緑がそよいだ。閑静で落ち着きのあるこの公園も、誕生から20年目を迎える。流れに沿って歩いてみると、夏の日差しに耐えかねたのか、傍らで子どもたちが水に飛び込んだ。小さな手足が乾燥^{はじ}げば、川もまた燥ぐ。夏の風物詩となった情景だ。

緑陰を通り、赤の映える野瀬文橋を越え川下へと向かう。なおも行くと視界が開け、やがて護岸に囲まれた川に行き当たる。新川である。

新川の歴史は古い。全体は自然にできた水路だが、三角以東の直線部分は寛永6年(1629)に開削されたものだ。これは本来の流れであった古川が、狭い川幅で蛇行していたため、船の運航に支障を来したことによる。

江戸時代の新川は、行徳の塩や奥州からの



物資を運ぶことで、江戸の台所を支えていた。特に塩の確保は輸送路・新川の第一の使命であった。さらに、当時盛んだった成田詣での江戸庶民も、「番船」と呼ばれた客船に揺られこの川を往来した。

新川の通行量を誇るものとして、幕末から明治にかけての記録が残っている。それによれば、一日あたり米が1500俵、醤油・酢が1000樽、酒・油・味噌が150樽ほかとある。もっともこれはその一部にすぎず、他に材木・炭・綿なども運ばれた。また、各大名の便もあつたから、文字通り川面を絶え間なく船が航行していたのであろう。

水上交通路としての賑わいは明治以降も続く。全長20メートル、幅3メートルと小型ながら錦絵にも描かれた外輪船「通運丸」の就航はその一つだ。大正には定期船の「通船」・「葛飾丸」が運航、行商や通学に利用され沿岸の人々の生活の足となった。

しかし、このような交通路としての新川の役割は、昭和19年の通船廃止で幕を閉じる。戦後の新川は、昭和22年のカスリーン台風では濁水の防水陣となる反面、昭和33年の台風

11号では氾濫をするなど、数奇な運命を辿る。改修の手も幾度か加えられ、昭和40年には東西の水門が建設される。

水門と言えは昭和46年の事故が忘れ難い。秋のある日、西水門が突然開き中川の水が逆流、護岸を乗り越えた事故のことだ。誤操作と構造上の欠陥が原因であったが、これにより周辺の700戸余りが水に浸かってしまった。

さて、現在の新川は、東側から水を入れ、ゆるやかながら流れを保ち汚濁を防いでいる。その新川が、今年いよいよ親水河川に生まれ変わる第一歩を印す。都による工事が始まるのだ。いや、第一歩はすでに20年以上前に踏み出されていたとも言えよう。下水道整備に合わせ、大雨のとき雨水などを新川に放つという当初の計画を変更、ポンプ所を建設するなど将来新川が親水河川となる基礎を常に維持していたからだ。しかも、その地下には駐車場を建設するという一大プロジェクトを秘めて。

——全長3キロ、幅30メートルの新川。橋上からその水面に過去と未来の姿を重ね合わせる。すると夏の暑さもふと忘れさせてくれるから、何とも不思議だ。(多田)

平成5年7月10日号

落雷の ない町

江戸川遊歩

「雷」、これを「いかずち」と読める人は、恐らくこの地を知っている人しかいない。現在、東葛西4丁目と9丁目の一部を含めた辺りをいう。今は消滅した地名だが、雷町会、雷会館またバス停や公園にもこの名が残っている。

かつてこの辺は半農半漁の土地柄だった。明治36年ここに生まれ、ここで一生を過ごした森マツさんは、著書『葛西風土記』に往時の生活をこう記している。

「雷は一本道になっていて、江戸川から入江に入る舟が水門を入って、横手川に沿って両岸に家があり、そのころはおおよそ戸数は130戸ぐらいだった。東が江戸川、西が中川、北が新川、南が東京湾という四方水に囲まれた葛西は、どこに出るにも一度は船で渡らなければ他所へは出られない。……水に囲まれた葛西村にも橋がつつぎと架け



今に伝わる雷の大般若

られるようになる。大正になって電灯が点くようになった。今までは川の水を飲み、米を磨くのも、洗い物をするのも川の水を使い、洗濯も川洗いだ。昭和になって水道が敷かれるようになる。川水は海が近いので、満潮時にかめに汲み込むと塩水を汲み込んでしまい、また汲み直すなどいろいろ苦労があった

が、水道になって安心して水が飲めるようになって有難い。そんな遠い昔の話ではない。

浦安橋の下を通って雷の一本道、かつての下郷道を行くと真蔵院（雷不動）がある。真蔵院は天文年間（1532～1554）の創建といわれる。「昔、葛西沖でしけにあった漁師が、この寺の松にいた竜の発する光で助けられ、残された剣を不動にそなえたことから波切り不動に。その不動が大雷雨のときに雷を退治したこと、雷不動と呼ばれたと伝えられています」と案内板にある。

真蔵院には江戸時代から伝わる厄払いの行事で、毎年2月「雷の大般若」と呼ばれる奇祭が今も行われる。女装した若者が600巻

の大般若経を担ぎながら町内を走り回る。

この地の伝統芸能で忘れてはならないものが「おしゃらく」だ。今も祝いの席や祭りには必ず歌い踊っている。地域にいつまでも残しておきたい文化財である。

隣の雷香取神社に参詣して雷公園に行ってみた。お年寄り10人程がゲートボールに興じている。暑い日差しの中、汗を拭き拭き熱中している。その向こうに小さな山が見える。山の上から右手の方向に10m程のローラー滑り台が伸びており、子供達が歓声をあげて遊んでいた。滑り降りた先に船の形をした大型の遊具があった。ふと山本周五郎が書いた『青べか物語』に出てくる「雷の船大工」を思い出した。その誇りと技をこの公園に再現したのだろうか。

近くの旧江戸川の堤防にのぼると「武蔵野の道」遊歩道になる。川風が汗を飛ばしてくれた。ずっと南に行けば、甕った海の葛西臨海公園に出る。

住宅が建て替わり高層建築物も次々と現れている。

この「雷」の景観も日々変わっていく。が、若者も伝統の行事を守り、古くから続く芸能を後世に残そうとする人びとの心意気が伝わってくる町だ。（多田）

平成5年8月10日号

親水さくら

かいどう余聞

江戸川遊歩

公津村を發つて、佐倉惣五郎が小岩・市川の渡しに着いたのは、秋も終わろうかというある日の午後であった。古

くからあるこの渡しにも、先般、由井正雪の事件があつてからというもの関所が設けられていた。惣五郎は懷の通行手形をそつと確かめ、商人や旅人らと共に舟に乗り込んだ。

国府台の森を背に、舟は櫓をきしませて太井川（現江戸川）を横切っていく。

この川は、腰までつかるところをいとわなければ歩いて渡れることもできる深さだ。

船首のむこうには番所が見える。対岸に着けば江戸まではあと三里にすぎない。川面をすべる風が頬をさつとなでていく。

惣五郎は佐倉藩公津村の名主である。近年、領主が替わり、年貢や負役が増大した。取り立ても厳しく農民の中には家屋敷を売り払つ



たり、他国へ散っていったりする者も数多く現われた。あまりの困窮に、租税の負担を減らすよう、何度も役人に願ひ出た。しかし一向にらちがあかない。とうとう領内の名主が寄り合い、これはもう領主堀田家の江戸屋敷へ直接出掛けて嘆願するしかないと決めた。

そこで一足先に江戸へ向かつた名主仲間を追いつくべく、惣五郎は今、太井川を渡っているのである。

舟着場に下り立ち、関所を何ごともなく通過した惣五郎は、街道脇にしゃがんでわらじを締め直した。足元から続く水田は、およそ40年前に開かれた伊予新田という。周囲に目を転じれば、あたりは高い山もなくいたつて平坦であった。北には筑波の山が連なり、西には富士の頂が聳えている。ところどころに農家が点在し、古木は枝を伸ばしていた。……稲の取り入れも

終わつて、この地の衆はほっと一息入れているところだろうか、年貢は重いのか、暮らしぶりはどんなだろうか……。そんな思いを抱きながら、惣五郎は新宿へ、千住へと歩を速めた。

——それから数か月後、籠に入れられ佐倉

へと向かう惣五郎の姿がそこにはあつた。

……江戸に着いた惣五郎がはじめに知らされたのは、江戸屋敷への嘆願が叶わなかったことである。それならと、時の老中に訴えたが、それも実を結ばない。万策尽きた惣五郎は、

ついに単身、己の命とひきかえに將軍への直訴に及んだのであつた。

捕われの身となり籠に揺られている惣五郎は、ふと道端の水路に目を向けた。そばには落の臺が顔を出している。故郷の村のことがしきりと思われた。訴えによって租税は軽くなる、皆の暮らしも何とかなるだろう、しかし身内には累が及ぶ、ああ、断腸の思いとはこのことか……。

惣五郎を運ぶ籠は佐倉道をあの渡し場へと下つていった。頭上高く、鷹であろうか、鳴き声が聳した。

300年を経た今日、惣五郎が通つた道は、親水さくらかいどうになり親しまれている。惣五郎は、我が国を代表する義民として語り継がれてきた。芝居などで伝わるその姿は、後世の人々が創り上げたものだ。ただ、当時の過去帳から、承応2年（1653年）、4人の子どもと共に刑死したことが確認されている。（山口）

平成5年9月10日号

新中川秋景

江戸川遊歩

いわし雲がたなびく秋の一日、瑞江大橋のたもとで子どもの像を見つけた。バケツを下げ、竿を肩にかけたその姿は妙に懐しい。ふと、郷愁にも似た思いが湧いて、新中川沿いを歩いてみることにした。

赤い今井水門を背に、青いアーチの明和橋へと向かった。橋のむこう側には、緑地として整備された河川敷地が広がっている。ふた昔ほど前のことになろうか、ここら一帯の川岸には葦が伸び、水が引いたあとなどハゼが窪みで跳びはねていたものだ。橋げたではカニが走り、土泥を掘ればゴカイがうごめいた……

さて、なおも土手道を歩いていくと、釣り糸を垂れる人の姿が目に入ってきた。ススキやオギも生い茂り、銀の穂は秋風に揺れる。どこからか赤とんぼが飛んできて、まるで先



完成間近の新中川

導役を務めるかのように前方で上下した。その斜め先では、浚渫船が作業をしている。思えばこの川も完成から30年が経過した。しかし、その歴史となれば、開削が計画された昭和13年にまで遡らなければならない。当時、この地域一帯は台風など大雨のたびに、大なり小なりの被害を被っていた。その

原因のひとつに中川があった。中川には周囲の小河川の濁流がすべて流れ込んでいたうえ、俗に九十九曲りと呼ばれる屈曲の多い部分があった。たびたび出水していたからだ。特に昭和13年の水害は凄まじく、そこで急遽、河川の拡幅や堤防の嵩上げといった改修計画が練られるところとなった。その中のひとつが、中川の水を江戸川に吐こうという新中川の開削だったのである。

新中川の用地は葛飾区高砂から今井の先まで約8kmに及んだ。辺りは湿地や田んぼが広がる農村地帯で、先祖伝来の田畑を失うことから反対運動が熾烈を極めた時期もあった。そんな中、昭和19年には戦争の影響で資材や労力がなくなり、この工事は一時中断してしまった。折しも食糧困窮の時

代である。開削用地とはいえ、土地を眠らせておくことは許されない。そこで、以前の耕作者が農作物をつくったこともあったという。

工事の再開は昭和24年のことになる。これにはきっかけがあった。前々年のカスリーン台風だ。この時の被害が、新中川の必要性を文字通り痛感させたのである。

しかし、その後も財政事情や諸物価の高騰などから、開削は思うように進まなかった。10年近くの歳月が経過した時でさえ、半分程度が終わったにすぎず、その間、人々は水への不安から解放されたとは言えなかったのである。

とはいえ、昭和36年には今井水門の建設着工に漕ぎつけた。工事の大詰めだ。高潮と江戸川の逆流を防ぐこの水門の完成は、同時に新中川の誕生を告げることになる。そして、それは2年後のことであった――

開削で移転した家屋は約450戸だったが、現在は数え切れぬほどの家々が軒を連ねている。夕餉の灯がともったその情景を見つめていると、足元からはコオロギの鳴き声が聴こえてきた。開削のときの土で作られたこの土手で、営々と続く生命の響きであった。

(多田)

平成5年10月10日号

古刹巡礼

江戸川遊歩

大町桂月は明治39年『東京遊紀行』に「江戸川の右岸に接せむとする処に古刹あり。善

養寺といふ。小岩不動といふ方が、ひろく俗に通ず。

山門を入り本堂に腰かけて見たすに、境内ゆるやかに清泉湧き、山門の左に、

不動堂あり。山門と不動堂との間に、巨大な松の蠹々

として天を衝くものあり、これ星下り松也。山門の右

に鐘楼あり。その前に一大老松の横にひろがる者あり。

凡そ十間四方に及ぶ。支柱百を以て数ふべし。これ

影向松という。立てる星下り松に、座れる影向松を加

へて、東京附近、松の奇観はこの寺に尽きたり」と記した。

松並木の表参道から朱塗りの仁王門に近づくと、門に星住山の額があり、左右の仁王像

がこちらを睨んで迎えてくれる。境内に入ると影向の松が雄大な枝ぶりを四方八方に広げ



善養寺と影向の松

ている。

樹齢600年以上という老松は、日本で二の繁茂面積を誇っている。地元出身で元横網栃錦の春日野理事長からの、横綱推挙の碑が根元にある。実際に幹にしまれた綱が仁王門の北側に飾ってあり、JR小岩駅コンコースの像と同じものがここにもある。小

岩っ子として地元で親しまれた栃錦は、お寺で行われた子供相撲大会には毎年出席。子供達と遊び、励ましてくれたという。その土俵の土で作った横綱山もある。ふる里への思いと温かい人柄が窺われる。横綱山の南に2列並んだたくさん石のほこらがある。四国八十八ヶ所霊場でそれぞれの寺の土が下に入っている。四国遍路したと同じご利益があるそうだ。

今、境内では菊花大会を開催中。影向の松を取り囲むようによしず張りの花壇が作られ、丹精した鉢が何千と並んでいる。足を止める見物客が絶えない。中でもM氏の製作した、『錦帯橋菊化粧』は小菊600鉢を使って植え込んだもので庄巻だ。一年がかりで製作したものという。手間暇かけてつくる心意気に感心する。

ここでは菊花大会のほか、伝説にまつた3月の雨の植木市や、5月のバラ・サツキ展などが行われ、花や植木を愛好する人達でいつも賑わう。

善養寺は昔から伝説のマーケットといわれ、星降りの松、影向の石、むじな磐、袖かけ松、不動堀のどじょう、などの伝説が今でも伝わっている。

ひととき高く大きな銅葺き屋根の本堂でおびんずるさまの頭を撫でた。この木像は撫で仏として昔から親しまれ信仰されてきたもので、いたるところ禿げている。

お参りして西側の不動門から出ると、大きな和傘の碑が目に入る。「小岩村は傘でたつ」とかつていわれた名産地の記念碑だ。その隣に天明三年浅間山噴火横死者供養碑がある。噴火によって遠くここまで流れ着いた死者を祀って、十三回忌に村人が建てた碑だ。当時の下小岩村の人々の優しさが偲ばれる。

善養寺を後にしても気分は爽やかだ。それは高さを増す秋空、澄んだ空気、ほのかに薫る菊の香のせいばかりではない。ここに暮らす人々の素朴で温かい人情と、語り伝えられてきたロマンが、訪れる人の心を満たしてくれるからだろう。(多田)

平成5年11月10日号

感懷東篠崎

江戸川散歩

師走の喧噪^{けんそう}を後にして、旧江戸川のほとり、スポーツランドへと向かう。ここの自慢

は、スケートリンクだ。先立っても全国規模の大会が催された。この時季ともなれば、一日3000を超す人出で賑わう日も多い。中に入ると、皆思い思いの滑りを楽しんでいる。ふつくとセーターに身を包んだ子どもたちは、まるで寒雀^{かんせう}のようだ。おぼつかない足取りの子もいれば、きれいに大きな弧を描いている女性もいて、ここはもう、氷の世界である。

スポーツランドから旧江

戸川沿いに歩いてみた。冬の日差しがやわらかい穏やかな午後だ。しばらく行くと左手に造船所が見え、その間にこんもりと樹木の繁った妙に風情のある一角が現れた。入口に『江月寮』とある。本州製紙の接待所だという。その本州製紙の工場が、道路をはさんだ向か



大勢の人で賑わうスポーツランド（オープン当時）

い側、都営住宅と並んでいる。この工場は大正11年の創業というから今年で70年を迎えたわけだ。戦時中は軍需工場として操業していたため、爆撃されたこともあった。

昭和の初めから篠崎に暮らすMさんの話によると、隣の都営住宅の辺りはその沼地だったという。いくつもの沼が蘆などに覆われていたが、その後化学工場が

建ち、やがて東篠崎団地が誕生、今に至っている。この工場を囲むように流れていたのが篠田堀だ。正門前に富士見橋という橋が架かっていて、かつてはその名の通り、そこから富士が望めた。辺りは見渡すかぎり田んぼで、篠田堀の水は澄み、水遊びをする足の下で小石が踊った。四方には農業用水が伸び、人々はそので洗濯をしたり米をといだりした。その篠田堀は今工事の真っ最中である。来年には親水緑道としてせせらぎをとり戻すことになる。

篠田堀の西に篠崎街道が走る。土地の人はこの道を「土手」と呼んでいたそう。脇が一段低くなっており、そこに生えていたモチグサやノビルを学校帰りの子どもたちはよく

摘んだ。一方、旧江戸川の方は「桜土手」と言い、水門から遠く江戸川一丁目にかけて見事な桜並木で、春には露店の明かりが煌々と続いたという。

当時の篠崎は商店も少なく、対岸の行徳の方がむしろ盛えていたらしい。買い物などは行徳に向いて済ませたのだが、その足となったのが「三太の渡し」である。渡し舟は主に工場への通勤者に利用され昭和40年頃まで静かに川面を往来していた。何とものんびりした風景だ。

ところが、このように長閑な町にも、一転、大騒動の持ち上がったことがあった。昭和33年、工場から排出された汚水が旧江戸川流域を汚染、抗議の漁民たちが大挙して詰めかけた事件である。水質保全法などはこの事件をきっかけに制定されている。

——人家もまばらな篠崎の町が大きな変貌を遂げたのは区画整理以降である。昔を振り返りMさんは「今と違って何もなかった」と笑う。外はいつの間にか木枯らしになっている。しかし、どうだろう、Mさんの笑顔の向こうからは、懐かしい時代の情景が次々と訪れ、えも言われぬ温もりを残していたのであった。（多田）

平成5年12月10日号

ああ、古川

江戸川遊歩

運が良ければウグイスの笛鳴きを聞くことができるかもしれない、というので寒さもものは古川親水公園に出かけてみた。

真冬の古川は人影も疎らだ。自然の復活として再現されたこの川は、20年の歴史を重ねて深い味わいを感じさせてくれる。

枯れ葉が乾いた音をたてる遊歩道、水鳥がひっそりと羽を休める川面、残った熟柿が日差しを浴びて輝きを見せる一瞬……、派手さはないが心の琴線に触れる季節の形に出合える。

もとは塩の船道だったが難所も多く、寛永六年（16

27）三角渡しから東に直線の「新川」が開削され、旧水路は「古川」と呼ばれはじめた。

古川が塩の道だった証を今に伝える石仏——塩舐地蔵——が、突留橋筋向かいの西光寺門前にある。古川を通過する漁師や舟人が



昭和47年ごろの古川

塩を投げて、必ず礼拝したという。長い年月を経て容姿が崩れ、それがまた歳月を感じさせる雰囲気を出している。

流れに沿って、落ち葉を踏みながら遊歩道を進む。近くに住むUさんに話を聞いてみた。昭和30年頃、この辺りには30数軒の茅葺き屋根の家があったらしい。その頃は「夕方

になると三角の方から流れに乗って、金魚や鯉や鮒が泳いできた」こともあるという。「川で洗濯もでき、ここから葛西沖の海苔を採りにも行った」そうだ。実に長閑な風景が繰り広げられていたに違いない。

しかし、住宅が次々と建ち始め、澄んでいた古川の水も家庭の雑排水が流れ込み、悪臭のたつドブ川同然に。苦情の度にドブ浚いをするが、いちたちごっこにすぎなかった。こうした状況は区内に限らな

い。下水道普及率の高い区や都市は、河川を埋め立て道路に転用し、都市機能の利便性を優先する方向に進んでいた。

昭和46年、都は善福寺川や江東内河川に関するアンケートを付近住民に実施。家の前を流れる川に有形無形の迷惑を被ってきたにも

かわらず、驚くべきことに「河川を残せ」という声が圧倒的に多かった。住民にとって河川は無くってはならないものだ、とこの調査結果は示していた。

下水道の普及とともに不用になる河川。それを道路にして交通網の発達に利用するか、それとも清流を再現するか。そこには技術的な難問もある。だが決断は下された。

こうして古川はコンクリート道路をやめ、治水と利水、それに「水と親しめる川の公園」として甦った。

夏の古川は盛況だ。子供たちのカッパ天国になる。裸で泳ぐ子供たちの姿がいたるところに見られ、終日水飛沫があがり、元気な歓声がやむこともない。

少し行くと、流れのそばでお年寄りが笑顔で話していた。「ほかほか暖かいお天気は嬉しいね——」自然の中で温もりのひと時を過ごす。この土地で一生懸命に生きている人々の、暮らしの中でみせる憩いの風景であり、古川を愛し守り続けてきた掛け替えのない触れ合いの時間でもある。

背中に暖かい木漏れ日を受けながら、今度は子供と糞虫探しの競争にこよう。北風が吹かなければ……。 (多田)

平成6年1月10日号

探訪

名刹界隈

江戸川散歩

平井駅から地下駐輪場の工事を横目に、北へ3、4分ほど歩くと、豪壮な屋根が冬空に浮かぶ。「平井の聖天さま」として親しまれてきた燈明寺である。

総門をくぐって境内に入れば、すぐ右手に板張りの小さな家屋がある。『野菊の墓』の作者・伊藤左千夫が設計した茶室「無想庵」だ。当時の貫主は明治の文人と親交が深く、ここには左千夫を始め、正岡子規、長塚節、樋口一葉などが足繁く訪れている。その様子を窺わせるものに子規の「僧 参し本堂脇の茄子畠」という句がある。これは、台所事情の苦しきからやむなく畑仕事に励んでいた姿を「参し 畠」に詠んだもので、気心が知れた者同士を持つ親密さゆえか、ユーモラスである。

茶室の並びには本堂が聳え、境内中央奥には聖天堂が構えている。関東大震災で全壊し



昭和45年に再建された本堂は、宇治平等院風の三屋根造りがのびのびと雄大だ。中には、鹿鳴館の中央広間を飾ったシャンデリアが架かっている。聖天堂の方は戦後解体され、王朝風な現在の姿となった。

この平井聖天の開山は平安期にまで遡る。まだ平井が平江と呼ばれていたころだ。「江」

というのは海などが陸地に入り組んだところを言う。平井聖天もはじめは海辺の寒村にあったのだろう。一時荒廃したこともあるが、江戸時代中期には將軍家の御膳所にあてられ、のちには関東三聖天のひとつともなっている。このころの有名な逸話に、歌舞伎の名優・中村仲蔵の物語がある。これは平井の渡し船頭の子として生まれた仲蔵が、平井聖天が縁で長唄の師匠の養子となり、名優に成長するというものだ。聖天は人々の

間で子宝の神としても信仰されていたから、この話などはさらに参詣人を集めたのではなかろうか。

また、節分の日の火渡り勤行（柴燈護摩）も有名である。井桁に組んだ丸太に柴の葉をかけ、そこに火の付いた護摩木を投げ込む。

葉が燃え尽きると丸太をくずして護摩木の上に並べ、その上を裸足で渡るといふものだ。昭和10年代から始まったこの荒行は都内でも珍しく、多くの見物人を呼んでいる――

さて、平井聖天をあとにししばらく周囲を歩くことにした。隣の諏訪神社をのぞくと、朱色の社殿がまず目に付く。傍らにはひっそりと旧本殿があるが、彫刻に飾られたその外見は、江戸後期の様子を伝えて賑々しい。

思えばこの地は商工業が早くから盛えたところだ。聖天付近も住宅やビルが建ち並び、往時のあり様を想像することは難しい。旧中川が荒川に接する辺りには、勝海舟の別荘の梅屋敷があったともいうが、今はその面影さえない。ふと、そんな感慨にひたっていると、どこからか白い小さな息の塊をはきながら、子どもたちが脇を駆け抜けていくではないか。境内を走り回るその姿を見つめると、ああ、この子たちが成長したら、郷愁を込め聖天や神社のことを心に浮かべるのだろう、そして地域への愛情の芽というものはこのような時が育んでいくのだろうと、吹き来る北風にもまるで寒さを感じなかったのだ。（多田）

妙趣

平成庭園

江戸川遊歩

喧騒けんそうと言ったらず少しオーバーだが、都会の生活者は常にこれに近い状況の中に身を置いている。静寂とはどこか山間にも分け入らなければ味わえないものと、誰しも思っているに違いない。ところが平成庭園には正にその静寂があった。

いつも茶会や句会などで空くことがないという源心庵、その間隙を縫って中に入れてもらった。何とも言えない落ち着きが漂う数寄屋の一室、表替えを終えたばかりの畳の香が心地よい。障子をいっばいに開けると、縁越しに広がる山水の眺めは言葉には表し難いほどのものだ。

眼前の池は満々と水を湛たたえ、早春の日差しが波間にきらきりと光の帯をつくり、風の方角に流れていく。突然大きな水しぶきとともに鯉が跳ね上がった。するとその後にダイナミックなうねりの輪ができて岸边に向かって



雪の平成庭園

限りなく広がる。よく見ると沢山の鯉がいた。何種類もの鳥が樹々の梢と池の端を往来し、きき、ちち、とさえずりの声を上げている。時折、飛行機音や子供達の喚声が遠く聞こえてはくるが、却ってこの空間の静けさを引き立たせてくれるようだ。

満潮が近づいたせいか汐入りの池から溢れ出る水の量が増え、主池に流れ落ちる滝の音が高くなった。回遊式の園路を幾人もの人が通り過ぎていった。佇み、そしてまた歩を進める。常日頃忘れてはいても、人間が根源的に求めてやまないもの、それは心の静けさや安らぎへの回帰であろう。ここは私達にとってそのことを可能にしてくれるオアシスなのだ。

公園総面積は3万㎡、この広大な土地は昭和8年地元の篤志家田中源氏から寄贈され、以後、時代と共にさまざまな変遷をたどってきた。プール、野球場などのほか、戦災者収容のための応急住宅が立ったこともある。本格的な都市公園として形を整えたのは昭和45年であった。昭和50年代から60年代の初め、この公園で大規模なホテルの飼育が行われ、初夏ともなれば幻想的な光の

乱舞に人びとは感嘆の声を上げたものだ。

この頃、南側に自然動物園が誕生、北側半分は昭和62年から全面改修され、現在の姿に生まれ変わった。平成元年の完成を記念して「平成庭園」と言う。因みに公園の総称「行船公園」は田中源氏の家号に由来し、茶室は同氏の心を頂いて「源心庵」と命名されている。園内には氏の遺徳を称える銅像が立ち、台座に「公心如日月」と刻まれていた。

広々とした釣池で20人ほどの太公望が糸を垂れていた。それらしい出で立ちを見ると、皆余程の愛好家なのだろう。誰もが身じろぎ一つせず、じっと水面に視線を落としている。散歩の親子連れが興味深げに釣れるのを待つ。春めいてはいるが吹く風はまだ頬に冷たい。釣人達は今、この水辺でどのような境地に浸っているのだろうか。

完

2年6か月にわたり、皆さんと共に区内を巡り歩いた小欄ですが、今回をもってひとまず、お別れとさせて頂きます。長い間、ご愛読、ご声援ありがとうございました。それではまた会う日まで。(多田)

平成6年3月10日号

令和 2 年 6 月 発行
江戸川区 経営企画部 広報課

〒132-8501 江戸川区中央1-4-1
☎5662-0403 内線2132

